特別
イ4
1919
815

越人詩話

門 イ1 號 1919 卷 128
門 イ5 號 1380 卷 65
815

昭和十六年十一月一日寄贈
市島謙吉氏

イ5
1880
65

聲以宣意　言者不能使聖　人世無此
心地意氣不能推敲飛走鉛華之人　愛好吟咏之意活潑潑地
由此而起

話家人物志　佳興復守府事　卿文孔茂明著
井上西明氏、階安、仲龍、西明狂客ト號シ一ニ佩玄園ト号ス本性戸口氏ニシテ越州產ナリ南學ニ学ビ詩行修學ニ傳ヘ一代ニ山斗タリ文章ト共ニ文章ヲヨクス三家系ヲ養ヲ其業ヲ嗣ム子竹行修學ニ傳ヘ一代ニ山斗タリ文章
政和、歲ハ十年ニ月没ス　著述　詩話　鈔解　春秋鈔解　任義論　任齊十三篇　樂毋卿集
牛津　明和年間　四明十行　佩玄園文集　大本合集　近
先哲叢談　三園芸堂春戸氏之子為嗣潛字仲龍号西明学博行修早有重名今年八十也明信謹按古
男觀字賓全亦承儒職有稱四人　長天祥字微民次天祐字順民次天爵字錫民
皆善士也墓在慈溪　慈溪縣志

彩花　丹青　九山五方　之高　ヘ
幾日名花　開先九山之他の花　多り
由此觀之

仲者之筆傳竭力戎事
十年飲戰能以文稽仍
嫌或特待之春雁似春
似雁〻又傷世情多偽
〻〻私談未終〻〻〻

外未矣〻

越人詩話

七松山人　稿

山人近歲詩を戒むと雖ども、詩を話するを禁ずる能はず、二三同心と會すれば、話必らず詩に及び、詩、鄉先輩の作に係るものは、特に拳々を加ふ、或は解疵を評し、或は淵論を論ト、或は其人の生平に及び委曲詳盡を厭はず、遂に數年來話する所を擧げて以て之を筆し題して越人詩話と曰ふ、蓋亦越吟而使越人聽の意なり

靈臺公橫槊風流、本邦第一なり、嘗て能州を討ち、九月十三夜にあふ、營中酒を置き諸將士を會し、自から詩を賦して云く、「霜滿軍營秋氣清。數行過雁月三更。越山並得能州景。遮莫家鄉憶遠征。」英氣凛々、千秋の下人をして風采を想望せしむ、一世の雄と謂はざるべけんや、余嘗て北越古今の詩を通觀するに緇流の徒、偈を以て詩と爲すもの、公の前已に其人なきにあらざるも、廊廟雄偉の詞を唱へて、蹤筍の氣を一掃するもの、實に公を推さゝるを得ず、稱して北越の詩祖といふ亦可なり、豈唯鈐韜の家奉ト て以て神と爲すのみならんや

山城守直江兼續、上杉中納言公羅暫の臣なり、公を助けて機務を贊畫し、戎馬忽倥の際に處すと雖ども、心を文學に注ぎ、嘗て五臣註文選を刊せしとは、羅山文集に見ゆ、星洲梨洲翁曰く、少時米澤に遊び、上杉侯の文庫を觀る、中に山城守校訂の十七史ありと、勳業の緒餘此に仆ふ、所謂胸中間日月あるものにあらずや、賦詩女惜別に云く、「二星何恨隔年逢、今夜連牀散鬱胸、情話未終先灑淚、合歡枕下五更鐘。」辭京作に云く、「春雁似吾鄉思切洛陽城下背花歸。」二詩津坂東陽の夜航詩話に載す、凄惋悲惻、士女の春を懷ふが如し、人或は其武人の語に似ざるを疑ふ、然れども冦萊公宋朝第一の名相なり、胡仔尊其詩を評して曰く、含思悽惋、富於音情、殊不類其爲人と、眞性情あるもの率ね此の如し、豈獨り山城守を怪まんや

五山僧徒の詩、傳ふべきもの甚はだ多し、戰國兵火の劫を歷て、其集多く已に湮滅すと雖ども、林氏の本朝通鑑に錄する所を見れば、以て其一斑を窺かふべし、就中友梅元に入り偈を誦して刑を免かれたる如きは、其事尤も奇とするに足れり、頃者越後野史を見るに、亦梅が傳を載す、云く姓は源、氏は一宮、蒲原郡白鳥村の人なりと、古來浮屠氏の事蹟、附會に出るもの多しと雖ども、野史の傳ふる所をして信ならしめば、其詩は實に我が北越中尤も舊さものと爲すべし、梅年二十四、初めて元に入る、元主本邦聘を修めざるを以て、雪川の獄に囚し、將に刑を加へんとす、梅平然羅

れず、佛光劫兵の偈を誦す、云く乾坤無地卓孤節。且喜人空法亦空。珍重大元三尺劍。電光影裏斬春風。」刑吏之を奇として刑を停む、仍て佛光の偈を折して四偈を作る、云く乾坤無地卓孤節。可是藏身處沒蹤。半夜木人騎石馬。鐵圍撞倒百千重。」且喜人空法亦空。大千任是一樊籠。罪忘心滅三禪樂。誰道提婆在獄中。」珍重大元三尺劍。寒霜萬里飛光焰。髑髏乾盡眼重開。白壁運城本無玷。」電光影裏斬春風。寂若無神血濺紅。奪得須彌盧倒卓。潛身跳入藕花中。」又原韵を和して云く。百城煙水一枝筇。髑目無非是幻空。童子曾參無厭足。鑑湯爐炭起清風。」後押送京に入り、遂に西蜀に竄せらる、故に函谷關西放逐僧の句あり、一日峽に在り巖の上に坐して手に小南華眞經を披き、一紙を讀了すれば輒ち擘いて水中に投ず、人怪んで之を問ふ、梅笑て曰く、讀了すれば故紙のみ、復何の用をか爲さんと、元主其凡僧にあらざるを知り、召還して京兆翠微寺に住せしむ、凡そ元に在ること二十三年、遍ねく天下の名山古蹟を周覽して歸る、時に年四十、爲人莊重にして威儼あり、赤松圓心常て歎て曰く、我書て百萬軍中に出入して懼れず、只老聃面前片刻跪對すれば、威稜人に逼ると、足利直義亦齋を設け、梅が爲に履を進む、一時權貴の爲に重むぜらるゝ此の如し、遂に名九重に達し、詔を奉て建長寺を董す、示寂の後、追諡して寶覺眞空禪師と號す、號もと元主の賜ふ所なりといふ、夫一縞衣の身を以て、名兩國の天子を動かす、梅亦浮屠氏の雄といふべし、嘗て洛外の茶を愛し、栂尾に閒居す、貴人の來り問ふもの多し、因て詩を賦して云く、豈料山茶延洛客。白雲還逐馬蹄塵。其集名けて岷峨といふ、蜀に在る時岷峨山の勝を愛せしに因るといへり、德貴く道行はると雖ども、未だ嘗て懷を山水に忘るゝ能はず高風想ふべし、寛平法皇嘗て九月十三夜を賞して明月無雙と爲せしより、遂に看月の佳例と成る、其詩に見るゝもの、菅公の去年今夜侍清涼の一首尤も著はれ、之に繼ぐものは霜臺公檳榔の詩と爲す、友梅嘗て播州法雲寺に在り大龍庵を築き、落成會に是夕にあふ、海月清朗、臨眺絶はだ佳なり、因て詩を賦して云く、九月今宵正十三。清光照徹大龍庵。嫦娥應笑唐人癖。只把中秋作話談。」詩甚はだ巧みならずと雖ども、亦一癖故に備ふべし、

高僧の偈、機鋒敏活靈動、寸鐵人を殺すの妙あり、余深く禪を解せずと雖ども、常に喜で之を誦す、頃者洞上聯燈錄を見る、機緣語要の妙なるもの、顯窓の相逢秋色裏。共語月明中。」鼎山の石壓笋斜出。岸懸花倒生。」春室の春風無高下。花枝自短長。の如き風趣橫生、唐宋名家に減ぜず、他錄すべきもの甚だ多し、因て數人を拔て下に列す、然れども驛家の語要、必らずしも己れに出でず、間々古句を借用するものあり、乃ち此數聯も亦古句にあらずと謂べからず、只思ふ友梅以後霜臺公に至るまで、二百年間の詩、之を除けば取るべきものなし、豈疑似を以て棄つべけんや、邪子才曰く、讀書思之更是一適、失考誤傳、時に讀書をして之を思はしむ、亦何ぞ一適ならざらむ、

明白山慈光寺、瀧谷村に在り、楠中將の裔孫傑堂和尚の開基する所なり、岩船の耕雲寺上田の雲洞庵石瀨の種月寺と、洞宗の四大叢と稱す、寺老杉多し、大なるもの十圍に過ぐ、相傳ふ天狗の棲息する所なりと、交柯天を蔽ひ、陰森日光を見ず、一水曲折暗綠中を穿つて琮々聲あり、恍として神僊の境なり、傑堂の事世之れを知るもの多し、第二世顯窓亦名僧なり、初め堂に耕雲寺に參し、法弟南英と名を齊ふす、故に堂嘗て一箭、尋常落一鵰。吾今一箭落雙鵰。の語あり、上杉顯實其德を欽ひ、延請して雲洞庵を卓つ、堂入滅の後移て其席を繼ぎ、耕雲寺に住す、正長中州郡騷動して、豪民其莊園を劫奪す、顯實之を聞き、使を遣はして窓を迎ふ窓乃ち契券を以て盡く原主に付し偈を何して云く杖頭到處侶閑雲。種竹栽松一境濁。」徑ちに去つて雲洞庵に歸る、時に南英備州牛嗅山に在り、窓が退院するを聞き、遠く來つて其席を董す、既にして豪民改悔、諸莊寺に歸す、便ち窓を迎へて院事を返す、窓之に居て恬として固我なし、嘗つて人あり問ふて曰く、如何か是用心の處、窓答へて曰く、寒夜一爐火。渾家身上衣。」其の恬憺樂易の懷、蓋し天性に得るといふ、晚に復英を延て席を補せしめ、瀧谷村に來り、慈光寺を興復して之れに住す、五百年來靈跡依然、楠氏の遺物今猶ほ寺中に瀧す、蓋し窓が興復の力なり、示寂の後法弟盧廓順世す、亦た能く祖風を繼ぐ、句あり云く、百鳥不來春又老。不知誰是到庵人。

南英本薩摩の人、傑堂化を越後に問くを聞き、遠く來つて之れに依る、參堂數年、一旦忽然大悟す、便ち偈を呈して曰く、法身空解畫成蛇。一撥當機更若何。昨夜春巒風雨惡。和根吹倒海棠花。」堂之を印す、辭して備州の牛頭山に抵り、庵を卓て名づけて種月といふ、堂入滅の後顯窓其席を補す、豪民莊園を劫奪して窓引退するを聞き、便ち馳せて寺に到り院事を董す、既にして莊園舊に復す、窓を招て再び之に住せしめ、偈を賦して云く、一片祖翁閑宅地。耕雲種月已三年。功成身退是今日。擲轡鞦韆不上肩。」去て東奥に到り、茅

イ5
1380
65

を秘澤に結んで之に居る、窓瀧谷に移るに及び、英復其席を補し、衆に莅むと二十年、諸州の牧守其名を聞き、招聘するもの多し、廓遊多年。到る處宗教を毘翊し、法幢大に振ふ、晩に越後に歸り、地を石瀬村に相し、自から種月寺を營して退居す、山を牛頭と名づくるものは、舊隱の地を忘れざるが爲なり、

南英の弟子仲珊、瑚海と號す、永享中商舶に附して明に入り、天童山に掛搭し、十九年にして歸る、英が耕雲を主どるを聞き、往て省す、一日英の言下に於て忽然領悟す、偈を呈して云く、得時全躰迷空界。失處通身達本源。笛罷晩來人不見。江村依舊月黃昏。」參侍數年、悉く底蘊を極む、英が退鼓を打に及んで、席を繼で之に住し、祖風益々振ふ、赤田の洞福院赤澤の雲門寺、俱に其創開する所なり、洞福院瑞應山と稱す、

一僧問て曰く、山を瑞應と號し、院を洞福と名づく、未審し甚麼の瑞かあり、甚麼の福かある、海聲に應ず、て曰く、澗下溪聲傾法雨。巖頭雲樹聳花冠。尋常應答亦自から凡ならず

雷庵名は性隆、少して丹波に往き、圓通寺牧翁に參す、一日菩提園に在り、忽ち雷聲を聞て大悟す、因て雷庵と號す、數年の後辭して越後に歸る、州の大守轉輪寺を建て、請ずて開山と爲す、居常陞座說法せず、只打坐するのみ、其機に契ふものなし、衆深く示誨を求む、庵答ふるに偈を以てす、云く本來觸目現成了。莫怪生平不說禪。晩に翁の席を繼ぎ、圓通寺に住す、

桃庵本越後の人、德名顯著、詔を奉ずて能登の總持寺に住す、一日忽ち偈を賦して云く、北能江上漾扁舟。未値錦鱗徒弄鈎。收拾絲綸好歸去。蘆花深處一沙鷗。遂に去て越前に入り、心月寺を營して終老す、

鼎山衣鉢を瑚海に受く、初め雲門寺に住し、後少林山禪長院を開て之に住す、余其石壓笋斜出。岸懸花倒生の句を愛し、已に登錄を加ふ、弟子牧仲亦祖風あり、雲門寺の席を繼ぐ、山か小祥忌辰に云く、去年今日別師翁。我此山中佳節空。將謂少林消息斷。桃花依舊笑春風。

嘗て出湯村溫泉に遊ぶ、村中の古刹を華報寺と云ふ、林泉の勝あり、余其幽邃を愛し、日夕徘徊、意甚はだ適す、聯燈錄を讀むに及んで方に知る開山の僧德獄亦錄中の人なるを、初め耕雲寺に住す、後事を謝して之に老ゆといふ、上堂の偈に云く、夜聽水流庵後竹。盡看雲起面前山。眞境宛然以て楹聯と爲すべし

耕雲寺世々名僧を出す、德獄の後を嗣ぐといふ、上堂に云く、靈雲見桃、眼中著翳、香嚴聞竹、耳裏添砂、不如且恁麼過時、松西有恨蕭踈老、花爲無情坂次開。」禪

語家人物誌北海道稿、恵篇
平生著述ノ書ハ故ニ遺書ヲ有ナシ僅ニ門人ノ寫稿ヲ所ノ孫雲館遺稿六卷アリ
寛政三年九月廿二日沒年六十八此人字士新カ門下ニ
ヤ詩ヲ其子術必ヲ士新宋音ヲ信レタリトモアリ

語といふと雖ども、甚はだ風趣あり、弟子周剛亦句あり云く、曉來一陣春頭動。聞遍園林百蘂花。

林泉寺益翁、當代の高僧なり、霜臺公嘗て從て禪を問ふ、句あり曰く、石上栽花並結果。到頭元不假春風。名言傳ふべし、徒弟泰室亦た詩を善す、余已でに佳句を錄す

延寶天和の間、僧祖道なるものあり越後の人、加州に遊び、月舟に參し、高足と稱せらる、後濃州寶鏡山に住す、偶ま云く、從來不昧鏡臺顚。體用齊明滿一天。雖我住山巖鉗斧。無邊風月伴安禪。

隨園詩話に道ふ、郭暉遠家信を寄せ、誤つて白紙を封す、妻答へて云く、碧紗窓下啓緘封。尺紙從頭徹尾空。應是仙郎懷別恨。憶人全在不言中。此れ吳仁叔か妻の詩なり、又江西太守古松を伐らんとす、客あり諫して云く、遙知此去棟梁才。無復清陰護綠苔。只恐月明秋夜冷。誤他千歲鶴歸來。此れ維琳禪師の詩なり、余鼎山の石壓笋斜出岸懸花倒生の句を愛し、採て話中に入る、近日偶々古詩を讀撫し、乃ち此れ元人の句なるを知れり、嘗て隨園の孟浪を笑ふもの、今却て自から其弊を踏むことを免かれず、深く平生の粗鹵を悔ゆ、然れども禪家の語錄、古句を用ゆるもの多きは、余已に之を知る、而もこつ之を錄するものは、寧ろ孟浪の笑を受くるも、遺珠の歎なからんことを欲すればなり、若し夫れ謬を正し教を惠まれんとは、深く博雅の君子に望む所なり

詩人學なく、學人詩なきは、古今の常患なり、片山北海先生、經史淵博、卓然一家、生平著述を喜まずと雖ども、時あり韵語を爲る、亦甚だ清雅、專門家に減ぜず、賢者故と測るべからざるなり、先生名は猷、字は孝秩、新潟の人、早年京に入り、宇士新に學び、士新歿後、大坂に住し、帷を下して教授す、岸和田侯韓使の來聘ある旬に、例大坂の公館を司どる、文儒を用ひて應接に供せんと欲し、客禮を以て先生を聘す、先生亦觀光の美あるを喜び、之に應ずて廩給を受く、常て岡元鳳葛子琴賴千秋尾藤志尹田子明篠安道と詩社を結び、往來甚はだ歡す、時人呼で混沌社の七才子といふ、先生乃ち其盟主なり、詩專集なし、今多く散佚す、繼に春日遊江墅一律を錄す、云く爲逢佳境是。不問主人非。夢借池塘草。間敲江墅扉。雲遊寧有意。鳥語本無機。半醉繼欹枕。野花趁蝶飛。一聯の美、以て全鼎の味を知るべし

館柳蘆先生北越詩人の泰斗なり、當時學者專ぱら宋詩を崇尚し、尖叉風を爲す、先生獨り中晩を宗とし別に一幟を樹つ、著柳蘆漁唱二卷あり、松崎慊堂之に序

イ5
1880
65

して云く、幼眇圓轉、可以行於今而傳於後也と、然れども余の先生を稱する所以のものは、獨り此に止まらず、先生少ふして幕府に入り、仕へて郡丞と爲り、詳愼縝密能く其公に奉ず、一生赫々の名なしと雖ども、官長之を愛し、民吏之に安んず、當時の人皆其慈祥循良を稱す、故に其詩兼を使はす才を弄せず、溫柔敦厚、自から風人の旨を得たり、葛西因是嘗て評して云く、翁之詩無有不平氣、安分知命、亦鐵腹擊壤之類也と、大窪詩佛亦其一點不平促迫の語なきを稱す、今先生の集を讀に果して然り、彼の嘲世嫌俗妄りに以て高となすものと、適に其撰を異にす、有德者にあらずんば、烏ぞ能く此の如くならんや、余故に先生の重んずべき者其人品に在るを知る、而て後に益其詩品の高きを知る、栗軒偶題に云く、「老我塵懷進纔長官何意起儒夫。隱憐閑睡拋春去。優賞殘花地一區」敗屋修成歲啓端。家人相賀進春盤。屠蘇便是陵房酒。小醉薰然送臘寒」「朝來喜聽鳥聲和。從此韶光入醉哦。較覺今春々物富。東風添得一軒多」「矮窓排置小書床。素壁新泥爲一方。黃絹裝成古碑本。不妨全幅丈餘長」「獨坐晴軒烏角巾。新來鳥雀漸將馴。小園舊植幾株栗。錦里先生自不貧」「春園乘暇手親鉏。樹藝吾曾有舊圖。纍纍朝々只依樣。也將一笑種葫蘆」「集何日自經營。維鵲借來居且盈。鳩多不惜心性拙。朝々喚婦報天晴」皆安分知命の語、自然章を成す、固是所謂鼓腹擊壤之類なるもの、以て見るべし、又題高山官舍に云く、「高山官舍古城前。板屋粉墻連野田。遠郡寧愁常寂莫。明時到處即安便。」美調錦綉山中、萱茗裘宗獸寺後泉。況乃林壑奇賞足。淹留好此了塵緣」「高山飛彈山中の小邑、地僻にして民淳なり、先生其地に官たる尤も久し、滿耳江聲滿目山。此身疑不在人寰。」の光景あり人をして家の趙衆四川龍州に簽判たるの日を想見せしむ、「夏日即事の官齋涼意在心閒。半日靜居熱自刪。塵案拂來無片積。一函黃老對青山。」といふが如きは、眞に吏隱の風ありと謂ふべし、先生名は機、字は撝鄉、新潟の人、平生撰著書は多富む、林園月令一書、尤も博雅と稱す、古書を校刊するもの亦數十部、皆學者に益あり、「鬼魅を畫くは易く、牛馬を畫くは難し、柳灣先生金山雜詠乃ち畫家牛馬を畫くの手段なり、余常に之れを愛誦し以て集中第一の奇作と爲す、詞に云く、誰言上世邈茫々。煉石神功竹帛光。萬古晶然補天事。如今我欲說媧皇」「鎚聲遙響白雲涯。細聽磕々金石譜。山卒下來相報道。礦光今日不勝佳」「山丁陟險自蹤梁。負礦歸來意氣揚。小塊鎚摧淘汰去。礦中留得紫金光」「夢後山堂夜氣清。穿林落月弄微明。端知鬼魅堪驚走。燒石場中、霹靂聲」「短褐終朝汗不晞。礪礒女伴自依々。山歌齊唱古時曲。未識新聲全縷衣」「細泉和粉落礒流。板面鱗々全屑稠。憶得隅江槳舟夜。水光秋滿月波樓」「藍田舊種破瓜年。一朶山花髮上鮮。儉照打金槽裏水。時々顧影自相憐」「老孃持板石牀跚。泛去泛來整復斜。池波拍岸。山塢也見浪淘沙」「靜聽雄場鐵杵聲。覺窟情淸。自疑身是仙庭吏。煉石成金上玉京」本集每詩註を附し、細に採礦冶金の法を誌す、蓋し先生嘗て飛彈金山の吏と爲り、親から其事を監す、故に首々皆實驗に基づき、一語の虛泛なし、獨り詞家の欣賞に資するのみならず、亦以て史家の考証を助くべし、又「高山竹枝の詞に曰く、牙梳月樣製來新。雲髮當中出半輪。淸光剛道東山好。何似月梳巧照人」「粧成晚出八家坊。初八良宵初月光。鍛冶橋邊伴郎去。國分寺裏醫王」「細膩風光、楊次也王次回の下に在らず、獨り怪む新潟の佳麗遠く高山の上に出づ、而して集中竹枝只此二首のみ、曾て新潟に及ぶものなし、八千八水の風月、七十二橋の煙柳、長く寂寞を覺ふ、先生何ぞ故鄉の山水に翻かずと謂ふを得んや

賴山陽論詩絕句に云く、誰從唐尾占斷地。西有竹田東柳灣。竹田（名は憲字は君彝）高名世を蓋ひ、又能く詞を巧みにし小詩を善す、頗翁常に其才を稱す、然れども柳灣と並稱するに至つては、未だ好む所に阿ねるを免かれず、近時鷲津毅堂は乃ち曰く芳情惻好風情。妙手獨彈雲和箏。一樣晚唐同雅好。君彝何得比樞卿。持平の論、能く人をして首肯せしむ、余先生の詩を錄する已に十餘首の多きに及ぶ、自から謂ふ世已に定論あり、敢て余が表出するを待ず、而して柳灣漁唱刊本今已に多からず、余復爲に頃新標異せざるを得ず、因て自から尊劣を忘れ、更に初集中に就て數首を選んで此に附す、五律には秋夜獨坐書即事寄致遠に云く、涼意秋方半。西窗夜轉淸。漆雲遮月色。疎雨灑蟲聲。幽景供孤賞。小詩勞遠情。苦吟終不寐。殘火歌三更。七律には秋柳に云く、楓林染葉競鮮明。底事秋容太瘦生。裹纖不堪牽社燕。疎陰却憶着春鶯。凄々雨暗漢南路。凜々霜飛灞上營。惆悵文姬歸到晚。青娥老盡若爲情」一編別離情未休。眉裹影瘦不勝秋。江潭霜落鏡光冷。樓閣風高笛韻愁。京兆昔曾傳畫樣。靈和誰復問飈流。數株空憶古灣曲。黃葉紛々撲釣舟。五絕には漫題に云く我有小胡蘆。纔堪盛一升。留之江海底。勺水不可增。七絕には柳灣泊舟圖に云く、小舟吟風半推篷。泊在曉風殘月中。何處吾家響磯石。一灣春水柳朦朧。讀隋紀に云く千里春風堤柳斜。龍舟供奉盡宮娃。君王獨悔平陳日。枉翦青蕤一朶花。の如き皆音調風格

イ5
1880
65

、中晩名家に愧ず、又過賞送別處に云く曾賦銷魂傷別離、美人今已隔天涯。憑誰訴與江郎恨。南浦重過春草時。戲題吳生畫扇に云く月中標格雪精神。莫是羅浮夢裏人。只恐盡心描玉骨。却令他客喚眞々」怨蕊情苗爲寫眞。前身誤認星靈均。年來空守秋風約。結佩湘江別有人。遊仙に云く不向天台三十年。桃花流水夢茫然。忽被阮郎相伴去。老劉還復得逢仙」月宮陪隔桂花香。鏡見常娥十二笄。老骨秋寒住難得。霓裳聲裏下雲梯。の如きは全く西崑一派、近日茉莉園諸子、詩艶麗を尚ぶ、先生已に之か先聲を爲す、春日即事に云く、雛織小雨欲崇朝。土潤春園宜下鍬。山僮豫作霜秋計。矮竹籬邊秧菊苗。山村に云く松棚草舍兩三樣。新水繞閭護稗田。稼栗秋收無水旱。山村長占小豊年。の如きは亦家人の風趣あり、當時詩佛五山の輩最も此種の詩を喜ぶ、先生偶狡獪を弄し以て變通を示す、益其才の大なるを見る、

菱湖名は大任字は致遠、一號に弘齋新潟の人、書名一時を傾動し、流傳の廣き古今未だ曾て有らざる所なり、本姓は池田氏、其巷氏を稱ずるは何の故なるを知らず、或ひと言く、菱潟村巷氏の女、姙を懷いて寡となり、池田氏に改嫁して菱湖を擧く、故に巷氏を稱すと、方俗湖を呼で潟と爲す、其菱湖と号するも亦其本を謂れざるが爲ならんか、往年岡本黄石翁に謁す、翁嘗て菱湖を識る、余が爲に語て曰く、菱湖爲人豪放不羈、甚はだ酒を嗜み、量亦大なり、常に豪飲大嚼、醉ては則ち筆を援て揮灑數十紙興盡れば即ち筆を擲つて又た飲む、或ひは數日一紙を作らず、生平交遊獨り柳灣と善し、亦た好く詩を賦し、詩人を以て自から命ず、故に書を乞ふもの其酒酣に興熟するを伺ひ、墨を磨し縑素を拂ひ、近いて先生の詩を乞ふといひば、欣然立どころに之に應ず、否らざれは乃ち斥して云く余は書家にあらずと、其微旨ね此に類す、蓋亦一畸人なり余嘗て其書格の秀麗なるを見て、謂らく其人必らず風流蕭洒ならんと、翁の言を聞に及んで、頗る其不類なるを疑がふ、然れども菱湖の不類なるもの獨り書のみにあらず詩も亦整齊和雅、絶て豪放の態なし、浯眞村歸潮來に云く、秋城社近燕飛々。客夢連宵繞釣磯。書劍嗟余經歲滯。江湖羨汝及時歸。且看今後興懷足。休說從前心事違。正好映門霞浦水。一條淨碧濯征衣。秋柳に云く、弱質爭堪霜露清。一株憔悴已堪驚。幾曾眉嫵被人學。近日腰肢難自撐。芳草飛花猶入夢。疎煙殘照最關情。不須往事頻回首。腸斷風前暮笛聲。七月中元夜、自室珠津歸柳原村、途中即目に云く、幾隊花燈掛半空。歌聲笑語月明中。塍頭古墓無人祭。一點流螢照露叢。歸越後道中に云く、秋老蘋鱸未是歸。痴魂幾度夢寒衣。西風且莫匆々去。待我長竿上薔薇。天民墨竹に云く、玉立亭々湘水湄。月籠煙鎖更多姿。寫眞必賴文子。一片虛心是我師」脫洒何人更及君。湖州一派自超群。吟餘拂出檀欒影。思入淸瀟幾疊雲。寄懷栢山人如亭に云く、山人吟嘯今何處。故里頻年鴈影疎。吉備精廬見人說。也留一鶴守琴書。贈池無絃に云く、刻意何人似牧之。傷春傷別足奇思。且判茗芋排閑悶。不奈多情是酒悲。贈中居子綽に云く、疏通功就僅三年。唯見黄雲萬頃連。說向異時誰復信。北來渺々水涵天」鞠躬撫循四十秋。俯仰誰憐雪滿頭。只恐吏民貪借寇。不教夫子臥林邱。漫成に云く、三十學詩今五十。冀中未有百篇看。江湖到處問詩句。應爲山人風骨寒。の如き皆晩唐の神味を得、當時柳灣と並稱せらるゝもの其故なきにあらざるなり、著菱湖權歌一卷あり、手から書して之を刊す、今多く傳を失なふ、姑らく他書より數首を抄出して此に附す、亦以て大概を知るべし、或ひと云く、菱湖晩年狂益甚はだし、酒を使ひ人を罵り權貴を避けず、獨り柳灣を憚り、家人之を邀て至れば、盛怒の時と雖ども爲に容を改むと、蓋し柳灣に心折するもの深し、故に其詩亦自から之に近し

菱湖書法を自負する太甚し、嘗て一印を刻して上下千年といふ、蓋し眼中古今なきなり、一日北野菅公廟に謁し、盡拜虔禱して云く、晩生の書公の下に在らず、而して今人古を重むゝ今を輕んゝ、只公あるを知て晩生あるを知らず、公幸に垂憐せよと、又客あり古寫經一片を持して鑑定を乞ふ、曰く是れ僧空海の書なり、菱湖熟視良久して曰く、價幾何ぞ、曰く百金、乃ち大に笑て曰く、老頭陀惡書何ぞ其價の貴きや、余が書若し空海と時を同ふせば、今必らず千金に直らんと、此の事藤井顚岳余に語る、顚岳の家多く書を藏す中に夢遊月宮の詩を錄するものあり、巷法迂美、落花草に依るの妙あり其詩に云く、飄搖駒鶴遊廣寒、重門洞開瑤砌連。經門屢砌未遽進。青女素娥爭傳宣。々旨殿榜無人寫。特遣階禽爲相延。內命書具令捧出。安排王爐香案前。寶硯裝盛流琉璃。紫雲新樣神工鐫。玄霜秘墨鍊瓊屑。丹臼萬杵搗成鮮。三足玉蟾吐書水。滴々有似巖下泉。一幅五彩飛臺紙。兎毫之筆大如椽。種々人間目未覩。封之書與忽滴然。竊思世上鍾王字。俗姿何可供上天。謹案古法雲篆々。体標翔鸞鳳仝。書罷拜跪方進奏。桂花香動夜娟々。天顏有喜重宣旨。宜侍紫闈掌翰編。但是塵謫緣未滿。偶須地上作散仙。恍然一夢忽驚覺。衣袖依稀帶香煙。歎息此生天分薄。偶入

イ5
1880
65

仙宮即便還○却省痴想成痴夢○此生爭得出塵埃○只向江湖稱撑散○此心於我〻已堅○一生の抱負、夢中に假托して之を出す、何ぞ自から視るとの太はだ高きや、

杜審言曰く、吾筆當に王羲之の北面を得べしと、菱湖の夸殆ど之に近し、余始めて爛岳の言誣ならざるを信ず、然れども其詩專ら工麗を求めて氣格に乏し、唯以て近体に施すべし、古体に宜しからず是れ其書能く字を成すと雖ども、詩終に家を成す能はざる所以なり

北越の畵を論ずるもの、首に五十嵐穆翁を推す、穆翁名は俊明字は方篤、一號は孤峯、新潟の人、壯年京に入り、道を山崎氏の徒に問ひ、宇士新等と遊び、善詩を以て稱せらる、其畵初め狩野良信に學ぶ甚はだ意に當らず、因て諸家に出入す、一夜夢に一衣冠の人金泥の書十字を賜ふを見る、覺て自から占て曰く、天生十地成す、十は地成の數なり、吾業其成むと、終に狩野に非ず土佐に非ず、南北二宗外別に門戸を開く、嘗て一櫻を築て畵を學ぶ處と爲す、櫻を下らざること凡そ四十年、尤も人物に長ト設色に工みなり、遂に名一時に振ふ、然れども穆翁獨り老畵師を以て稱すべからず、親に事て孝、友に交る信、已に奉する儉にして人の窮を憐む、其行を察すれば則ち儼然老儒生なり、常て兒輩を戒めて曰く、畵小道と雖ども因て以て世敎を輔くべし、爾輩筆を執らば必らず賢哲の偉跡に於てし、謹で褻瀆淫藝の事を作して人を敗るべからずと、以て其道に篤きを見るべし、詩多く散佚す、藤非彌岳其手錄稿一卷を藏す、詩僅に二三十首、余尤も三笑圖の一首氣格高古なるを愛す、云く、千歲一三笑○此笑無古今○相視人皆笑○不似三笑心○他四皓圖に云く、千年高隱在商山○松桂花陰依舊寒○日暮採芝何處去○白雲深沒石棋盤○五仙圖に云く、五老仙經大篆文○崇山深隱幾重雲○人間甲子知多少○秦嶺漢興都聞○の如き俱に氣格あり盆蓮詩和片孝恭に云く、永日高堂上○盆荷花正稠○持供閒客賞○坐對野塘幽○香遠偏宜夏○風清早覺秋○世間多好事○誰及汝風流○氣格稍下るも亦復清雅喜ぶべし、穆翁詩畵常に呉俊明の三字を署す、或ひと云く呉氏は九條公の賜ふ所なりと眞に畵人の榮といふべし、

穆翁の三子、顧行元誠元敬、皆畵を善す、而して元誠尤も著はる、元誠字は仲勉、片原坊に住す、故に片原と號す、畵才天縱、弱冠已に名を知らる、尤も人物に長す、常て以爲らく吾技父に勝れりと、穆翁野馬の粉本を製す、片原密かに朱を以て其粉本を改む、數日の後も、穆翁偶〻之を見て驚いて曰く、何爲ぞ此の如くなると、悉く其朱を去る、片原大に怒ち、益〻其技を修め精研數年、聲名隆々として起り、殆んど將に乃翁を凌駕せむとす、而して天年を假ず、中道にして沮謝す、時人皆之を惜むといへり、余か家孔聖像一幀を藏す、筆法蒼秀、自から一家の風骨を爲す、浪りに名を得る者にあらざるなり、又た嘗て漁父の圖を觀る、上に一詩を題す云く、無心自去無心住○飄渺江天一片雲○亦天眞自得の風あり、

片原の男竹沙、名は主善字は巨實、一號は逸齋、徙て江戸に居る、能く父祖の家法を傳へ、畵品高雅出藍の譽あり、溪村に云く、幅曲溪村漲水痕、扁舟恍似溯仙源○數家鷄犬晴煙外○春遍櫨桃淡柳村○ 宛然一幅の殘絳山水、畵人の詩目から畵趣あり、

榕堂名は其遠字は子寧、亦穆翁の孫なり、其畵竹沙に及ばずと雖ども、詩の工は之れに過ぐ、送弘齋之東都に云く江碧山又青○ 儘且堪終老○如何淸高客○不住家山好○菊池五山其氣韻高古なるを愛し、收めて詩話中に入る、鳥湖觀蓮に曰く、探勝搜奇何有期○觀蓮八月未爲遲○鳥菱堪刺鱗堪炙○正是湖游最好時○亦誦すべきなり、

白井實字は伯華、新潟の人、岩田洲尾の鷗盟集其葛原歩月の一絕を錄す云く、白雲紅葉繞柴關○風景依然對淚顏○杳々詩魂招不返○霞時明月霽時山○自註に云く、往時陪北汀先生遊此、近聞先生歸道山、感愴殊切、故及之、北汀姓は呉名は其正字は必大、穆翁の孫、詩畵を善す、余嘗て其名を聞く、但未だ伯華何人なるを知らず、或ひと曰く、白井華陽なるもの亦北汀の門に出づ、是れ或は其人ならんと、華陽の著畵乘要略五卷あり、近日獲て之れを見る、乃ち知る名は廣字は士潤一號は梅泉、名字俱に異なり、或ひは後に更めし所か、將た復た別人か、卷首仁科幹の序あり、詳らかに其人を傳ふ略に云く、華陽弱冠江戸に遊び、文を龜田鵬齋に問ひ、後ち京師に入り、畵を岸卓堂に學ぶ、常に喜むで奇僧と相往來し、頗る禪理に通ず、又酒を嗜み談諧を善し、醉ば則ち談笑雲の如く興り、榻角風を生ず、眞に快活人なり、畵乘要略の一書乃ち其精力の注ぐ所なり、詳に本邦古今の畵人を傳し、宗派を分ち、系統を叙し、畵法の得失を論ず、識力俱に超なり、而して議論多く禪理中より來る、自得之妙不可敎、其可敎者、文字也、言語也、不能入至妙也、縱令有明師密授、不如自得、故得之於心、應之於手、手心相合而妙機自發といふか如きは、深く禪家不立文字の旨に

イ5
1880
65

合す、書道之變化、猶四時錯行而不極、左右旋轉無失宗派者、可以爲真工也、不可以南北爲優劣也、工拙雅俗各在其人といふに至ては、則ち又壹子才所謂詩無唐宋之別、惟以妙爲主と、事を異にして理を同ふす、以て詩道を參悟すべし、古人書より禪に入るものあり、華陽は則ち禪より書に入り而して詩に入るものなり、

柳灣菱湖秋夜同讀亡友中野子徵遺稿聯句あり云く、客舍蕭々落木愁○蕭城風雨暗深秋○(柳灣)對床漫說故山夢○篝燈挑盡夜悠々(菱湖)憶得同游長招集○風中吹笛月中棲○(柳灣)故人零落誰最是○可憐東野號詩囚○(菱湖)家無白水田二頃○詩成自比千戶侯○(柳灣)與來狂歌鷲滿座○醉墨縱橫走逸奸○(菱湖)算瓢屢空晏如也○曾無半語涉怨尤(柳灣)一旦窮死人不識○茫々江水空自流○(菱湖)歸來耦耕青山底○此約堪嗟今則休○(柳灣)爲把遺篇仔細讀○半是昔游半唱酬○(菱湖)眼明認取寄我句○滿江夜月釣魚舟○(柳灣)數行哀雁時叫過○嗅作謳鳴櫓聲柔○(菱湖)子徵名は穆、睡山と號す、新潟の人、五山堂詩話鷗盟集並に其寄柳灣一絕を錄す、即ち聯中言ひ及ぶ所のものなり云く、强支病骨獨居櫻○蘆葦寒生水國秋○人遠天長月如畫○滿江柔櫓夜漁舟○詩思憑遠憑に晩唐の風味あり、二老の知に愧ざるものと謂べし○然れども生平傳ふる所は只此一絕のみ、今復其人を知るものなし

藤田鼎亦新潟の人、字は君鼐、通稱は嘉內、鷗洲と號す、著刑山集あり、今傳はらず、寺門靜軒の新潟富史僅かに一絕を錄す云く、一襲涼雨濕青蒼○窓扇推時夜色闌○螢火似憐燈火細○流光點々照書來○口吻怜悧、才人に愧ず、

名家の後多く振はず、菱湖翁男あり百里といふ、書法遒麗實の風あり、惜むらくは早年夭折、名を成すに及はず、偶々近人の選集を閱す、館晟字は器卿なるものあり、乃ち柳灣先生の男なり、雨中に云く、花滿春園雨似糰○亞枝紅映小欄前○堪憐濕透臙脂影○却比晴時一倍鮮○筆情纖艷亦自から喜ぶべし、余聞く先生の男霞卿なるものあり、畫を善す、三十年前、一たび新潟に來りて蔓を省し、乃翁先生の故礎を招集して書畫會を開けりと、先生止一子あるのみ、霞舫は即ち器卿なり、一去杳然、復其存沒を知るものなし、館氏の家鉢、今之を傳ふるものは誰かや、

凡そ詩人才あり命なく、一旦澌然、姓名著述と俱に亡ぶるもの何ぞ限あらん、其惜むべきは固より論なし、乃ち顯士聞人其名幸に存して而して著述の傳へざるものと、愁人窮士遺篇幸に存して而して其生平考

不識何郡何的村人

諸家人物志

陳穀山名煥章字子文本姓十田氏自後改陳氏越後人家世頸城郡竹五村人名主ナリ穀山ニ至テ學ブ好ミ江戸ニ來リ學ニ講說ス其學ハ宋ニ訴諤シテ世ノ弄レ方正ニ拘々タルヲ笑ヒ放逸ヲ以テ自適ス並ニ師法ヲ確信終性一ナリ文化元年六月六日沒ス年六十三門人私ニ適滿先生ト謚ス著周易古傳尚書古傳毛詩古傳論語翼大成通言解駁府志選越風石印歌穀山子

穀山文集、穀山文集二篇アリ○松貞吉字子永初名文尉字叔約通稱村松典右衛門越後人南部門人ナリ

ふべからざるものとなり、亦俱に惜むべきなり、松貞吉高田藩の士、岑子陽地藏堂驛の人、刈羽郡に赤城山人あり、頸城郡に穀山樵夫あり、皆明和安永間の人、越後野史北越奇談諸書に見ゆ、是れ其名幸に存するものなり、而して世を距る已に遠く、著述の傳るものあるを聞かず、松山飮字は子楨なるもの亦越後の人、日本詠物詩其詠白一首を錄す云く、陪遊賦雪兎園還。一管寬來失豹斑○玉柄誰分大尉手。朱衣自拭尙書顏。月光如水櫻臺外○風浪飜銀渤海間。更向蘆花洲上望。翩々群鷺映青山○是れ遺篇幸に存するものなり、而して今其の人を問ふも、卒に知るものなし、嘗つて藤井彌所に語るに此事を以てす、彌岳曰く穀山姓は小田氏、其家米山の下に住す、故に穀山と號す、往年其書山水を觀る、疎秀愛すべし、上に春雨の一律を題す、時に小野湖山翁座に在り、其の屬對の工を稱す、事已に三十餘年を隔つ、詩今まで失す、僅かに今朝醫柳綠鮮明の手を記すと、眞に是れ吉光の片羽なり、十襲珍重せざるべけんや

作詩已に難し、選詩更に難し、余嘗て加藤北溟の名を聞く、岩田洲尾の鷗盟集竺雲洞の北越古今詩選に錄する所を見るに及び、其詩平々奇なきを疑ひ、以て學人詩なきものと爲す、既にして其全稿を得て之を讀み、始めて洲尾雲洞選で精しからず、終に名家をして地下に寃屈せしむることを知れり、先生名は明字は文卿、村松藩文學、嚼經咀史の餘、兼ねて詩文に巧みなり、著述甚はだ富む、戊辰の亂兵燹に罹り、悉く烏有と爲る、只詩稿一卷族人某烈焰中より出し、今其家に藏す、各體編を分ち、凡そ一千餘首、大抵七子の氣格を學ひ、才識書卷を兼用して之を行り、死套に陷す惜むらくは卷首數十頁燒痕紙を貫き、古風一體半は已に殘缺讀むべからず、近體中七律最も巧なり、和新井君秋日の作に曰く、桂香秋滿白雲廬○同病憐君賦卜居○湖海未歡豪氣盡○風塵漸覺故人疎○氷心曾對玉壺酒○金馬誰窺石室書○料識終年長臥閑○寧能不憶武昌魚○中秋寄稻子氷に云く、獨作良宵却獨遊○大邊回首望悠々○怪花香滿蟾蜍靜○海霧氣晴鴻雁愁○人爲倚樓催作賦○誰能對酒不忘憂○唯憐所憶隔千里○難贈白雲江上秋○歲晚感興に云く、負郭蕭條一草堂○衡門散帙送年光○竹深鳳尾風雨松古龍鱗微雪霜○名藉文章何必著○憂懷盃酒且相忘○南山自有陶家趣○贏得寒廚臘釀香○乙巳元旦に云く○又開四十五齡春○猶見青袍席上珍○白雪歌殘無和者○玄經草罷待何人○倦遊千里催吾老○薄宦天涯驚歲新○笑此栢枝懸大橘○辛盤今日未全貧○寄紀君山に云、朱門先達蹇華簪○憐爾彈冠湖

イ5
1880
65

海濱。疎馬黄金誰買骨。齋竿白髮漫論心。幽闌花瘦秋風動。叢桂陰涼暮雨深。共說龍蛇潛大澤。何人更復解相尋。漫興に云く、玄經草罷髮毛斑。禄隱先生在世間。負郭居如綠野曠。對山人似白雲閑。繞廬竹樹鳥棲息。開逕蓬蒿僧往還。幸是不從刀筆事。寥々永日鎖柴關。

中秋に云く、良宵獨上高樓陰。山靄看消海霧沈。萬里秋空懸一鏡。千家夜色倚孤琴。賦辭多乱謝莊思。蹴鞠猶憐荀粲心。只道金尊憂可遣。縱逢搖落淚難禁。の如き莊重雅健直に崆峒の壘を摩す。末一首蓋し亡の作、情文雙び至る。佳句七言には衣冠當日周元士。劍佩如今漢太夫」「經人老終何補。萬事天成不可希」「櫛吾解脚超遷日。哀花低殘孤村樹。淺水分流獨木橋」「慚吾解脚超遷日。病子委裘窀穸年」「盃裏聖賢聊遣興。琴中山水少知音」「病夫枕上吟詩起。痴叔體中讀易佳」五言には八風三更月。蟲吟四壁秋」「論文無客。學稼有農師」官元非近利。詩豈爲浮名」未擬閑居賦。猶成吏隱名」の如き俱に誦すべし、先生本尾州の人、本姓中川、故あり加藤氏を稱す、少時江戸に遊び、古賀精里等と角逐して才名を馳す、村樫侯の聘あるに及び、一大侯更に俸禄を厚くして之を招く、先生辭して曰く、勢利の爲めに去就するは士の愧づる所なり、村松侯は先聘なりとて遂に之に應ず、食禄二百石、爲人恬澹寡慾、家事を顧みず、冬夏二季賜ふ所の俸米を友人金に換て之を與ふ、輒ち金を盆に盛りて戸外に放置し、討逋者の攫取するに任す、以て其襟度を想見すべし豈唯だ詩の傳ふべきのみならんや

市島岱海名は蕭文字は敬季、水原の人、家故と豪富にして姓讀書を好み、龍草廬に從つて學ぶ、博洽究めざる所なく、能く詩文を屬す、著岱海堂文集十五卷あり吾友市島春城其孫なり、新潟に寓居す、一日往て訪ふ時に會々書を曝す、縹緗滿室、芸香紛披たり、余數冊を取つて之を見れば即ち岱海堂文集なり、詩七字を宗とし、古文尤も工雅なり、余甚はだ之を愛し、借て而して返さゞるもの年餘、春城適々東京に徙り、發するに臨み、奪ひ將ち去る、余久しく越風を採るに志あり、一詩人を得れば必らず其佳句を選す、獨り岱海の詩抄存せず、今多く忘失す、僅に秋夜和姪大美を記す云く、耿々愁長夜。殘燈焰半消。枯蓬風漸々。落木雨蕭々。所憶隔千里。不堪終一宵。古琴猶在壁。獨坐爲誰調。春城氏に泰西の學を修め、年少名を知らる、近ごろ政治原論の著あり、世其才識富贍を稱す、而して祖訓に出るを知らざるなり、岱海堂文集大武元朗の序あり、越後呼史に道ふ、元朗東閣と號し蘗光齋と稱す、

新津の人五歳にして書を善す、新發田侯召見して神童の稱あり長ずて岡白駒に學び、博覽强記、能く詩文を屬す、學海通鑑二十三篇を著す、亦是れ卓然一家、而して身後寂寞、遺著久しく湮滅に歸す、余が鄉新津に隣ると雖ども、岱海堂文集を讀むにあらざれば、亦東閣あるを知らざりしなり、古人云く、傳不傳有命と信なる哉

水原文士多し、而して一門風雅三浦氏の如きものの少なし、三浦氏名は寛字は士栗、九折と號す　村瀨栲亭に學び、儒雅風流、最も軒岐の術に精し、二兒あり、長なるもの名は耕字は長農、鷗沙と號す、經を大田錦城に受け、詩文を葛西因是に學ぶ、不幸短命にして死す少なるもの名は耘字は少農、采亭と號す、醫を以て藩所本多侯に仕へ、江戸に住まること二十年、兄の喪を以て鄉に歸る、三人並に文を好み、才名籍甚、宛然蘇家の父子なり、惜むらくは戊辰の兵燹に遺稿悉く盡す、獨り鷗沙の晴餘堂文集、門人原某の家に藏す、因て冤かるゝことを得たり詩甚だ多からず、而して傳ふべきもの多し、皇祖考東里君三十三回忌辰に云く、秋墳宿草雨垂々。拜薦蘋蘩淚不支。三世遺風守貞白。一家餘慶長孫兒。道元仁術君何謬。手是國醫誰不推。三十三年猶昨日。長思藥下課書時。「詞意淳厚、仁人の言に愧ぢず、他は淺草僑居に云く、自笑書生々計疎。市囂遠處買居移。一車堪載無多具。半笥猶藏永定詩。汲井先知茶味稱。開爐恰喜酒懷宜。四隣遮莫多生面。梧竹相迎似舊知。訪穴澤松卿に云く、偸閒偶叩故人扉。談笑何論是與非。半箔輕風松影動。一籬疎雨稼聲飛。茶煙出院香初散。吾色侵階翠未晞。盡日與君相對坐。斜陽窓下澹忘歸。山齋閒霽に云く、林麓日升花影明。溪風徐度窓煙清。青山勸我移家去。先食半窓聞曉鶯。秋江に云く、秋江日落水煙溟。何處漁歌迷遠汀。月色潮光同一氣。柳陰依約數燈青。の如き俱に誦すべきなり、蓋し鷗沙は三蘇中の長公なり、長公の才、之れを父に受て弟に傳ふ、其詩を讀まば併せて老蘇小蘇の詩を知るべし、

三浦嬀村名は端字は東作、乃ち采亭の子なり、少年埼苑、新潟竹枝一卷を著し、是を以て名を得る、小野湖山翁詩を贈て云く、君是再生揚次也、新編々出竹枝詞何ぞ三浦氏の才人多きや、詞に云く、棹唱花歌欲暮時。翻波如雪白參差。商帆南去漁帆北。一樣風爲雨櫟吹」紅橋楊柳送行舟。隱映春風畫櫂。珍重腰纏錢萬貫。不勞鶴背上揚州」後頭娼戶前頭寺。一水中分兩種情。樂土不知眞孰是。按歌聲接讀經聲」玳瑁鸞鋼錦繡裳。

イ5
1380
65

白山廟下闘新裝。金蓮移步春風裏。一路珠塵蹴履香」皷聲鏗鞚閃華旗。此夜隣坊祭小祠。韓道猜燈人絶倒。携郎手去讀多臂」皷聲燈影逐良辰。脂姉粉郎嬌舞新。一樣街頭香拍手。白山尊是白眉神」錦羅夾帳饋團餐。更會比隣宴翠閨。共祝從良新姐々。鏞漿今日染瓠犀」擊柝樓々戒夜來。枕頭殘燭照殘盃。寃家醉着呼難覺。展玉尖來笑揺肩」飲罷歸來卸曉裝。憑欄醉面受微涼。手忙揭起湘簾看。誰子歌腔似阿郎。真に乃ち才思艶發、再生楊次也果して虚語にあらず、余嘗て鳩氏の席上に識る、白髮龐眉、年已に老矣、猶能く醇々清談す、余竹枝續稿ありやと問ふ、曰く少年誤つて綺語戒を犯す、今や老たり、重て秀師の呵責を受くるに忍びずと、余近作を問ふ、曰く、江淹才退き、筆花零落すると久し、只舊作數百首あり、鑪松塘翁余に上梓を勸む、他日全璃を携ひ來て子と與に商定せんと、別に臨んで重ねて後期を約す、意甚は之般なり、而して一去數月、杳として音信を聞かず、之を問ふに已に化し去る久しといへり、全稿未だ得ず、姑らく竹枝數首を選して此に附す、亦延陵掛劒の意なり

嘗て五山堂詩話を讀み、安孫子貽堂の詩を得る、貽堂名は億字は君宜、水原の人、余其詩を愛して而して其人を知らず、舊友安孫子城南亦水原の人、瓜葛あらんと料り、之を問へば果して其大父なり、少より詩を好み、身商賈に服すと雖ども、吟詠絶ず、嘗て江戸に遊ぶ三年、初め野醉石を師とし、後に池無絃に學び、又谷文晁に從つて畫法を問ふ、墨梅墨竹頗ぶる風致あり、惜むらくは中年にして沒し、其才を盡すを得ず

著貽堂吟稿二卷あり、初冬晩眺に云く、欲把閑愁遣。拖笻獨出門。四山空黯澹。一路易黄昏。殘日留楓寺。微霜到橘園。柴扉猶未堅。儘可役吟魂。僧房夜坐に云く、乱雲唯裏貧公房。一榻燒縁伴爇香。網戸中宵天闕近。石磴經歲法燈長。虛明將試鼻端白。塵垢豈思腰下黄。只覺此心清似水。坐聽蕭蕭語風扉。の如き無絃已に探て話中に入る、他は春日偶成に云く、滿架琴書儘可親。間吟冷醉度良辰。香塵紫陌簾纖雨。芳樹黄鶯宛囀春。身健草蔬皆有味。心清匾縷豈羞貧。兒童來起先生懶。報道衡門有故人。貽堂書懷に云く。茫々平昔事多違。獸想沈吟兀坐痴。嬾性無營羞野叟。病軀有命信村醫。風前葉落斜陽樹。霜後花褰瓠地枝。乞米隣家供一笑。吟翁今日未憂飢。の如き俱に恬澹冲和、放翁の風味あり、余嘗て清人詠鷗の詩を愛す云く。縱教就平立。總有欲高心。貽堂亦養鶴の詩あり云く、健翮猶含高舉意。驚然相對主人翁。立意相近し、

新潟の俗、湯戸谷標号あり、而して雅なるもの少なし、松風亭外一湯戸あり、標して群鶴池といふ、命名獨俗ならず、嘗て安孫子城南と與に此に過る、城南指して曰く、是れ水原の詩人鈴木荆山の後なりと、五山堂詩話に言ふ、荆山嘗以誹歌著、頗稱翹楚、齒過六旬方始讀書、近又學詩、と即ち是なり、冬日雜興に云く、山雲飄雪暮寒加。風樹爭栖乱噪鴉。滿圃荒寒人不見。偶然觸眼有茶花。

小田島翠塲名は惟、水原の人、書肆を業とす、郷媛の秘書を得る毎に、先づ讀で而して後に沽る、是を以て博聞窺はざる所なく、記性尤も人に絶す、嘗て越後野史三十卷を著す、天文地理風俗より、古今の人物に及ぶまで博綜遺すことなし、時人小張華を以て之を目す、今其書を見に、文詞猥俚記載繁瑣に失すと雖ども、後世地誌を講ずるもの、必らず先づ指鐵を此に得、其功亦沒すべからざるなり、詩稿一卷家に藏す、余嘗て城南を介し借て之を見ることを得たり、其詩冢人を學び生僻一路に入る、夏日曝書七律八首尤も奇險絶幽の苦を見る、今已に忘失す、僅に小園即事を記す云く、一个幽禽入小棲。梅花南北竹東西。看人便恐旋飛去。儘下青籬恣意啼。

鶴田大塊名は宮字は公宮、通稱は直人、水原の人、修驗者の籍に隸す、而して道士たるを屑とせず、博く和漢の典籍に涉り、尤も易理に精しく、傲岸才を負て、落々不偶、一生窮を以て終る、亡友羽田野目笑其鄕人なり、嘗て余に語て曰く、大塊少時甚だ詩を好み、翠塢に從て學び、頗る能く鏤刻せしも、中年以後棄てゝ復顧みざりしと、豈亦彫蟲小技大丈夫兒の爲さゞる所となずか、自笑余に遺稿一卷を示す、詩亦冢人を學び、工力遙に翠塢の上に出づ、所謂出於藍而青於藍者なり、春日雨中に云く、街頭泥滑少人行。日々茅檐厭雨聲。詩未推敲先示客。花因移植偶延鶯。露芽一碗時驅睡。蕉葉三盃恰適情。扇指春光無幾許。掩門徒過好晴明。同龍齋認庵下信濃川に云く、江上風晴水疊紋。船窓高揭對斜曛。蘆花灘接蓼花岸。盡日看過紅白雲。夏晩即事に云く、胡床夢覺日西斜。酒渴頻思未熟茶。忽見萱籬飄自捲。晩風旋轉雪毬花。夏日雜詩に云く、謝客柴門晝不開。看書眼倦墨甜催。夕陽斜在隣園樹。涼影如山壓屋來」遠雷聲轟水櫻前。風滿四檐涼似船。何處旱村先得雨。殘雲奔月邊天。皆巧思獨運、曼々生新、未一首殊に擊節すべし、余田家に生長し、甸に夏時晩に際し、遠雷山に在り俄頃にして黑雲湧き急風興る、謂ふ驟雨將に至らんとすと、而して終に至らざるを見る、今大塊の詩を讀み方に其妙を覺ふ、佳句五

イ5
1880
65

言には苔點半身石○花浮一眼泉○六言にわ遠樹、一連手、字○短橋半斷井文○亦奇亦巧、俱に傳ふべし、

詩善く風土を寫すもの、人をして蒼然たらしむ、北越深雪沍寒、他州なき所なり、山中死刹、冬月に至る毎に、鐘を撞かず、撞けば則ち凍裂するを以てなり。貽堂宿椽尾山寺に云く、半天晴雪擁杉松○人宿寒雲第幾峯○怪底山中無漏刻○一冬凍殺法堂鐘○暮春の候、諸山雪消す、獨り飯豐山頭皚々白を戴き、峯巒の向背に從て、巨人の狀を現す、遠より之を望めば、宛として老頭陀の如し、俗之を粟蒔入道といふ、翠塢田家雜興に云く、數家籬落映殘梅○負杖村翁野外回○忽道黃粱應下種○飯豐山雪現僧來○二首並に風土詩の遺を補なふべし、

井口霞村、南魚沼郡鹽澤驛の人、生平未だ一面の識あらず、而して吟筒往來甚はだ熟す、余嘗て其鄉の詩人を問ふ、霞村首に井口機山を擧ぐ、機山名は基字は大業、一號は楓館、技能多し、詩文を林述齋に學び、書を木芙蓉に受け、尤も抹茶の技に精しく、宗匠を以て稱せらる、其他詩歌謠曲音樂、皆其妙に臻る、著陋齋詩文稿、漢譯平語、和漢英雄契等あり、黑陀看梅に云く、猛香撲地襲春衣○先見積枝出竹扉○應是千年龍骨化○老幹臥地大三圍○語太奇警、臥龍梅を拆用する尤も巧なり、老手にあらざれば辨ずる能はず、只疑ふ臥龍梅龜井戸梅莊に在り、墨陀に在らず、題を改めて江東看梅と爲せば乃ち可なり、

霞村又同郡の先輩黑田金城の詩を寄せ來る、金城名は玄鶴字は千年、亦林述齋の門に出づ、醫を業とす刀圭の餘暇學を好み、佐藤一齋大規磐水父子と交り善し、私塾を大澤村に開き、生徒に教授す、郡人學に嚮ふことを知るものは金城の力なり、詩贈投に長ト、絶句に工みなり、春夜過島梅外別莊に云く、一院臘々半夜天○園林人少靜琴絃○銀蟾忽上池頭柳○風弄柔條影不圓○訪良寬師不遇に云く、空門雲鎖晝陰幽○知是城中携鉢遊○惆悵要題名字去○芭蕉葉老不堪秋○栢永日見訪に云く、枯魚和菜僅登盤○只有殘燈照舊歡○勸君家釀休嫌薄○月滿山中夜更寒○訪荒川順庵に云く、石上烹茶共對牀○青霞三碗潤枯腸○重來易認東垣外○露井秋深樹子香○寄懷內藤鐵山に云く、幾度敲門不在家○但看寒水動蒹葭○孤舟何處多明月○一夜儲人立淺沙○の如き風調絶佳、絶て粗硬槎枒の病なし、學人の詩此の如きものは多く得がたし、生平著述甚はだ富む、傷寒論度量考、田畝里程考、天命辨、辨石綿論、既に上梓す、其餘無著十七種四十九卷、家に藏す、

關口世植字は子卿、雪翁と號す、十日町の人、儒を以て津山侯に筮仕す、食祿二百石、書法瀟洒、墨竹頗る風致あり、關氏餘稿世に行なはる、余未だ之を見るに及はず、頃日人あり成島君水月樓集の一絕を誦す云く、水樓晴色照淸宵○卷幔平江入望遙○欲滑鏡光花外動○一欄煙月聽春潮○詩甚だ淸絕、佐藤一齋水月樓記と併せ傳ふべし、

僧海雲字は祥水、南魚沼郡闢山村の人、雲洞庵に住す庵洞宗四大刹の一たり、參堂するもの常に數十人、雲機に隨つて化を設け、暇あるときは則ち吟詠自から樂む、人近代の奪可を以て之を目す、初め服南郭に學び、南郭沒後服仲英に從つて遊ぶ、常に往來するもの多くは是れ當世の名流、池大雅嘗て爲に其眞を寫す、故に大雅に贈るに鄙容無意勞高手○多謝當年寫我眞○の句あり、天保中沒す、年九十、著金城餘襲三卷捃摭集三卷あり、余嘗て磨鐵嶺の一絕を愛す云く、磨鐵嶺上望湖亭○臨眺何曾讓洞庭○水氣霽來浮黛色○鏡中七十二峯青○氣象雄濶、萬庵大瀾の徒をして、後へに瞠若たらしむべし、

海雲の徒弟に瑞芳字は杼山なるものあり、十日町の人、手足不具、行步槃跚、因て自から三イ道人と號す、土木形骸、雲水行脚を以て一生を終る、左手能く狂草を作り、運筆飛が如く、尤も小楷に工みなり、海雲の捃摭集及び自著漫遊詩謌、皆其手書に成るといへり、清人高鳳翰晚年臂を病み、左手を以て書を作る、盧雅雨之を哭して云く、再散千金仍托鉢○已殘一臂尙臨池○芳亦其厄を同ふす、二語宜しく移して芳に贈るべし、鎌倉懷古に云く、鶴陵松老擁神宮○扇谷凉生六月風○歌館舞樓何處在○漸々麥秀夕陽中○誰能覽古等閑過○古驛關前感慨多○一自淮王竄蜀道○于今人唱斗春歌○春日旅懷に云く、故國音書近漸稀○春風江上望依々○連天波浪迷歸棹○滿地蘼蕪映客衣○狂去稍知人共棄○愁來無奈志多違○顧身落日蹉跎甚○不若西山賦採薇○其詞意を玩べば、憤世嫉俗の餘、遁れて緇流に入るものに似たり、眞に是れ一奇僧なり、

幼にして了々たるもの、長ずれば却て聰ならず、故に世神童に乏しからず、能く其成に及ぶものの少なきのみ、僧德龍字は召雲、水原の人、八歲にして詩を能くし、十二歲にして父に從つて江戸に遊ぶ、碩儒驚嘆して神童と爲す、長に及で專ら釋典を攻め、淵博窮めざる所なく、遂に諸師に進み、法主の命を奉ト て諸州に敎化す、能く其成に及ぶものと謂ふべきなり、夢登富嶽に云ふ、凌駕天風氣自寒○玲瓏雪映碧霄間○枕衾假我飛仙術○得上芙蓉萬仞山○余嘗て海雲の夢中登嶽を記す云く、突兀芙蓉東海山○今霄恍惚夢中攀○誰四

イ5
1880
65

四萬八千丈の縮得遊仙一林間○同一奇搆、工力相敵す、而して一は是れ眞宗の大德、一は洞宗の尊宿たり、其人品亦相近し

○詩僧圓勢新潟の人、七八歳にして詩を能くし、亦神童の稱あり、豐松庵遺稿念佛百詠新潟府志等の著あり、近歳回祿に罹り烏有と爲れりといふ、殊に惜むべきなり、北越古今詩選數絶を錄す、皆幼時の作なり、立秋に云く、竹屋涼生過雨餘○新蟲唧々滿庭除○不知秋信來多少○池上梧桐葉未疎○頃日其逢病美人の一律を誦するものあり云く、北越明治詠選に載する所なりと、余之を見るに甚だ佳なるを覺へず、却て幼時の作の眞趣あるに如かず、

○室町氏の時、文學細流の間に在り、德川氏の世に至ては、却つて醫家に多し、蓋し士民の家、各常業あり、力を講習に費す能はず、而して醫家其技を修むる、文字の力に賴らざるを得ざるを以てなり、余越人の詩を採る、醫家亦多きに居る、松田竹里の如きは其一なり竹里名は俊字は季彥本庵と稱す、其父五畧新發田侯に仕へて侍醫と爲る、竹里少して京都に之き、松本愚山萩野台州渡邊東巖の門に歷遊し、業成り歸つて父職を襲ぎ、醫學教授を兼ぬ、食祿二百石、著養壽草三十卷傷寒論講義六卷痘疫論二卷風月藁一卷あり、生平甚はだ詩名なくして、其詩恰かも傳ふべし、大坂懷古に云く、倏忽興亡似暴秦○猴公一去牝鷄晨○殿中徒擬垂簾政○關外寧無授鉞人○鎖壁城荒空萬古○桃花水暖又今春○大豪痤黠忠良骨○夜々蕭々見碧燐○沈痛頓挫、頗る少陵の遺法あり、姪質齋亦清才あり、早起喜晴に云く○秋深淫雨惱吟情○今曉初聞喜鵲鳴○風裏露翻麗下樹○日邊雲走影過城○三盃芳茗開幽鬱○一奏騷經了課程○好是吟笻出門去○殘楓林外弄新晴○雪朝枕上に云く、細雪吹窓簌々新○野梅籬落未知春○枕頭詩思冷如水○夢趁灞橋驢背人○詩あると此の如し、何無忌諧肖其舅と謂べし、質齋名は達字は必卿文之助と稱す、仕へて馬廻兼道學堂都講と爲る、食祿八十石、

○新發田藩經義の學多し、然れども學館の制、專ばら山崎闇齋を宗とし、諸家に出入するを許さず、人才を極倩する尤も甚しと爲す、是を以て百餘年來聞ゆるもの寥々たり、近世催丹羽思亭先生博綜精究、嘗見に拘くせず、遂に能く卓然家を爲す、先生名は德字は伯弘、幼にし岐嶷夙成、遊倅より擢でられて郡屬吏と爲り、郡廻に遷る、旋あり孝にして勤學するを以て、金を賜て之を奬し、命して江戸に之き松崎懐堂に學ばしむ、既に歸つて官に復し、公邑墾田吏を兼ね、典府に遷る、其先秋祿頗ふる降なりしも、後世遞減先生に至て位下位を出ず、故を以て從事する所は常に府吏の間に在り、在上者將に擢用する所あらんとするも、其好にあらず、遂に散地を乞て、專ばら講習を事とす、偶〻鮑洋中に遊奕す、外藩筆語酬と學館に掌どる、藩主特に以て先生に命ず、先生深く知遇に感ず、益力を辞藻に肆し、尤も文章に巧みなり、詩は止達意を取り、幅邊を修むるを屑とせず、感懷一篇纚々百餘言、起數句に云く、閑人閑讀書○不知歳月暮○雪飛覺冬深○鶯春知啼囀○地臥且隨意○相忘毀與譽○家貧時語乏○幸賴親友助○量小慾易盈○既飽不他騖○以て其人を想見すべし、唯其經を治むる學制と合はず、故を以て一生學館に入る能はざるも、從遊するもの甚だ多く、耻堂藥村心齋簡堂諸老、皆其門に出づ、治下文教の盛、隣藩比すべきもの少なきは、實に先生の力なり、野村養拙翁云く、先生近体詩を喜はず、其平仄に拘せらるゝを以てなり、故に一自体文爲謾戲教才子不若雷鳴の語ありと、然れども先生近体詩亦甚はだ巧みなるものあり、樓上暁景に云く、書樓新浴後○獨酌意陶然○遠樹歛殘照○孤村生深煙○鳥歸布影外○牛飯杏花前○無見不相樂○何爲須管絃○清牖獨絶存すべきなり、

○新發田藩治下の士、經術に名あるもの固より其人に乏しからず、獨り小川心齋史學を以て彰はれ、市島屏山詩を以て鳴る、屏山名は泰字は交通、新發田の市人、家素富饒、數々慈善の擧あり、藩主聞て之を嘉し、謁を正寢に賜ふ、蓋し特典なり、詩藥翁星巖に學ぶ、翁其追纂集に題して云く、應被漂陽寒尉笑○富饒如汝作詩人○集未だ經見せず、僅に玉池吟社詩中に於て數首を得る、秋夜彈琴に云く、彈琴宜夜坐○況此秋色佳○孤月皓揚彩○長天淨如揩○微風徐度林○爽氣滿茅齋○一彈奏古調○再彈寫中懷○々々何悠遠○古調與時乖○時世重細巧○徒焉費安排○不知自然妙○只在得和諧○彈罷夜寥々○知音隔天涯○家に趙宋の琴一張を藏す、常に絶だ之を愛し、撫弄置す、此作乃ち虛薄にあらず、妙と爲す所以なり、然れども其詩は專ばら細巧を以て勝る、不知自然妙只在得和諧といふもの、特に琴に在て詩に在らざるに似たり、夜泊に云く、秋陰何慘慘○江路易黃昏○淫雨失潮候○繫舟楓樹根○屢吹風不定○乍醒夢無痕○鷗客何爲者○離家便斷魂○移竹に云く、幽石隱相映○軒窓多野風○五更殘夢覺○聽雨月明中○曉岸に云く、曉岸雨晴初○漁人望浦去○夜來春水生○小艇不知處○墨蘭に云く、濃墨一叢神自足○只嫌猶帶麝煤香○の如き筆路細に入り、思致巧を極む、全鼎を嘗めずと雖ども、略味を知るべし、

○小川心齋名は弘字は道甫、一號は北海、島潟村の人、

1
1880
65

其先政房擢でられて新發田鄉長と爲り、藩命を以て紫雲寺湖を決し、其子熹房亦阿賀野川を疏して松崎の海に注ぐ、尋で福島潟疏水の工あり、政房より興寛に至る四世皆其事に與る、功を以て田及び徽號禮服を賜ふ、興寛より再傳して心齋に至る、心齋幼にして讀書を喜み、經史百家に通ず、兼て本邦の古典に精しく、尤も經濟に長ず、常に熊澤蕃山を慕ひ、學皆實用を期す、家居好むで家國の荒廢を理む、曰く吾家世々公家不毛斥鹵の地を闢く、門內修らずんば、何ぞ遠に及ばんと、遂に藩命を以て眞野原鄉の水利を起し、松林の地三千六百弓を賜ふ、尋で濱蒲谷內の水害を治め水田一千八百弓を賜ふ、戊辰の歲、東北騷擾、會米二藩新發田藩主を要して米藩に質たらしめんとす、藩拒む能はず、議鄉長に下る、心齋固く之を爭へども得ず、潛に歸て鄉內の民を唱集し、席旗を建て竹槍を靡するもの數千人、或は橋梁を毀ち、或は舟車を匿し、嚣々城下に鬨塞して北行を停む、二藩亦敢て逼らず、既にして官軍海路より太夫濱に達す、心齋復士兵を募て之に應ず、一鼓二千人を得たり、東北重遂に退く、已己二月、藩大に功を論ず、擢でゝ士籍に列し、民政大屬に任ず、翌歲病で沒す、年僅に五十五、生平好む で國史を研究し、鎌倉史五十卷を著す、安井息軒其該博を稱し、親から爲に校訂し、又之が序を作り、將に世に公行せんとす、未だ果さず、其他文八卷、詩三卷、古歌韵解三卷、北越春秋廿九卷、策府八卷、日本國邑誌六十卷、未だ稿を脫せず、皆家に藏す、秋山弟嘗て其詩を得、爲に數十篇を抄して示さる、歌行樂府力を漢魏に得、小枝苗引尤も長く五百餘言に及ぶ、然ども詞多くは散牙、錄すべきもの少なし、只其春朝一首風韵獨絕、詞に云く、春朝知雨讀香奩。一脈梅風濕透簾。遙得萱篇怕忘失。貼將露瓣代浮瓷。眞に是れ廣平の梅花なり、

肥田野築村名は徹字は士朝、築地村の人、其幼時龜田鵬齋北遊之を見て曰く、佳兒後必らず偉器とならんと、長に及んで江戶に遊ぶ、鵬齋已に沒す、因て綾瀨に學ぶ、既にして池守秋水を見て大に悅び、往て之に從ふ、業成り鄉に還る、鄉人之を尊び、築村先生と稱して名をいはず、因て以て號と爲す、其學約にして精、文を作る法度あり、讀著爲に耀り、存するもの唯易說烏相樹考鎌倉紀行等數種あるのみ、余嘗て原鶴堂に就て其詩を索む、鶴堂爲に二律を誦す、遊最勝寺に云く、綠陰村裏寺。好此避塵喧。供佛花延蝶。留賓僧倒樽。亂蟬庭際樹。深竹水邊門。最勝名眞好。來遊莫厭煩。枕上に云く、街頭人寂々。水漏滴三更。壁破燈光閃。花寒蝶夢驚。詩從靜境得。愁向幽懷生。皎潔西窓月。照我不眠情。風趣獨絕、老經人の語に類せず

曾我簡堂名は敬甫字は希淵、浦木村の人、私塾を開て蒙士に授く、新發田侯徵して社講と爲す、余嘗て其經籍に深きを聞く、未だ其詩を善くするを知らず、北越明治詠選其春夜一首を錄す云く、夜色沈々玉漏闌。湘簾不捲畫樓寒。紅絃彈罷思詩坐。春月和花過曲欄。道學先生亦綺語を爲す、恐くは秀師の呵責を免れず、

近世鄉先生善く後進を敎育するもの、上越に於ては藍澤南城を稱し、下越に於ては大野亞堂先生を稱す、南城父北溟より子朴齋に至るまで其學を世にす、先生亦尊考臆齋先生より令嗣懋華先生に及ぶまで三世好文德門の佳話と謂べし、余年十三始て先生の塾に入る、塾則毎月六回詩會を開き、題を課し才を鬪はす、余五絕一首を作る、先生叨りに咨賞を加へ、以て別才ありと爲し、屢同人の座に稱せらる、余私かに喜び益力を詩學に肆す、今に至て二十年、名を藝苑の末に厠するとを得るものは、實に先生の力なり、先生名は紳字は垂鄉、諏訪山村の人、學洛閩を宗とし、兼て史子群籍に涉り、尤も文章を善す、嘗て安井息軒の名を聞き、書を與て經義を論ず、息軒其卓識に驚き、歎して曰く、十室の邑必らず忠信あり、古人我を欺かずと、息軒一代の鴻儒、輕しく人に許可せず、獨り先生を稱する此の如し、以て其學術人品を定むべし、生平甚はだ詩を作らず、嘗て集陶一首を書して與へらる云く、養眞衡茅下。憂道不憂貧。奇懷遠見候。時賴好事人。湊合自然、天衣縫なし、所謂能役古人不爲古人所役者なり、壬午秋門下相會して、先生の壽を爲す、祝章を呈するもの裏然卷を成す、同人廼して以て佳話を傳むとす、先生年已に高し、捉刀に懶しとし、余をして代つて簡閱せしめ、將に剞劂氏に付せんとす、未だ果さず、先生卒に沒す、實に甲申三月なり、先生白鬚偉貌、其人に接する色溫にして氣嚴なり、故に子弟皆愛して之を懼る、塾則尤も嚴なり、子に臥し寅に起るを例と爲し、躬行之を率ひ、風雨寒暑を雖ども廢せず、毎早中原復逐鹿の詩を朗吟して塾舍に來る、子弟皆なな吟聲を聽て課に就く、其書齋塾舍と相對す、誦讀の聲間斷するときは彈を振て之を警しむ、猶記す寒夜漏殘し燈炮し、几に凭て昏々眠らんと欲す、忽ち鐸聲の琤々たるを聞き、懼然として自から警しめ、琅々の聲再び起る、今にして之を憶へば恍として隔生の如し、詩文雜著亦た爭身に及ぶ、余從遊の日書庫を司り、縱に之れを見るとを得たり、先生沒後其散逸を慮かり、令孫淡水君に問ふ、曰く、子の去後書庫の出

イ5
1880
65

入嚴ならず、子弟私かに借法り、止文稿三四卷を餘すのみと、殊に歎惜すべきなり、

大野楳華先生近代の偉人なり、乃翁耻堂先生處士の尊を以て鄉黨に推さる、先生は則ち出でゝ國事に任ず、勳業を以て著はる、所謂從其志者なり、先生名は誠字は仲亨、初め睡虎と號し、又星山と號す、弱冠江戸に遊び、藤森天山を師とし、傍ら伊庭軍兵衞に從つて劒を學ぶ、既にして鄉に還り、乃翁先生を助けて塾生を監督す、時に幕府の末路に方り、天下騷然たり先生廣く有志の徒に結び、聲名漸く彰はる。新發田藩士之を忌み、其藩馬城下を過るを以て不敬と爲し、松崎村に屏居せしむ、九月十三夕に云く、薄賊忌才今古同○當年此夕泣英雄○洲前月即寛平月○自採蘋花祭相公○即ち此時の作なり、未だ幾ばくならずして釋さるといへども、群小側目するもの猶多し、因て再び江戸に之き、春風館を開いて生徒を延き、文武二道を教授す、此時に當り、幕府已に政權を返し、親藩不平、遂に伏見の變を演成し、尋で官軍大學東伐す、先生日に幕吏の間に周旋し、私かに籌畫する所あり、上野戰敗るゝに及び、幽命の徒多く來つて之に依り、頗ふる官軍の爲に屬目せらる、人皆先生の爲に之を危ぶむ、而して先生自若文を論ず武を講ずる平日に異ならず、遂に禍を免かるゝを得たり、維新の後朝廷廣く人才を登用す、先生亦擢でられて工部權大丞に任ず、尋で大政官權大書記官に轉ず、長野縣令に遷る、縣遊民多く尤も難治と稱す、先生小廉苛察を事とせず、專ら威信を以て民を服し、治績頗る著る、時に民權の論盛に興り、各縣の縣會動もすれば犯上抗官の勢あり、是を以て有司の縣會を視る蛇蝎の如く、常に屬僚をして代て議事に當らしむ、上下離隔して紛擾益加はる、先生獨り其失討なるを知り、親から縣會に臨で事理を陳し、遂に六大路開鑿の議を決す、後來縣會大事あれば則ち縣令親から之に隨む、先生之が嚮矢たりといふ、明治十七年病を以て官に卒す、年僅に五十餘、先生狀貌魁偉、眼光爛々人を射る、酒を嗜み、交遊を愛し、口吃善く議論する能はざるも筆を執れば理義明瞭、千言立どころに成る、生平好で天下の大計を論ず、古英雄を以て自から期す、詩文稿を留めず、散逸するに信す甚はだ惜むべきに似たりと雖ども、先生は以て雲煙過眼と爲す、嘗つて偶懷五古一篇あり、起手乃ち云く三日不講武○豪氣無所吐○一日不讀書○愁顏難得舒○僅々廿字、胸懷畢く露はる、余少時喜で之を誦す、惜むらくは全篇を忘る、後ち東京に遊び先生の家に寓す、一日間に乘ずて之を問ふ、先生笑て曰く、一時興到の語、都て省記せず、只だ故紙一束あり、覆瓿の餘幸ひに存する所のなり、子爲めに繕寫せよと、因て擲つて余に示す、詩僅かに二三十首、率ね少作なり、稿今家に藏す、去秋石黑北涯を訪ひ、先生手錄の詩數首を得、多く稿中載せざる所なり、因て二首を錄す云く

坐臥懷人更思詩○江樓酒醒夜凄其○五更鴈語聽蕭雨○正是離懷最惡時○曉來閒倚小窗東○澹白水煙籠旭紅○沙鳥風帆都一色○漁歌聲在杳茫中○又百丈牽來船上灘

の七字あり、余江村に生長し、常に此景を見る、正に其妙を覺ふ、

耻堂先生甚はだ詩に巧みならず、而して殊に詩學に深し、嘗て言ふ仄韻絕句古人必らず拗體を用ふ、邦人多く平韻轉句の式を用ひ、一字の出入を許さゞるものは非なり、若し我說を信ぜんは、試に古人の作例を檢せよ、全唐詩中一首平仄均調なるものなしと、堂兄野村鶯溪常に先生の說に服す、頃者鶯溪の遺稿を讀に、山寺一絕あり云ふ、竹柏交加擁斷碣○僧房出浴步林樾○涼陰滿地如水流○曉鐘撞上峯頂月○通首全く拗體を用ひ、音節奇古、蓋に師承あるを見る、然れども仄韻絕句必らず拗體を用ふべきにあらず、蓋し仄韻を押すものは已に近體にあらず、時に古調を以て律に入れ、蒼莽歷落中自から意節を成すは、乃ち作者の妙用に在るのみ、故に王弇州云く、仄韻絕句不妨拗體と、若し必らず拗體を用ふべしといはゞ、却て俗說に屬す、層に音節一事、邦人に在ては常に隔靴搔痒の憾あり、故に先生の明を以てするも、時に謬見あるを免かれずと雖ども、而も詩を論ずて見微細の處に入る此の如きものは少なし、是れ余か先生に推服する所以なり、然れども拗亦法あり、古詩平仄に精覈するにあらざれば以て拗體を語ると難し、但古詩平仄近時始て本邦に傳ふ、先生未だ之を知るに及ばず、安ぞ先生を九原に起して與に之を論ずるを得むんや

先生又た云く、王朝の時、古詩韻法未だ備はらず、管江諸家の集を閱するに、唯一韻到底四句一解の二格あるのみ、是れ古人の謹厚なる所以にして、後世詩人一知半解强て其備を求め、笑を來世書生に貽すものゝ比にあらずと、此言寔に時流頂門の一鍼に當つべし、豈獨り古詩韻法のみならんや、

隨園詩話に言ふ、詩占身分、往々有之、莊容可未遇時、詠蘆云、經綸猶有待○吐屬已非凡○後果以狀元致官亞相、楳華先生亦詩あり云く、巖扉絕塵○道人幽隱處○山中一甑米○夜作甘霖去○隱然仁厚の意を寓す、牧民官の語なり、此時先生猶微なり、豈後來官を縣令に致すの日あるを料らんや、哲人の詞便ち詩讖と成る、事

亦奇なり、先生又春畝伊藤伯に從て北海道を巡視す、道中の作に云く、水熊山容日斬新○村清野趣見淳眞○茫々天地誰非客○不獨星行露宿人○詩甚だ佳なりと雖も、末二句稍不祥を覺ふ、未た數年なら亦、先生果して道山に歸る、余始めて不壽の徵早く詩中に驗ありしを知る、

南城山人藍澤祇、刈羽郡南條村の人、南條城墟の下に家す、因て以て號と爲す、詩を賦して云く、羊公勤學里閭下○鄭氏註經巖穴中○德業如今何敢比○地名於古偶相同○山居四十年、家塾を開て學者を待つ、遠近爭ふて之に赴き、兒童走卒亦南城先生を知る、經を治む る專ら折衷を尙び、詩を論ずる亦た然り、其說に云く、折衷也者、時措之宜也、故因其所詠之事物、或取之於 郁、唐宗元明 雅落、或取之於纖靡、或取於澹泊、取於穠 、雖似類非一、亦皆杼軸我懷、見る所ありと謂べし、生 平甚だ詩を嗜み、講經の暇、吟詠自から樂む、常て云く、世之學者、專講經史而不好詩賦者、必乏溫厚之氣、 與於詩之教廢矣、專好詩賦而不講經史者、必乏謹厚之 氣、立於禮之教廢矣、刻南城三餘集二卷あり、古風、日出詞神鐵歌等の篇、皆美刺の什なり、篇長ければ錄せず、近體果して唐に非ず宋に非ず、却て初白老人の風味あり、南條に云く、百戶窯村皆業農○園々桑柘綠叢叢○山深薪木資無乏○海近魚鹽利亦通○慈母折花簪幼女○孝孫伐竹杖衰翁○土風淳朴隣堪卜○欲結佳家謀耦功○新闢山莊に云く、游手終身體不勤○立錐占地自安分○池開活水源無盡○園築花壇草有薰○閑月最宜松際見○鳴泉轉愛竹間聞○幽居事々同禪室○但未山門禁酒葷○夏莊記事に云く、梅雨染黃梅子熟○麥風吹芒麥花香○一眠推枕驚時過○三省憑梧覺日長○北海夏魚紅棘蘇○南山新笋綠沈繪○吾鄉節物今爲盛○四體不勤飽自嘗○五月稻苗全已移○舜風堯日長田穉○祓除螟蝗迎神祀○鎭治騏牝召馬醫○奴婢亦能知地利○父翁相共話天時○聞說水農唯患雨○古來雖旱未曾饑○」暇日未曾身自康○執芳聊當養生方○崖穿橫井尋泉源○園飛螢蕪供馬糧○山繞叶絲懸在樹○土蜂釀密窟爲房○看他蟲類皆能作○可獨人間廢勉強○」山居頌得好林泉○暑月納涼尤覺便○松葉蓋天擎大笠○苔紋鋪地展青氈○新聲可耳蟬初出○畫寢曲肱人未眠○須向此中尋樂所○不從周老問相傳○魚池に云く、細水如絲滴竹筒○放來鯉齡未從容○只憂池淺傷魚性○重引山泉作小潭○探梅に云く、二十餘年不入城○山窓一几守幽貞○春來暫廢研經業○寺寺尋梅聽早鶯○尋自山阿到水隈○偏於幽處看花回○櫻雲梨雪賞其盛○獨樹亦佳唯有梅○田家秋晚に云く、九月西收不築場○索綯懸稻驟秋陽○園々列樹周遭是○俄忍びず、上梓して以て同好に頒つ、庶幾くは幽魂を泉下に慰するに足らんと、余嘗て岡鹿門翁を訪ふ、翁方に高橋三寅と倶に空谷遺稿を校理し、盛んに其文の傳ふべきを稱す、余亦原文原武二篇を讀み、歎賞して以て奇才と爲す、而して竟に其姓の我友たるを知らず、山田君の贈あるに及んで、心窃に之を奇とす、去冬二妹を村山鯉石に嫁す、鯉石東頸城郡浦田口村の人、即ち空谷の孫なり、初め亦之を知らず、頃日遺稿を閱し、卷末鯉石の名を署するを見て、再び其奇に驚き、遽に錄して以て兩重の因緣を誌す、空谷名は延長字は子膺、刈羽郡新道村の人、飯塚氏、出でゝ村山氏を冒す、其人羸瘦衣に勝ざるが如く、而して倜儻大節あり、年僅に三十二にして沒す、鹿門翁其文を評して曰く、健度俊邁、議論雄偉、世道人心に裨益ありと、之を讀むに果して然り、詩は特に餘事のみ、彫琢を以て工と爲す、言々眞に肺腑より流出す、臨終に云く、冥々不必去人寰○惟在青山綠水間○吟魂時逐梅花月○依薈年々到故山○の如き哀音凄切○百年の下人をして感泣せしむ○余尤も其詠紙鎭を愛す云く、輕薄楮先生○放逐管城公○我獨甘遲鈍○一風任身窮○不逢急風起○誰信鎭歷功○寄托隱然○極て身分を見る、又春晚に云く、耒耜春耕不厭忙○時危力作少豐穰○官家開近徵兵賦○慈母折花簪幼女○孝孫伐竹杖衰翁○土風淳朴隣堪卜○欲結佳家謀耦功○新闢山莊に云く、游手終身體不勤○立錐占地自安分○池開活水源無盡○園築花壇草有薰○閑月最宜松際見○鳴泉轉愛竹間聞○幽居事々同禪室○但未山門禁酒葷○夏莊記事に云く、梅雨染黃梅子熟○麥風吹芒麥花香○一眠推枕驚時過○三省憑梧覺日長○北海夏魚紅棘蘇○南山新笋綠沈繪○吾鄉節物今爲盛○四體不勤飽自嘗○五月稻苗全已移○舜風堯日長田穉○祓除螟蝗迎神祀○鎭治騏牝召馬醫○奴婢亦能知地利○父翁相共話天時○聞說水農唯患雨○古來雖旱未曾饑○」暇日未曾身自康○執芳聊當養生方○崖穿橫井尋泉源○園飛螢蕪供馬糧○山繞叶絲懸在樹○土蜂釀密窟爲房○看他蟲類皆能作○可獨人間廢勉強○」山居頌得好林泉○暑月納涼尤覺便○松葉蓋天擎大笠○苔紋鋪地展青氈○新聲可耳蟬初出○畫寢曲肱人未眠○須向此中尋樂所○不從周老問相傳○魚池に云く、細水如絲滴竹筒○放來鯉齡未從容○只憂池淺傷魚性○重引山泉作小潭○探梅に云く、二十餘年不入城○山窓一几守幽貞○春來暫廢研經業○寺寺尋梅聽早鶯○尋自山阿到水隈○偏於幽處看花回○櫻雲梨雪賞其盛○獨樹亦佳唯有梅○田家秋晚に云く、九月西收不築場○索綯懸稻驟秋陽○園々列樹周遭是○俄

築圃村黃壁墻○殘稻全收暮色閒○月橫鎌影隱雲間○一裳猶立何爲者○獨守空田老築山○村園葉謠昨來風○苦楠獨留萬顆紅○鴉不敢啣人不取○天將無用付詩翁○の如き獨り性靈を寫し、乃ち爾く清新なり、其他詠雁に云く、江樓暝月聲初冷○山閣橫雲影自長○露宿曾無兵伏野○風便定有信傳鄉○春燕に云く、掠水賊過新柳絮○和泥啣得落梅花○眼鏡に云く、麗水秋潛全的皪○夜照月玲瓏○の如き亦皆佳句傳べきなり、又東天台訪僧房夜半山に云く、山煙淡々樹陰々○月逗上方知夜深○碧殿朱鄽光不度○花眠三十六祇林○余が少時、一友此詩を誦して曰く、是れ三餘集中壓卷の作なりと、今其集を讀に、大抵筆舌兼用意を以て先と爲す、此詩獨り風格を以て勝る、然れども要するに好看字面を排湊するに過ぎず、未だ以て南城の奇と爲すに足らず、性靈を捨てゝ風格を講ずるもの、往々彼を捨てゝ此を取る、故に之を辨す、南城字は子敬、

往年山田順一余に空谷遺稿六卷を贈て曰く、是れ亡舅村山君の著なり、舅氏幕府の末路に當て、王室の式微を慨し、身草莽に在りと雖ども、念々常に家國を離れず、一事變を聞く毎に、憂悶累日、遂に肺患を得、恨を含らして地に入る、病中水落雲濤の言を以て、手から其詩文を訂す、心血の凝聚する所、磨滅に付するに

村落新將起義倉。笠影帶煙田井々。蛙聲如雨水汪々。
怪來山市魚鹽貴。盤背拍天波浪狂。感懷に曰く、夢擾
犀甲乱驚濤。酣戰鳴中拜鳳鑾。斬却長鯨爲萬段。醒來
枕上一刀寒。の如き淋漓感慨、眞に放翁に遍る。其他
家國關心空濺淚。九湖人夢漫揚鞭」我道依然周禮樂。
斯文一半晉風流」二三尺水分松徑。四五點花粧竹扉」
花點波心魚潑々。泥粘梁上燕喃々」人逢佳節寂無事。
春到山莊幽不凡。の如き皆佳句なり、詩律感時多激切
。劍南風骨聽遺聲。に至ては、自から詩品を定む、其宗
とする所以て見るべし、嗚呼放翁臨終まで九州の回
復を望む、而して國亡び家破るゝに終り、天下後世を
して長く其志を悲ましむ、空谷亦不幸にして國家多
難の日に生れ、卒に憂を以て死し、王室の中興を見る
に及ばず、其悲むべきは一なり、然れども余其與弟忠
靖論時事書を讀むに、勉むるに尊王の大義を以てし、
纔々二千言、忠靖は前衆議院議員關矢氏なり、亦慷慨
の士、戊辰の役、從軍功あり、蓋し空谷之が基を爲す
なり、空谷知るべしは亦以て暇すべし、

空谷兄文治と同生なり、文治名は重熙、田邊氏を冒
す友愛尤とも敦し、空谷に先だちて沒す、遺詩數篇、
空谷遺稿の後に附す、瓶裏紅葉に云く、飛鳥山頭秋
染丹。昔年載酒倚闌干。一枝今日瓶中插。不耐枕邊霜
氣寒。讀三餘集に云く、巨木何嫌多節目。高調自是少
和聲」高臥英雄興敗夢。曉牖化日暮朝情。江上に通すべ
きなり

幕府の末、王政の振はざるを慨し、草莽より起て大義
を唱へ、遂に中興の基業を開きしもの、僂指するに勝
へず、片桐義卿の如きは乃ち其錚々たるものなり、義
卿名は直方通稱省助、石涯又楠逊と號す、南蒲原郡二
俣村の人、戊辰の春、京師に上り、徵士に擢でらる、其
久しく江戸に在り東事を諳するを以て、江戸府權判
事に任ず、正親町烏丸諸公を奉ずて任に赴く、是歲十
月、車駕東行、百官奉迎、義卿江戸府權判事を以て騎
馬先驅す、人以て榮と爲す、既にして議論喧騰、義卿
自から其說の行はれざるを知て職を辭す、遂に官を
免す、然れども官尙は金六百圓帛五匹を賜ふ、其草創
開治の功を賞するなり、義卿既に官を免ず、供給猶職
に居る時の如し、人或は之を指す、遂に更藏に罹り獄
に下る、其弟篤之を聞て大に驚き、乃ち刑法官に詣り
身を以て兄に代らんと請ふ、許されず、服餌涉僧に坐
し、伊豆三宅島に流さる、櫛風沐雨蠻民と雜處する三
年、身善く病み、母又之を憂ふ、弟篤悲愁自から勝へ
ず、一夕血を刺て疏を書し、自殺以て兄の罪を贖はん

とす、其友栗本士遷視て之を止め、乃ち其書を彈正臺
に上る、官此に由て流を宥し、其鄉に禁錮す、幾くも
なく官又た弟篤の誅を允し禁錮を釋き、且つ弟篤の
孝誼を賞し、金若干を賜ふ、明年癸酉春、病を以て沒
す、年三十七、余嘗て其弟篤に別るゝ詩を見る云く、
聖明恩渥賜衣新。霜週寧知却誤身。臨行囑汝無他事。
好代阿兄奉老親」蠻領何人諒我寃。天南此去海雲昏。
殷勤謝汝情何盡。畢竟無言勝有言。此前詩を觀れば、
其罪を得るの由自から見る、嗚亦寃なり矣、雅故黨友
今猶追懷已まず、談義卿の事に及べば、嗚咽流涕するも
のあり、大に人に過るものあるに非ずんば安ぞ能
く此に至らんや、識居中作に云く、親交離散幾時陪。
遠謫南荒未得回。雲盡水天青一髮。風驚崖浪白千堆。
悲懷每遇住辰切。好景多從險處開。流涕不惟臨眺感。
孤臣許國恨難裁。國を憂ひ友を懷ふ、至誠言に溢る、
東坡海外諸作、此激切の音少なし、弟篤ハ林氏を冒す
通稱二郎、遂齋と號し、鉄筆を善くす、

近世畫を以て名を得るもの、張嵐溪の後、村山半牧富
取芳齋を推す、二人の畫品同ト からず、芳齋は築造老
熟を以て勝り、半牧は氣韻高古を以て勝る、若し其精
詣の功を論ずれば、半牧或は一籌を輸す、而して天分
の高きは芳齋寔に數等を遜る、況んや其人慷慨義烈
時流に卓越す、何ぞ唯畫のみを是れ論せんや、半牧名
は根字は其馨、一號荷亭、三條驛の人、少して狷介妄
りに人に交はらず、獨り藤本鉄石と善く、其畫亦酷は
だ鐵石に肖たり、鐵石の義を擧るや、半牧時に播摩に
在り、變を聞て走て京師に入り、鐵石の妻孥を救護す
既にして鐵石敗死す、幕府義徒を搜索する甚だ急な
り、半牧姓名を變ずて難を避け、間關崎嶇年を踰て鄉
に還る、是に至るまで東西流遊凡そ二十年と云ふ、戊
辰の春、王師賊を伏見に破り、東北騷擾す、半牧乃ち
鴨松溪小柳春堤等と謀り、平定策を上つる、五月官軍
長岡城を拔き、賊軍連りに利わらず、是に於て半牧等
の內應わらんとを疑ひ、先づ松溪春堤を捕て獄に下
す、半牧逋れて內山村に匿る、既にして松溪春堤斬ら
るゝと訛傳するものあり、半牧亦た免かれざるを知り
自裁す、時に年四十四、後一月を經て、東京鎭臺府の
徵書至る、聞くるの皆爲に惋惜す、遺稿一卷家に藏す
余嘗て之を借讀するとを得たり、詩品高古亦畫品の
如し、新春偶作に云く、歲時電倏逐星回。漠々風雲曉
欲開。掃雪柴門候客過。種梅巖落延鶯來。閒中有趣春
偏永。飽外無爲心半灰。皇政近聞新改革。漫呵凍筆賦
休哉。秋懷に云く、放浪病軀天一涯。寒花叢畔獨徘徊。
少年豪氣隨秋盡。殘夜客愁和雨來。幽夢逢人醒忽遠。

衰顔借酒醉纔開〇欲裁尺素寄鄕信〇漠々江山雁未回〇半牧子なし、獨り猶子悃を親愛す、挈へて家に至り、教ゆるに繪事を以てす、沒に臨み又遺命して以て嗣と爲す、時に年十一、累然孤煢、生父鳳池伴ふて東京に抵り、片桐義卿の家に寄す、義卿已に半牧の節を憐む、又た其子の幼弱なるを見て、特に愛撫して以て成立を期す、已にして義卿敗黜海島に竄せられ、悃亦た偶々病に罹り鄕に歸る、癸酉秋再び東京に遊び、贄を大橋陶庵に執り、從學五年、去つて京攝の間に遊び、名家の門を歷訪す、常に義父の非命に斃するを悲み、憤發以て衰門を興さんと欲す、刻苦多年、卒に病を獲て沈綿歲餘終に立す、時に年廿七、絕命の詩に云く愧無徵志報君父〇今也空爲泉下人〇悲夫、悃字は士德半山と號す、詩筆尤も淸し、江村に云く、煙雲成雨晚霏々〇螢舍燕泥影忽微〇十里空江秋瞹雪〇蘆花堆裏一帆歸〇渡江潟雨に云く、搖手扁舟客互呼〇似披江口送人圖〇煙雲忽送蓬窗雨〇樹色山光淡欲無〇に論趣あり

往年春濤先生の新文詩を讀み、煙波處士の詩を載するを見る云く、燈前欲把舊詩刪〇早已十中遺八九〇險韻出すに平易を以てす、其出色なしと雖ども亦た匠心の妙を見る、而して名下註して越後の人といふ、同國此の如き才人ありて余未だ知らす、因て先生に問ふ、曰く、大橋陶庵の門生、往日一たび來見す、敝衣短袴其髻を結ふ、因て其古貌古心の人なるを知る、其他を知らすと、近ごろ村山鳳池の煙波處士小傳を見て、方に知る、姓は高橋名は武字は利節、煙波は其號、北蒲原郡稲田村の人、陶庵の門に遊ぶと數年、前原一誠の乱に會ひ、同學某々斬謫に處せらる、煙波亦た其事に與かるを以て物色甚はだ急なり、自首して以て其罪を贖むとす、一友之を止めて曰く、益なし韜晦以て機會を待つに若かすと、乃ち潛行して中國九州を歷、山水に放浪する年餘、歸途山口に抵て遂に自首す、然れども其事已に平らぐを以て罪を免せらる、煙波常に泰西の學を喜ます、放歸の後、東京に寓して家塾を開き、日に同志と周旋、古道を興すを以て任と爲す、未だ幾ばくならす病を以て沒す、方今泰西の學一世を奔波し、文物典章一として泰西ならざるものなし、煙波獨り古道を奉じ、蹶滴を以て恥と爲す、眞に古人なるかな、小林遂齋煙波と善し、遺詩を示さる、寄懷村山其德に云く、漠々秋陰未放晴〇荻花楓葉易傷情〇聞君近作江州客〇定是琵琶湖上行〇皆川翁偵盜に云く、昨夜江村春雨餘〇綠林豪客入閭居〇馳將一价先相問〇奪否先生腹裏書〇又鎭西雜詩若干篇あり新潟才人詩

に臧す、平壺島に云く、雷奔電擊浪難平〇出沒青山不識名〇且喜海城看漸近〇隔林墻壁轉分明〇玄界洋に云く、鉄管吹煙響似雷〇中流酹酒意雄哉〇怒看怒浪高於屋〇一路狂風捲海來〇崎陽に云く、海門春老雨潸々〇樓在煙雲縹渺間〇買醉人皆吳越客〇阮琴譜把九連環〇覇家臺に云く、海色天公共渺茫〇一痕殘月五千霜〇夜深忽認人家近〇映水孤燈影漸長〇風調皆佳山陽西征稿中に入るべし

松溪籬田翁、名は銘字は中濟、鴎姓、加茂縣の人、家世々加茂廟に籍す、而して博學多藝、詩を善し和歌を巧みにし、尤も本邦の古典に精し、人多く文儒を以て之を待つ、資性通脫、細節に拘せす、交遊を愛し、雅俗を論ぜす皆能く之を遇す、酒酣に興熟すれば、雄談莊論、諧謔の語と、吻を衝て雜出、四座風を生ず、眞に快活人なり、幕末外國事起り、覇政日に墜ち、天下爭ふて海防を講ず、翁其迂疎を笑ひ、詩を賦して之れを嘲る云く、富國强兵策幾篇〇渴而掘井豈噬咽〇方今要務在移俗〇儒弱宴安三百年〇戊辰の乱起り、天下皆尊攘の大義を忘れ、互に權勢爭奪を事とす、翁又詩を賦して之を罵る云く、西佐薩長東會桑〇牽連黨與互搶攘〇膺懲大義今安在〇八道山河半戰場〇此時東北軍同盟して王師に抗し、北越終に戰地と爲る、翁村山半牧小柳春堤等と謀り書を北越鎭守府總督に上り、平定策を陳す、賊之を疑ひ、捕て獄に下す、翁乃ち詩を賦して曰く、天恩賜我以優遊〇三月煙花五十秋〇今也殘骸何所惜〇笑而入地亦風流〇旣にして獄を出づ、又詩を賦して云く、殘軀從此作何遊〇得見馬頭生角秋〇萬苦千辛能不死〇笑而出獄吏風流〇倔强の概以て見るべし、乱平らぐの後、故舊多く顯官に登る、翁獨り意を仕進に絕ち、放浪風月餘生を樂ましむ、余少時翁を本間翠園の座に識る、詩を出して正を乞ふ、翁喜で曰く才子なりと、此より時々往來、來れは則ち淹留數日、酒を酌み將棊を鬪はし、倦めば則ち余が爲に詩稿を商酌し、益を得ると甚だ多し、幾もなく余新潟に來り、相見さると數年、偶其病を聞き、往て問ふ、翁大に喜び、病を力めて出で見る、瘦顏枯涸、意氣衰颯、復前日の快活なし、手を執て悽然として曰く、往年子と偕に秋葉山に花を看る、今や此の如し、明年花時恐くは復人間に在すと、旣にして果して然り、翁詩を吟ずる速藻を喜ます、隨園所謂詩到能遲轉是才なるもの、一生和韻せす、疊韻せす、亦隨園と同癖、嘗て其丹波島の作を誦す云く、孤行十日鄕書絕〇擬把一封投信川〇因て言ふ地名詩に入る、多く意義なし、老夫此作他の好處なし、但信川の字死用せす、無情中情を生するのみと、

平生詩論細密多く此に類す、謁菅公廟に云く、讒雲妬霧有時開。誰道寃魂激怒雷。西山薇蕨東籬菊。風操爭如北野梅。小林氏觀菊に云く、金葩銀蕊一叢々。孰與家園萬錦楓。我亦飄零唐伯虎。借人籬落看秋風。鹿空藏山過獅子巖に云く、但緣佛化及匪類。香吐遊人不敢傷。嶽中に云く、不怪金孃頻入夢。先塋近在枕頭山。の如き皆妙。又時々喜んで諧謔の語を爲す、賭尾貧甚詩以紀懲に云く、平昔苟存今日意。方兄何必偏他人。の如き人をして吃々笑はんと欲せしむ

松溪翁專ら七絶に工みなり、謂ふ要言煩ならず、廿八字にして足れりと、故に柏浦十三勝の後に題するに獅子搏兎也消全力來。の語あり夫子自から道なり頃者翁の遺集を閱するに、送白囊子一篇あり、詩太はだ奇偉、云く、白囊子。白囊子。聞子踪跡太奇偉。翳冠既究軒岐書。神方悉記胸臆裏。一朝以事忤權奢。然拂袖辭鄉里。一雙牛犢無所須。肩頭何復着行李。獨抱白囊腰間。向人自號白囊子。白囊膨脝何所盛。笑而不答頷而已。維歲已未夏之仲。翼然揖我鴨水涘。高歌笑拍洪崖肩。沒頭同醉酒家壘。有時探囊投金丹。跛者能起眇者視。今日無端告別離。將向都門售其技。嘻嚱去矣白囊子。此別可嗟且可喜。當今國體猶尼綱。往々肉食呼庚癸。誰揮一匕能救之。我今囊子以補理。君不聞上醫々國其有以。男兒所期當如此。不然妙技入神亦徒焉。奮然辭鄉更徒掏。此詩を觀れば翁の古體亦妙品に入る、豈唯七絶擅場を推すのみならんや、集中更に送小貫子詔如蝦夷一篇あり、亦太はだ奇偉なり、唯其結搆布置略此詩に同ト、熊當美と雖ども、飫ぎ即ち味なし、故に錄せず

余招魂祠外を過ぎ村松七士の碑を見る毎に、其凜凜義烈の事に感ト、低徊去る能はず、頃者珈峠陰の遺詩を得る、峠陰七士の一、其詩亦傳ふべきものあり、因て遽かに收錄して其人を存す、峠陰諱は重修、通稱源助、世々齊を以て村松藩に藉す、少時江戸に遊學し、杉原羽倉諸老宿を師とす、藩侯其學行を嘉し、侍讀に擢ト馬廻に班す、此時幕府失政、尊攘の論盛に興る、峠陰同志六士と慨然醵て大義を以て一藩を率ひんとし、數々上書して事を言ふ、藩侯亦之を然りとす、而して姦險權を弄し、事悉く中沮す、峠陰屈せず更らに書を著して之れを論ず、言頗る痛切、而して姦險之れを嫉む益々甚はだし、讒搖百方、藩侯の江戸に在るを幸とし、其家に禁錮す、六士之れを聞て憤懣去らんと欲して忍びず、姦を斬らんと欲して又た可ならず、苦節鬱屈以つて時を待つ、會ま長谷川世傑長州より來り、六士を見て事を謀る、權臣遂に認るに大逆を以つてし、獄に投ト死に處す、實に慶應丁卯五月なり、世傑の來る峠陰を幽閉中に訪うて私かに之れを見る、而吏知らず、故に逕路を脫するを得たり、戍辰兵起り、越後大亂、村松侯兵破れて米澤に走る、峠陰幽閉家に在り、奮起して曰く果して然りと、茨城直弘君を奉ト、罪を軍門に謝す、此時世傑官軍に屬して五泉に屯す、相見て涕泣、乃ち世傑に因て周旋、遂ひに事なきを得たり、村松侯の今日ある峠陰の力なり、封土奉還の議興る、峠陰公議人と爲て京都に在り、早く大勢を察し、率先上表して封土を奉還す、慶藩の後家塾を開て生徒を養ひ、優遊林下以て老ゆ、明治癸未八月病で沒す、年五十八、余其姪元恭と善し、具に遺事を語る、此の如し、嗚呼七士の義を唱る、峠陰之が唱首たり、六士刑せられて峠陰獨り脫す、而して遂に能く大義一藩を率ひ、宗社を保全す、是れ六士の成さんと欲して成す能はざる所にして、峠陰之を成す、六士死せずと謂つべきなり、六士は誰ぞ、下野勘平、佐々耕庵、岡村定之丞、山崎彌平、中村勝右衞門、泉仙介なり、去年辛卯朝廷追褒の典あり、勘平耕庵正五位を贈らる、耕庵詩は高遠、峠陰の弟なり、絶命の詩、正氣長留天地間の句あり、峠陰詩尤も多し、春日雜詠に云く、東風吹和熙。入我讀書帷。偶開正南戶。坐覩春物滋。草芥抽嫩綠。芳菲灼紫紅。禽鳥戲其際。間關弄晴曦。逢此風光美。悲喜一相遺。良辰如不賞。行樂待何時。一朝風雨至。繁華忽焉衰。人生亦幾許。百年不可期。一太平布和合。芳菲生顏色。煙霞羅幕開。園林錦繡飾。熙々天地間。萬物皆自得。仰看鴻鴻翔。杳々沒遙碧。如何明麗天。棄此如遺跡。君子識出處。行藏有聖則。今彼遊冥者。誰得施增減。春光亦何爲。我道不可易。供に陶詩の妙境あり。近體詩却て晚唐を學ぶ。重陽即事に云く、又逢佳節到天涯。久客年々不在家。地下陶公應笑殺。風塵滿面見黃花。理國に云く、擲來刀劍代犁鋤。滿畝綠面春雨餘。贏將運斧多年力。不用中原用圃疏。春日即事の滿園芳樹鎖煙霏。孤榻無人到落暉。睡覺猶疑身在夢。一雙黃蝶遶花飛。といふに至ては亦太はだ清麗なり、

加藤松齋名は其德、通稱平三郎、村松藩文學、北溟先生の子なり、少時古賀精里の父執たるを以て、往て之に學ぶ、經史淹博、詩文雙妙、名家の後を以て、學館を司どる數十年、一藩才能多く其門に出づ、此時勤王論佐幕說と迭に興り、同藩士蒲生重修等勤王を唱へ、松齋佐幕を主とす、重修愛謂編を著して之を藩侯に獻ト、且つ一本を老臣堀右衞門三郎に贈る、右衞門三郎不學、松齋をして之を講ぜしむ、松齋因て右衞門三郎に說き、先づ重修の罪を正し、遂に一藩を率ひて佐幕

說を主とす、戊辰兵起り、官軍進んで村松を拔き、藩侯米澤に走る、松齋亦た之に從ふ、孔平らぎ、賊軍に黨與するに坐せられて禁錮し、遂に職を褫はる、廢藩の後、講を寛て生と爲し、落拓以て死す、年八十餘、家叔梨洲翁幼時松齋を師とす、嘗て曰く、松齋尤も說經に工みなり、一たび卷を開けば、諄々數千言、辨說流るが如く、講了畢り、卷を閉く故の如く、殆めより一葉を飜傾せず、經傳史漢概皆背誦すといふ、惜ひ哉大義を誤り、卒に敗黜に終る、著松齋百絕百律あり、家叔嘗て其稿を纂す、近ごろ之を問へば已に散失す、僅に其讀書を記す云く、石牀開卷倚松寮、乃覺仙家趣味饒、百代興亡歸袖手、先生笑比爛柯樵、

青木苾字は邦光、青城と號す、中蒲原郡曾川村の人、少時塘佗曳越後に遊び、其詩を見て激賞し、之に遊學を勸む、因て疑を負て浪華に遊び、藤澤東暘の門に入り、其塾長と爲る、後江戸に往き、藤森弘庵を師とし、川田甕江等と遊び、學業益々進む、既にして病を以て鄉に歸り、雒を龜田村に下す、從遊するもの甚はだ多し、明治元年、溝口侯の辟に應じて新發田に至り、上書して時務を條陳す、報ぜられず、老臣寺田某召見す、青城首めに宿弊を革めんことを乞ふ、退て復書を贈て之を論す、某亦た聽かず、乃ち龜田に歸る、二年、村松堀侯其名を聞き、聘して學政を掌ごらしむ、待遇優渥、邸宅を賜て之に居らしむ、青城感激、大に學制を立て治教を昭せんとす、何くもなく癘を患ひ以て沒す、年四十七、侯痛く之を惜み、其病中親から臨て慰問せらるといふ、吾友原篁圃其門に遊ぶ、時に余尙幼家に在り、篁圃屢々從學を勸む、余も亦意あり、其病歿に遭て果さず、頃者篁圃に就て遺詩を問ふ、篁圃爲めに其庚午元旦を誦す云く、龍爭虎鬪俄邪眞、夢覺東窓曙色新、今日屠蘇不辭醉、生遭四海一家春、溝口侯に上つる策論、及び寺某田に與る書、尤も時勢に切なり、其に蒲生絅亭近世偉人傳中に載す、

余幼時東餘琴臺の續先哲叢談を讀み、其偉言瑰行の見聞を助くべきを喜び、手卷を釋に忍びず、既にして琴臺の高田藩士たるを聞き、我越大に人あるを喜び、其生平を識らんと欲し、之を同人に問ふ、知るもの已に少なし、其詩を求むるも亦得べからず、偶五山堂詩話を讀む、料らざりき琴臺亦話中の人ならんとは、驚喜遽かに之を錄す、琴臺名は耕字は子藏、器宇弘濶、修飾を喜まず、誠を推て物に接し、頗る俠氣あり、平日專ら鉛槧を事とし、半疾風の如く敏捷比なし、雖著數種堆積身に等し、緒餘、又詩學に及び、聯珠詩格讀集、後集、各二十卷を著し、以て蔡氏の遺漏を補なふ、極めて博洽を爲す、詩稿亦太はだ富む、示高君素五古の如きは、連篇疊韻、筆力尤も健なり、今其一を抄す云く、人生誰不期、百年裴傾日、一被風霜挫、凋同蒲柳質、由來立志士、難免鄉曲嫉、先哲能知命、柳下廿三黜、富貴非吾願、誰復較得失、唯讀萬卷書、兀坐懸磬室、吾性好博通、涉獵事廣溢、所喜躬猶壯、雙鬢黑如漆、蘭交人易衰、梅契情難匹、揮散獨自憐、淸貧誰守壹、祇應安所遇、未必癡呰畢、以其志を觀るべし、出遊に云く、村蹊慣得那知除、日脚較遲暖更加、蘿落風尖梅碎雪、陂塘煙鎖柳籠紗、管三廟畔尋詩伴、在五橋邊訪酒家、多謝春光不相負、瘦藤到處弄韶華、亦自から淸逸なり、柳橋詩話を見るに其詠史を錄す云く、玉帛徵賢下紫宸、至尊撫背意相親、誰道客星侵帝座、想應太史誤時人、且つ言ふ文章大抵丙丁兒の爲に奪はる、惟口誦の作を存するのみと、然らば則ち琴臺の詩に傳ふるもの少なきは、其故なきにあらざるなり、余聞く琴臺本江戸の人、嘗て江戸近海の圖を著はすに因て、謫を幕府に得、江戸を逐はる、高田侯其器を惜み、錄して儒員と爲す、然れども其逐客たるの故を以て、大用せらるゝを得ず、藩著述あれば琴臺多く之に任ず、而して藩議又幕府を憚かり、編輯を他人に托し、琴臺の名を署するを許さず、才あれども時に容られず、功あれども世に知られず、一生抑鬱以て死す、其出處の厄亦甚はだし、豈に獨り文章災に遭のみならんや、

近日書肆を閱して柳橋詩話二卷を得たり、姬路の醫員加藤良白の著なり、其人詩學甚はだ深からず、議論多くは淺近なり、唯其甲越二公の詩を論ずて兵に比するもの、其言頗る解頤すべし云く、甲越兩雄相角、較其兵士多寡則上杉氏不遠及武田氏、而二公英靈傳于韵語間者、亦甚類之、機山詩有十餘首、而霜臺公唯一首耳、霜臺公詩、天眞呈露、機山則固宗法度、故川中島之役、機山敗而不全敗、霜臺公勝而不全勝、於詩亦然矣、又其卷菱湖を論ずるに云く、昔者懷素張旭徒善狂草、假酒德以助飄逸之氣、菱湖先生端楷與歐虞相上下、而被酒嗔狂亦駕懷張之上、宜其曠一世眼底無人、而近體詩亦頗自負、所謂菱湖有餘翠也、余嘗て菱湖の酒狂を聞く、之を讀に果して然り、話中亦菱湖の謝島梅外餉米を錄す云く、寒釜近來稀作粥、再過幾日欲生魚、惠然一擔慙多愧、不待眞卿乞米書、乃ち一世の頹豪公を以て自から其書に命ず、何ぞ唯懷張と酒狂を爭そふのみならんや、

柳灣先生偶題に云く、南窓暇日拂塵床、哦句啜茶坐夕陽、世事飽嘗貧有味、機心已息拙何妨、江山幽夢家千

星、風月閑懷詩一囊。隨分也知多適意。向人不復說窮忙。先生飛州府の幕客と爲り、尾州に過ぎ刺を投ずて秦士鉉を見る、士鉉世事徳嘗の一聯を誦して云く、「鄙に人の君が詩を傳ふるものあり、瞻望を企こと久し、今相訪はる、殆ど天緣なりと、遂に之を上坐に延く、又清國杭州の人張秋琴崎陽に在り、此詩を見て嗟賞し、遂に其韵を和し、客、久自知身易賤。才疎敢謂命相妨の句あり、菱湖筐中集に見ゆ、先生の名當時に噪ぐを知るべし、然れども先生の佳作却て此詩に在らず、余已に焦遇に頷して前頁に錄す、今再て其集を見れば、遺珠猶多きを覺ふ、詠手爐に云く、香炭無煙紅未殘。温爐種火度更闌。應同躭古摩鐘鼎。不說學仙燒玉丹。吟坐三多因汝熱。客居十載笑吾寒。先春漏暖梅花孔。儲得陽和氣一團。詠物を借て自家の身分を寫す、自然工穩、前作に優るゝ數等なり、其他聖林上底見過席上煎茶談詩に云く、自汲寒泉洗折鐺。小窓烹茗竹風清。吟床半日閑評句。也是什麽鐵碗鳴」。摘露搗煙春又春。苦甘嘗盡味方眞。堪悲多少喫茶客。半是渾淪吞棗人」何須說妙更談玄。徧界不藏詩境全。躬起眉毛却難見。金風體露碧池蓮」春晝花飛錦上敷。秋天月滿點雲無。齡開禪客頂門眼。來見詩人肘後符」風竹騷々搖夕陽。碧裏流水入談長。滿園相對西窓下。燒盡一爐心字香。上金輪寺後閣に云く溪水一條寒玉鳴。穿林激石響琤々。清音閣上枕流鶴。絲竹元來不是聲。致遠宅同詠瓶中水仙花に云く、敲得凌波羅襪塵。硯頭瓶裏玉生春。明窓好借獻之筆。氷練爲君書洛神。の如き明麗修潔一點の塵滓を留めず、廣瀬澹窓其集に題して云く、詩句何清澄。譬之西湖水、沙石明可數。波濤澹不起。煙柳與風荷。隨處皆堪喜。所以弄棹人。沿廻忘歸矣。只此數句、能く先生の詩を盡せりと謂べし、然れども先生の詩只西湖の水に比すべし、韓海蘇潮、澎湃萬里大地を包涵するの概なし、是れ其一時の名水たりと雖ども、大家の數に入る能はざる所以なり、

文政辛巳三月、柳灣先生六十、其三婿相謀り柳灣漁唱初集を刻して以て生辰の壽を爲す、一時傳へて佳話と爲す、天保辛卯、先生七十、令子昆陽六十生辰の例を援き、又柳灣漁唱二集を刻す、松崎慊堂の序之を言こと詳なり、余先生の詩を錄する已に多し、然れども皆初集中より抄出す、頃者二集を得て之を讀む、芬芳悲惻の懷漸く減ずと雖ども、風骨益老蒼に趨き、絕て頹唐の態なし、老杜所謂老去益知詩律細なるものなり、偶懷に云く、歸田賦未成。代耕尙蹴祿。年々作農吏。時把農書讀。湖鄉論封田。林野說槲牧。徒將種藝術。線飾案頭牘。向日脫塵帙。故山營茅屋。腰間一雙刀。可換牛馬犢。東郊に云く、青郊雨歇暖光浮。冷策晴步試遊。煙墅氣暗花似雪。旗亭客醉酒如油。梅見塚畔年々柳。在五橋邊日々鷗。又是東風促人老。夕陽江上書春愁。蹴詠豆腐に云く、鍊濃功成甘淡冷。寒廚時復伴簞瓢。玲瓏方玉切來軟。的皪凝氷烹不消。巨小當從狗屠宰。鹽梅自信細君調。笑汝如同貧賤吏。欲將清白向人誇。信川泛舟に云く、新津橋外放輕舟。風慢乘涼六月秋。遠嶺晴浮天際淨。大江遙入海門流。尊羹鱸膾多年夢。提鴨掣鷗此日遊。吟眺依々最何處。一團楊柳古灣頭。聞く先生故宅多門坊に在り、宅後多門川に臨み、老柳數樹長條水に垂れ、晴灣波を生ず、塲號亦此に取る、吟眺依々たる所以なり、七絕尤も擅場と稱す、美収むるに勝へず、今特に其生平に切なるものを取る、友人有着居士裙者、用木綿大布、三幅六褶、古樣可愛、余亦倣其製に云く、衰老年々急襲冬。衣裳何必索尨茸。布裙古樣新傳得。催促四邊燈下縫」未擬蓉裳學屈原。何須白練倣羊欣。老來偏愛木綿暖。濶布新裁居士裙」一枕晴窓午睡長。醒來和暖異尋常。誰知居士新裙好。滿幅梅風襲暗香。正月十五日即事に云く、老婦廚前原粥成。新寫檐外報晴鳴。情懷宛似故田舍。時聽隣國稼樹聲。夏日雜題に云く。獨臥幼山睡味長。夢餘閑讀養生方。延年却老談何易。笑浴新芽栒杞湯。初冬即事に云く、菘畝葱畦新有霜。樹頭柚子弄金黃。村廚、誰道乏時味。老婦朝供香皷湯。集中此種の作甚だ多し、皆其清儉家風を見るべし、又秋晴示同僚に云く、沽酒休愁貰俸錢。村歌巷唱樂豈年。稻花滿縣無風雨。過了二百十日天。撿田に云く、黃葉林邊宿雨收。農夫趨走向西疇。步弓斗格撿田吏。俗殺山村孤壁秋。聞秧鷄に云く、短宵格々苦催明。憐汝田間應候鳴。但恐農翁殘夢裏。聽爲租吏打門聲。の如きは亦其官況清苦を知るべし、其他老狸煎茶に云く、侯來文武火常全。靜瀹茂林寺後泉。借問三千喫茶客。何人會得趙州禪。住吉舞に云く、現來街上叫花身。莫是西天古應眞。阿難唱歌迦葉舞。于今滿殺滿城人。夜坐に云く、一卷楞嚴一盞燈。蒲團孤坐冷於氷。貪瞋雖滅痴猶在。定是前身破戒僧。漫吟に云く、新詩誰共細評量。擁鼻一吟千恨長。祇有寒園案山子。點頭風外立斜陽。出門に云く、忙中了事便無事。塵裏偷閒即有閒。塵事閒忙何用說。出門一笑對春山。梅花開到九分に云く、枝北枝南春漸加。密邊疎處玉無瑕。賞心恰得九分好。開到十分即落花。の如き遊戲筆墨大に近清人に似たり、老後の詩境一變するを見るべし、枕山詩鈔中要先生詩あり、則ち知る先生弘化甲辰四月を以て道山に歸る、天保辛卯七十

より起算するときは、壽を得る八十三、大窪詩佛嘗て其初集に序して云く、年耳順に及び、容顏悅懌、知命左右の人の如しと、松崎慊堂亦其飲まず言笑寡きを稱す、蓋し皆壽相なり、

○俞曲園東瀛詩選四十卷、元和以降三百年間の詩人を網羅し、尤も該博と稱す、然れども海外人を以て本邦の詩を採る、譬へば秋を覆て物を探るが如く、遺憾猶多し、若し北越人を以つて之を論ずれば、柳灣菱湖諸老を遺して獨り兒玉北溟を取る、殊に惜むべきを覺ふ、北溟名は鯤、小須戸驛の人、賣文活と爲して四方に遊寓し、鄉人之を知るもの少なし、明治の首鄉に歸るときは年已に四十餘、賣文の餘、古書畫骨董を賞鑑し、又從て之を鬻き、囊橐甚はだ富めり、既にして復東京に遊び、一夜醉歸、途に賊の爲に害せらる、或は言ふ私怨の爲なりと、卒に其故を詳にせず、刻古愚堂詩二卷あり、序評皆近世名家の手に出で、滿紙圈點爛然目を奪ふ、然れども其詩往々流れて俗に入り、俚體に類するもの多し、俞氏僅に近體二首を選す、聞鴈に云く、月下蘆花白、風前荻米香、飛霜摶落葉、珠露綴幽芳、磋肝凄難耐、蟲聲夜未央、斷腸緣底物、悲雁涉瀟湘、同林因學田村信步に云く、薜花正瘠菊花肥、稻穫黃時群雀飛、織出天孫工手段、楓經蘆緯自然機、芳山懷古に云く、偶尋帝跡訪禪寮、宮草陵松恨不消、滿地落紅僧莫掃、花魂死合護南朝、乃ち集中尤も精訓なるもの、他は唯秋晴不終日、陰雨動經旬の一聯差誦すべきのみ、醫人喜疾病、佳人望死亡の如きに至ては、直に是れ狂詩、蜀山風來等と其流を同ふす、殊に笑ふべしと爲す、然れども本邦名家已に其巧を稱し、海外名士亦其選に入る、北溟死して餘幸ありと謂べし、何ぞ必らずしも其非命を悲まんや、

○東瀛詩選補遺四卷、余未だ之を見ず、本編卷首其目次を載す、中に脇山髓なるものあり、余が知る所にも亦脇山髓なるものあり、星陵と號す、村上藩儒員、後新潟に寓し、歸節學校教員たり、若し同名の陳鶴座にあらずんば、即ち此人ならん、余屢々其詩を見る、多く佳ならず、才かに二句を記す云く、轡柯人在野、顚倒鶴乘軒、一讀して學究の詩たるを知る、但未だ俞氏選する所果して如何を知らず、

海城寒柝月生潮、波際連檣影動搖、從此五千三百里、北辰星下建銅標、是れ長尾秋水松前城下の作なり、秋水名は景翰字は文景、村上藩人、一生仕へず娶らず、單身孤劍遠遊を好み、東北蝦夷を窮め、西南九州四國を歷て、江山風月の間に放浪し到處必らず題詠あり、松前一絕尤も人口に膾炙し、傳播の廣き張繼楓橋夜泊の詩に減ぜず、今猶荒驛破村の中吟聲あるを聞けば必らず此詩なり、然れども世多くは秋水を知らず、或は此詩を以て無名氏の作と爲すものあり、殊に惜むべきなり、余嘗て村上士人の子長尾秋村を識る、少年韶秀亦好く詩を作る、之に問て方に秋水の其家に出るを知れり、因て其遺稿を問ふ、曰く多く已に散逸し僅に七絕一卷あり、大約百首に過ぎずと、其生平を問ふ、曰く南船北馬一生を終り、今其詳を知るべからず、只至性國を愛し、尊王の義を奉ずること尤も深し、嘗て孟子を讀ム一夫の紂を誅する條に至り、忽ち抗聲して曰く是れ鄉王の妄言なり、我國萬世一系、誰か皇室を覬かざらん、若し此說を唱ふるものあれば則ち乱臣賊子のみ、嘗て書を信ずれば書なきに若かず、鄉翁自ら之を言ふと、晩年鄉に歸り、安泰寺に寓す、寺前の門楣清人江元曦の扁額を掲ぐ、一日仰で之を視る、曰く咄豚尾漢何ぞ無狀なる、日本男兒決して汝が書を讀かんと、此より常に後門より出入せりといふ、此二事鄉人今猶之を說くものあり、以て其猾介孤僻苟合せざる知るべし、殆と所謂古の狂なるものか、近ごろ村山半牧藏する所の山樵詩草を見る、中に七律二十餘首あり、秋村藏する所と自から是れ別本なり、其詩才思橫逸、風調雅健、作者に愧ぢず然れども

松前一絕遂に卷中の絕唱たり、他作は是に稱ふ能はず、獨り諸葛侯武の一律を愛す云く、中原逆賊日紛々、何事南陽臥見晨、世出奇才當必用、天生大耳建殊勳、馳驅先決三分策、滿泣長留二表文、空有少陵歌老栢、令人想像仰青雲、瞻玉笥山に云く、千疊碧寒八平轎、一林紅葉馬蹄聞、舟下富士川に云く、春柳一旗江上酒、惡灘孤擢峽中舟、秀日江上に云く、自古江山無定主、千今耕釣有遺賢、中秋に云く、千里萬里一天月、古人今人此夜情、亦皆誦すべし、生平喜で墨竹を畫く秀韵獨絕、瀟洒不群、落魄間王秋暮の三字を署す、人其故を問ふ、曰く一日竹を畫く頗る意に稱ふ、夜夢に一神人あり姓名を賜ふ、故に之を用ふと、其他臥牛山樵正亨山樵青樵老人百一翁の如き別號甚はだ多し、秋村半平と稱す今工學士たり、

余越人の詩を採る久し、嘗て謂ふ其々知名の士、必らず佳詩あらんと、其集を觀るに及ては、往々所見不及所聞の歎あり、頃者三宅瓶齋敝廬集を讀む、其人未だ詩を以て稱せられず、而して詩甚はだ佳なり、名豈信ずるに足らんや、瓶齋名は安懿字は德卿、村上藩士、仕て郡吏を爲り、食祿七十石、少時遊技に耽り、尤も圍棊點茶を嗜み、往々寢食を忘る、既にして之を悔ひ、盡く遊技の具を賣て書冊を買ひ、專心攻學、尤も吟

詩を愛し、身劇職に居ると雖ども、未だ嘗て一日業を廢せず、爲人廉勤、吏務に練達し、尤も意を農利に留め、儲蓄を重し田制の弊を除き、頗る良吏の風あり、時に封内凶歉、財用足らず、有司藩債を起して以て急を救はんと欲し、屬吏をして往て水原豪農に謀らしむ、依違して決せず、有司更に瓶齋に命ず、瓶齋即ち水原に赴き、豪農に面議し、事漸やく成る、而して小人功を嫉み、遽かに其議を止め、瓶齋をして豪農に謝せしむ、瓶齋大に怒り即日上表職を辭す、官長慰諭し朋友苦勸すれども皆聽かず、遂に郡吏を罷む、時に嘉永四年辛亥冬なり、翌歳八月、藩公、特に宅を賜て之を勞ふ、會米船補賀に來り、天下多事、財用益窘す、藩公特命再び瓶齋を起す、老病を以て之を辭すれども聽されず、遂に大坂に赴き、藩債を理し、事畢て北歸、途に中風を發し、家に還て沒す、實に安政五年戊午二月なり、生前自から墓誌を選し、遺命して石に刻し村上城外、萬年山に建しむ其出處進退の際を視れば、清風直節古人に愧ぢず徒らに一詩人を以て之を目すべからざるなり、然れども敝帚集三卷恰も是れ詩人の詩、柳灣先生以後多く其比を見ず、而して半生郡吏と爲り、撿田徵租の間に從事し、仕官境遇已でに先生に同ト、其詩和雅溫藉一點不平促迫の態なき、亦藉は

だ相肖たりかり、想ふに其小人の姦擯を憤ほり、上表職を辭するや、當さに怒髮衝冠の概あるべし、而して其罷官後の作を見れば、乃ち云く、柴門風雪暮。病思轉淒迷。省費先除冗。謀貧苦戒妻。浮生歸濁酒。穩睡愧晨鷄。幸我雙間手。待春鋤菜畦。語々皆な分に安んト命を知り、一字怨尤に涉るなし、而して省費謀貧二句、當路者を諷するの意、言外に顯然たり、風人の旨を失なはざるに庶幾し、其他行縣に云く、微官承乏奈駑頑。按行徒語水與山。身堅籃輿偏仄裡。眼馳郡甸著茫間。農夫曝稻風三日。牧豎磨鎌月一彎。我境今年頗豐熟。爲寬市酒出津關。行縣雜詩に云く、行問民家稼穡艱。火耕水耨幾時間。愧吾按部無他事。看遍郡中多少山。「滿舟禾稼滿蓑風。挽上蘆花淺水中。連日晴暄秋有閒。今年刈獲半收功。」十三塚畔吊英雄。老樹秋曠野寒風。還鍛殘矛作農器。遺民墾過古城中。」老吏年々出換田。今年收獲減常年。官租率免三分一。猶有餘糧充酒錢。の如き柳灣先生撿田示同僚等の作と相伯仲す。眞吏の風概を想見すべし、

村上詩人、前に瓶齋あり、後に秋水あり、二人略其時を同ト、其詩品各異なり、秋水の詩才氣雄放、其流茶に失す、高きもの唐人に出入す而して其下るもの

直率平淺人意に懷らず、瓶齋の詩思理縝密、其流滯に失す、甚だ出色のものなしと雖ども亦誦すべからざるものなし、故に余秋水の詩を取る僅に三四聯に過ぎず、而して瓶齋の詩は盡く其美を収む能はず、題赤壁圖に云く、赤壁之山何嶙峋。巉巖霜落木葉紛。下有一葦凌萬頃。風清月白冷殺人。知是黃州雪堂老。謫所亦有閑遊好。二客相隨姓爲誰。共傾斗酒醉欲倒。此地周郎走阿瞞。舳艫十萬灰燼寒。天命人事誰能料。橫槊賦詩墨未乾。我觀此圖傷往事。英雄多爲功名累。不如痛飲且放歌。人生得意十一二。歲晚に云く、鏡中短髮亂鬖鬖。坐使幽懷感物華。黃卷青燈朝事業。松醪豆粥淡生涯。尋梅晴壁時移屐。掬雪寒窓夜煑茶。老婦豫爲迎歲計。朝衣補綴舊綿花。偶成に云く、疎簾淸簟對殘蘂。門巷蕭然絕履聲。一味新凉秋七月。四檐殘滴雨三更。今年有閏霜應早。明日知風海欲鳴。自覺近々眠食減。飽聞鈴柝警荒城。丁未除夜に云く、世間塵事太紛拏。兀坐燈前感有餘。襲祿纔能糊數口。傾囊更欲購群書。剛緣兒長驚親老。漸向青闌惜歲除。手燃豆莢從土俗。不教貔鬼嗾吾廬。己酉除夜に云く、寒暑磨人鬢有絲。燈前吊影隱烏皮。作聲常怯聽家計。衰老何堪當吏治。婢買野蔬除夜市。兒臨唐帖立春詩。龍年心與眠相惜。百八鐘聲報曉遲。春日閒詠に云く、鬚眉短髮白千莖。頑健猶憐筋骨精。抱甕灌園元不俗。如芝邪粒豈其情。家明間祿過三世。身倦微官且半生。會賜幽壯營小築。一花一木亦恩榮。晚行に云く、寒村過七八。秋氣濕行裝。雲裂旋看月。橋明先得霜。書聲鬱鬱營築。燈影橫林篁。漸覺離城遠。疎鐘鑿渺茫。寒夜獨覺に云く、布被稜々冷。吟魂和夢驚。風松摩若韻。雪竹伏無聲。爐鑿殘灰暖。茶分宿水烹。家人猶未起。窓色欲天明。田家に云く、昨夜江村雨一犂。家々午餉送東西。新秧纔挺青三寸。龍骨聲寒水拍堤。戊申歲旦に云く、睡無殘醉入新正。昨夜寒雲未放晴。不管人心爲時改。梅風竹雨亦春聲。己酉歲旦に云く、起拭雙眸嗽井泉。春光已動早梅前。辛盤柏酒從家例。先爲慈親賀米年。歲晚病中に云く、寒窓聽雪撿醫方。藥鼎茶甌伴臥床。疎懶漫言加少癒。不趨公事兩旬強。晴窓明處睡昏々。身與寒蠅分小暄。三寸曝光穿隙人。硯池剩盡凍皺痕。遊湯澤温泉に云く、微風輕暖放春晴。往訪温泉一日程。休怪老夫然後落。山郵水驛盡驚聲。數家湯戶雜農家。亂石平橋路幾又。何處春風應枕駕。淡煙殘雪半梅花。間中雜詠に云く、幽棲投老樂清貧。分水梅瓶注硯池。幽香仰墨起風漪。十行欄紙無餘白。細批兒曹乞正詩。松火蒲團氣味眞。眼眼瘦眉窮措大。優恩收作一閒人。の如き清眞淡雅放翁の風味あり、其他詩能娛老境。酒自破愁團。晨鐘

從郡政。夜燭謂農書」政優增戶籍。年歉減官租」路繞陂塘如斗折。水穿草莽似蛇行」苦饑寒月稽孤艇。竹寺晴煙打古碑」草蟲傷稼年逢歉。罪履換衣秋始寒」更治因循無補世。詩名籍甚恐欺人」國家長少皆無恙。薄祿斗升亦可榮。の如き俱に存すべし、又中貢正月書事に云く、邊警騷然急召兵。長槍大馬走登城。試攜重甲抽身立。金革相摩軋有聲」書生目古遇時難。換面軍門老據鞍。馬革裹屍眞壯士。劍光夜々射星寒。亦據鞍顧眄の態あり、老益壯なるものと謂べし

○中島芥舟名は雅章、字は士達、村上藩士、父名は雅故、儒名あり、芥舟幼にして家學を受け、兼て書を善し、尤も書法に長ず、仕て長柄奉行兼書籍師範に至り、食祿百石、明治二年、藩學制を革め、廣瞻を置き生徒を養ふ、芥舟擧げられて督學と爲り、文教大に興る、舊例毎月三次儒臣を城中に召し經義を講ト、藩士に命ずて之を聽かしむ、名けて講談と云ふ、然れども昇平日久しく、士皆世祿に安んト、學校の設け一に餼羊の供に比す、是に至て彬々始めて觀るべきものあり、芥舟提唱の力なり、後旨あり文教司を以て三條に赴き、三年十月老を以て致仕す、白銀三枚を賜ふ、十二月藩公其侍講日久しきを以て、特に恩給俸二八口を賜ふ、四年黑川藩に聘せられて學政を司どり、六年上關村に隱居し、弘文館の生徒に教授して以て老ゆ、廿二年八月病で沒す、年七十九、其人酒を嗜で蕭散生事を顧みず、話叔夜阮仲容の風あり、常に曰く、吾をして書書酒に老しむれ、萬乘の貴と雖ども其樂に易へずと、卒に能く其言の如し、頃日其後人行藏遺詩一卷書畫數紙を示さる、行體清老逸致あり、山水亦蒼古愛すべし、詩は其長ずる所にあらず、然れども意思蕭散其爲人に類す、新居に云、短垣劃地十餘弓。卜築幽居在此中。樓〇小圃容素月。窓低三尺約清風。劇苦松徑新移石。鋤草花園半種蔬。自笑書齋兼塾舍。朝々課讀集村童。小國に云く、永日閑人倦校書。時從鄰舍借犁鋤。小園兼作貧廚司。一半栽花一半蔬。東郊に云く雨膏新足草凄々。踏遍東郊路不迷。此際遊人思一醉。杏花疎影斷橋西。晚年皺盆の痛あり、詩を賦して云く、玉鏡塵封冷繡帷。生綃空寫舊容姿。殘燈半壁佛龕下。瘦倚拒霜花一枝。亦殊に悽婉なり

○關口雪翁水月樓の作、已に採て話中に入る、頃日北見南願關氏餘稿一卷を示さる、其載する所を見れば則ち數字の同トからざるものあり、余素之を傳聞に得、或は誤なしといふを得ず、唯其誤れるものを却て優るを覺れば、必らずしもこれを正さゞるべし、其他四海本兄弟。一堂忘主賓」竹密迷幽徑。花微媚小春」村犬吠疑窓。野翁眠晒翠。の如き亦妙、然れども雪翁の詩、專ら七子を學び、語皆平正、而して其摘べきものは僅に此數聯のみ、所謂白地明光錦、雖有文采、乏剪裁者なり、其子永豫字は孔凱、幼慧絕倫、九歲にして詩を賦し、書畫を善くす、南勢及三都に歷遊し、諸名流の間に周旋して、嶄然頭角を露はす、其詩餘稿の後に附す、亦七子を學び才氣交に過ぐ、雛鳳清于老鳳の聲と謂べし、寄源有尙山孟貫二君に云く、遙憶飲燕市。悠々旬日歡。高歌悲擊筑。逸興笑彈冠。久別闊情切。昨遊入夢寒。秋風清夜月。其奈索居難。古城花に云く、古城春色入荒涼。壞道頹垣帶夕陽。芳樹不知人代改。東風依舊落花香。海雲尋者隱居に云く、潭影印明月。泉聲流玉琴。初卷保子潤來訪に云く、竹密藏流水。林疎露遠岑。送法泉上人に云く、好去無期別。由來不住心。又哭積翠滕公に云く、如何天上招公急。此去應題白玉樓。何もなく身故す、二句卒に讖と爲る、年才に廿二、悲夫、

○北越の選詩は、竺雲洞を以て嚆矢と爲す、雲洞名は神龍宇は法天、中蒲原郡笠巷村長福寺の僧なり、同郡小戸村高陰寺、聖德太子の廟あり、文化中、寺僧龍臺重て之を修め、雲洞と謀り、遍く國中の詩を徵して之を廟前に匾し、又從て梓に入れ、同好に頒ち、題して北越詩選といふ、案するに推古帝二十八年上巳、太子百濟好文の士を召して詩を賦せしむ、其詩傳はらずと曰ふと雖も、吾邦詩道此に權興す、二僧の擧亦其故なきにあらざるなり、龍臺の後鶴陰、余と同窓の好みあり、嘗て其の事を語る、因て其詩扁を觀んとを請ふ、曰く亡失已に久し、北越詩選を求、亦得べからず、後古書肆を搜て一冊を獲たり、霜臺公より以下一百十家、採取博しと雖ども、決擇精しからず、甚だ人意に慊らず、唯其首選の功沒すべからざるのみ、雲洞著一日百首あり、其詩亦甚はだ巧みならず、過白河關に云く、百花時節出長安。千里東征入奧山。五十餘城明月夜。秋風獨度白河關。風調佳と雖ども。能因法師の歌意を飜譯するに過ず。獨り其牽牛花を愛す云く。昨夜雙星疑有淚。晶々露濕一籬花。詩太はだ警動、惜むらくは通首稱はず

良寛道人近代の奇僧なり、國上山中高僧萬元の遺跡あり、五合庵といふ、良寛其地の幽邃なるを愛し之に住す、詩あり云く、索々五合庵。至如懸磬然。戶外杉千樹。壁上偈數篇。釜中時有塵。竈上更無煙。唯有東村叟。叩門下門。又夢中題壁に云く、乞食到朝市。路逢舊識翁。問我師胡爲。住彼白雲邊。我問子胡爲。老此紅塵中。欲答兩不道。夢破五更鐘。其詩皆脩脩より出で、自然の妙あり、嘗て人に謂て曰く、貧道嗜まざるもの三

天保三年没年七十四

わり、詩人の詩、書家の書、庖人の饌なりと、獨り兒戲を嗜み、兒女數十を招集し、毬を打ち、草を鬪はし、迷藏を匿へ、欣々然として唯樂む、或ひと問ふ、答て曰く吾其眞にして僞なきを愛するのみと常に破衲を衣て山下の市村に托鉢す、人衣服を贈り錢財を施せば、皆辭せずして之を受く、路に凍餓の者に遭へば、輒ち衣を脱し鉢を傾けて之に與ふ、笋あり床下に出で伸るを得ず、乃ち床を撤し屋を毀ち、笋を養て竹と成し、其下に吟哦す、人其書を索るも獲べからず、兒女毬戲して之を乞へば輒ち書す、其詩に云く、袖裏圓毬直大千、誰言好手無儔匹、箇中得意人如問。一、二、三、四、五、六、七。故に其書を得んと欲するもの、先づ毬を贈て之を賺せば獲べし、他物の如きは金銀珠玉と雖ども顧みず、其草書懷素に似たり、龜田鵬齋北遊の時、之れを觀て神品と爲し、往て訪ふ、適ま其坐禪するに會ふ、侍坐半日、良寛其俗士に非ざるを知り、乃ち款語す、後鵬齋人に語つて曰く、吾良寛に遇て書法の妙を悟る、我書是より一格を長ずと、天保中沒す、其徒寒華子なるもの其集を刻し、題して良寛道人遺稿といふ、世に布く博からず、今多く亡失す、又た草堂集と題する者あり、鉛木文臺の訂錄する所なり、未だ付梓に及ばず、寫手相傳ひ、刻本に比すれば世に布く稍博し、其詩率眞任意、格律に拘せず、明迦に云く、誰謂我詩詩。我詩非是詩。始可與言詩。即ち詩人の詩を嗜まざるの意、世其自然の妙を愛すといふものは、此種の詩あるがためなり、然れども其流目恣に失し、殆ど法度なし、諸體中五言稍其境に入る、試に雜詩百餘首中より十首を選ず云く、寥々春已暮。寂々獨閉門。參天藤竹暗。沒階藥草薫。鉢囊長掛壁。香爐更無煙。蕭然物外境。終日啼鵑杜。迷悟相依成。理事本一般。寛日無字經。終夕不修禪。鶯啼春柳岸。犬吠夜月村。更無法可說。何有心可傳。無欲一切足。有求萬事窮。淡菜可療飢。破衲聊纏軀。獨往伴野鹿。高歌和村童。洗耳廬下水。可意嶺上松。靜夜破堂下。打坐擁衲衣。臍與鼻孔對。耳當肩頭垂。窓虛月初出。人定燈漸微。可憐此時意。寥々唯自知。從參曹溪道。千峯獨閉門。藤纏老樹暗。雲埋幽石寒。柱杖朽夜雨。袈裟老曉煙。無人問消息。年々復年々。終日乞食罷。歸來掩蓬扉。地爐燒落葉。靜讀寒山詩。西風吹夜雨。蕭瑟滴茅茨。時伸雙脚臥。何思復何爲。草蟲何喞々。煙火猥四隣。燒柴消永夕。織席給來春。閭家團欒話。無僞又無眞。不似城中士。營營終此身。家住深村裏。年々長碧蘿。曾無人事促。時唱無節歌。當陽衲衣。對月讀伽陀。爲報當路子。得意不在多。問古今已過。思今々亦然。展轉無蹤跡。誰愚又誰賢。隨緣皆可老。保己待終焉。飄我來此地。回首二十年。孤峯獨宿夕。雨雪思悄然。玄猿叫山椒。冷澗閉潺湲。窓下燈大凝。牀頭硯氷乾。永夜耿不寐。援筆聊成篇。言々皆禪理。其し、語々多く對偶を用ゆ、偶に似て偶に非ず、律に似て律に非ず、蓋し是れ道人一家の詩なり、大王父文仲翁、嘗て良寛の名を聞き酒を携て往て訪ひ、唱和半日、歸て家人に語て曰く、渠は僞道人のみと、其唱和の和歌十數紙、盡く以て人に與ふ、王母甚はだ之を惜み、私かに一紙を取り、今猶家に藏す、世を擧げて皆奇僧と稱し、嘖々已ず、翁獨り以て僞道人と爲す、知らず何の見る所あるや、

萬元和尚は慧海、俗姓は廣橋、和州吉野の郡宮なり、夙に世榮を薄んず、官を棄て僧と爲り、雲遊越後に來り、國上山中に住す、題五合庵壁並引あり云く、沙彌萬元者、釋氏孤子也、天性多病而荒學業、生來疎懶而耽遊戲、天和之初、遭身不幸、遠背京洛之花、獨吟越山之雪、久賀躬寺貫主良長僧都舊識也、見吾孤茸無依、而加哀憐甚深、貞享之末、修營廬於寺院之傍、新借鶴鶴一枝、日給粗米五合、四以名庵、聊足安居候、於是忽忘往之遊境、而鳴今之得意、一管漫握、三言率成、情見乎辭云、邊城北。太祖陽。卜靈境。修故莊。前僧院。後道場。編柴戸。結草床。臺上壁。竹生墻。春晝靜。秋夜長。花芽郁。月清蒼。冬日淨。夏天涼。嵐濃翠。雪微茫。幽景足。孤賞忙。書信筆。詩滿篋。茶半甌。米一囊。心歸夜。笑戒香。身懶日。睡閒房。起居逸。寢食忘。外不羞。中自康。誦明呪。禮覺王。離醉戲。學遊狂。老杉合。漏晨光。群鴉散。送夕陽。容膝處。可徜徉。打頭底。儘悠揚。維摩室。耀什堂。一粒大。萬端藏。題其榜。安樂鄉。引中生平を叙し、詩中懷抱寫し、筆能く曲盡之を讀めば自から其人を知る、以て一篇の自傳自贊に當べし、後百餘年良寛道人此に住す、而して其百種の異行一に天眞に本づく、蓋し萬元の風を慕ふ所ありといふ、

加藤善庵の柳橋詩話、甲越二公を論ずる頗る妙解あり、近ごろ江村北海の日本詩史を讀む亦云く、世之談兵者、必稱信玄謙信、二公誠敵手也、但信玄智計絶人、其御軍也、紀律森嚴、所謂量敵而後進、慮勝而後會、要之其爲人也精細、雖由此讀書善詩不異也、謙信暗嗚叱咤、性如烈火、而讀書善詩、軍中作雅會、可謂眞英雄眞風流也、其言善庵と暗合あり、然れども二氏の論、一は兵を以てし、一は人を以てす、共に未だ深く詩中の精微に及ばず、余謂に機山の詩、格調精均、率ね皆誦すべし、屋頽亦有娥眉趣。一笑藹然如美人。と云ふが加きは、半韵秀出、楚々人に可なり、霜曼公七尾城の詩、調高く響逸し、豪邁比なし、故に賴山陽論詩絶句

に云く、横槊吟、驅北海濤。敵城膝屈拜旌旄。背爲勅勅歌和涙。霜滿軍營鴈影高。蓋し霜滿軍營の二句、洵に横湖奚磨盾の概あり、固より宜しく拈出すべき、而して結未淺率、竟に未だ兜鍪の氣を脫せず、特に人意に慊らざるを覺ふ、要するに天分高絶、瑜瑕相掩はず、其精詣の功に至ては、機山に一籌を輸せざるを得ず、故に世の二公の詩を論ずるもの、概ね彼を揚て此を抑す、而して公の恰も佳詩あるを知らず、田邊明庵なるものゝ詩話に云く、越後士人藏古洞蕭、金泥書二句云、一聲吹徹營頭月。十萬精兵盡不眠。傳言霜臺公之作、沈雄悲壯の景、揮灑を以て之を出す、東坡の令嚴鐘皷三更月。野宿貔貅萬竈煙と雖ども、多く過ると能はず、方に武將の眞本領を見る、機山の詩之れに視ふれば、直に是れ女郎詩のみ、但明庵一無名男子、其書未だ信を取に足らず、古來名將勇士の遺物、多く假托に出づ、安んぞ其古洞蕭亦後世の贋作にあらざるを知らんや、錄して以て博雅に質す、

本邦詩話の選、首に菊地五山を推す當時文運隆昌、人才溢起、家ごとに驪珠を抱き戶ごとに荆璧を藏せざるものなし、五山又專ら袁隨園の例に倣ひ、猶幽を發闡し雋異を標擧し、凡そ文苑墨席、贈答唱酬の什、悉く甄錄を加ふ、而して其越人に及ぶものは、余亦評隲せざるを得ず、琴臺貽堂荆山の如きは、已に話中に入る、其他更に數人あり、一は室方高と爲す、字は子山、高田の人、刻苦詩を作り自から詩瘦と號す、晚春雜興に云く、幽窓寂莫雲春深。纖纖書懶又侵。芥圃開花釀辛味。梅園結子帶酸心。忘憂酒只宜微醉。得意詩來自苦吟。日永如年消不得。更移茶竈就松陰。後半清遒、余尤も是六句の深く詩中の甘苦を得るを愛し、斯道に於て三折肱を經しを知る、聞く衆議院議員室氏は其後なり、遺詩數卷猶其家に藏せりと、余室氏と相識ること久し、他日將に全稿を索めて再錄せんとす、

宮川需、祿齋と號す、柏崎の人、五山詩話に言ふ、祿齋邑有地名雲湖者、即其家先所新闢者、今亦往寓焉、祿齋畎畝、初入京學、後改從文晁、以書梅一幀見贈、疎秀可喜、詩亦可逸氣、題雜畫中二絶云、夏木森々揷半空。千尋瀑水白雲中。巖扉深閉無人訪。仙鶴翩翩舞晚風。驅馬空山深雪間。風吹韉帽弄痴頑。閉門擁被非無意。只爲梅花不可間。聞く宮川氏は柏崎の富侯、其先を四郎兵衞と稱す、常に意を國利に注ぎ、多く草萊を闢く、故に宮川瑞軒と稱し、以て河村瑞軒に比す、而して紫雲寺の疏鑿を尤も偉業と爲す、五山所謂雲湖は即紫雲寺湖なり、享保年間、湖を決して海に注ぎ、蘋藻芻蕘の地、變して稻粱禾黍の鄉となり、田野新に闢け

人煙漸く聚り、鷄犬相和す四十餘村、總稱して紫雲寺鄉と云、蓋し瑞軒の力尤も居多なり、鄉中宮川氏、儀右衞門と稱す、即ち瑞軒の支族なりとはいふ、近ごろ廣瀨蒙齋（名は典桑名藩儒員）の雲湖詩卷の序を讀む、詩卷は瑞軒の功を紀するものにして祿齋の編する所なり蓋し即ち紫雲寺鄉宮川氏の祖ならんか、嘗て記す近人の修選中祿齋の詩を見る、詩今忘失す、只字は其義といふ、

中澤淵字は伯玉、芳洲と號す、北浦原郡中潟村の人、三浦九折に從て書を讀む、舟行夜泊に云く、叔帆依浦口。容思奈悠々。只有燈燃夢。曾無酒綏愁。啼鴉山叶月。落鴈水涵秋。不復聞鐘漏。逢窓占斗牛。亦五山詩話に見ゆ、

清人李穆堂云く、凡そ人の遺編斷句を拾て、代て爲に之を存するものは、暴露の白骨を葬り、路棄の嬰兒を哺むに比すれば、功德更に大なりと、何ぞ言の沈痛なるや、世間又遺編幸に存して、其人考ふべからざるものあり、若し能く尋究して爲に之を明かにするものあらば、亦豈無主の墓を修め不祀の鬼に享するに優らずや、余生平古今人の選著を撿し、越人の詩を得れば、輒ち鈔して以て之を存し、裒然卷を成す、詩話を編するに及び、其佳なるものを選んで、先づ話中に入れ、其人考ふべからざるものは、則ち又尋究し得て明かなるを待ち、次を逐て登錄す、而して或は數年の久しき之を漠然知るべからざるに終るものあり、西雪莊の如き是なり、五山詩話に言ふ、余酷喜臧齋詩、而不敢勸人者、只恐其因以傷指耳、果能同臭味者、吾其可不與哉、今日吾所與者、一爲伊勢原迪齋、一爲越後西雪莊、〻〻名は皆字は白卿、聞蟲に云く、兩處蟲聲和、月明。閑人判得一聲々。砌邊唧々有時斷。輸與墻邊盡意鳴。曉眺に云く、菊黃雲白葉如丹。天與秋光偏要妍。却是冬來嫌設色。只將造法淡描煙。二詩果して誠齋の風味あり、而して其人僅に一たび此に見ゆるのみ、其里居其生平、俱に漠然知るべからざるに付す、余特に之を惜み、歷訪十年、卒に知るものなし、五山又言ふ、越後王詩字不言、頗好吟詠、從余受業、湖上云、荻蘆花發雪成團。鴈雜寒鴉帶雨飛。青笠綠蓑風又急。釣舟一棹不須歸。余昔在浪華、學詩者有高達、亡友梅崖嘗有歌後唐人在君門之語、今又得王詩、可謂添一箇空心唐人矣、王詩亦是何人なるを知らず、

柳灣先生姿聖林禮子歸越後に云く、遊衲誰曾說有方。不妨吟倦却回鄉。白雲紅葉秋山路。榔榔橫攜詩一囊。何日更參文字禪。今朝暫喜隔真緣。恐師忘却來時路。住着寒山過幾年。先生嘗て聖林上座見過席上煎茶談

詩の作あり、已に話中に入る、今此詩を讀み、方に聖林即ち吾卿の詩僧なるを知れり、而して世已に其人を知るものなく、一囊の詩亦何の處に流落するを知らず

玉井海嶠名は華字は氷鑑、柏崎の人、少して星巖翁に學び小野湖山大沼枕山等と遊び、詩名あり、亡友水落仲珪嘗て余に語て曰く、海嶠醜黑にして至性感慨人に過ぐ、星巖翁甚はだ之を愛し、常に左右に侍せしむ、一日名字を請ふ、翁笑て云く、貌に失ふものは名に得ざるべからずと、因て名は華字は氷鑑と命ずと、鶴汀生吟香集題詞に云く、一部編成盡色絲、綺情羅思太紛披、青峨萬口爭傳唱、豈止黃河遠上詞、才藻華麗、獨り名と貌と相稱はざるのみならず、詩も亦然り、昔し唐の宰相鄭畋の女、羅隱の詩を覽て、諷誦已まず、隱が貌寢陋なり、女一日簾を隔てゝ之を見る、是より絕て其詩を詠ぜず、海嶠亦才あり貌なし、豈羅隱か憾なきを得しや否、文久中沒す、遺稿散逸、玉池吟社詩中僅に一首を存するのみ、

丸山湘雲名は頌字は楚香、樹姓、又鴨汀と号す、小野湖山翁詩屏風に云く、湘雲詩思敏捷、親炙星巖翁數年、才學大進、全以爲畏友と、嘗て翁の谷道紀事示丸山湘雲詩を讀む、湘雲何人たるを知らずと雖ども、其詩に因て中魚沼郡水澤村の人なるを知れり、玉池吟社詩中其詩數首を錄す、神韵遒秀、酷はだ星巖翁の少作に肖たり、書懷示森田簡夫に云はく高吟廊落欲依誰。雪漢春風志已違。諸弟居官皆顯顯。一身爲客足歔欷。深溪秋老、衡蘆瘦。大海雨新、荆棘肥。不見靈均南土恨。好修得意古來稀。春日偶成に云く、槖踏長街輕々塵。香烟茶鼎養吾神。杏花開處偏多雨。燕子歸來又一春。官海浮沉眞覆手。客天寒暑太磨人。惟心靜處皆仙境。舟梅何勞更問津。江頃に云く、西風吹老暮江頃。露草芒々生暗愁。花盡兼無荷可折。白翰閑瘦滿汀秋。東山看花暮歸所見に云く、綺羅笑語滿山春。看到金烏沒半輪。背上殘紅聲輭々。落花風送醉歸人。題壁紅魚白處圖爲遠山雲如に云く、秋風何復憶尊鱸。寄跡漁村酒滿壺。魚大如舟蟹如席。一齊束縛上寒厨。遊不忍池同懷之九萬賦に云く、鳥影匆々彈指間。依稀風影對愁顏。惟餘垂柳一行綠。認得梁家消夏灣。荷香一陣夜風輕。珠露蟬人恍有聲。眉樣彩蟾秋慘澹。橋姿樓影不分明。嘗て一友中魚沼郡より來る、之に問ひ且答て曰く、湘雲年已に高く、老病相侵り、久しく吟課を廢すと、事已に數年を隔つ、今は則ち存沒を知らず、

玉池吟社詩、星翁門下の人才を網羅す、其書弘化嘉永の間に成り、今を距ること遠からず、卷中の作家、現存するもの猶多し、而して湖山松塘黃石諸老の如きは、巍然たる魯靈光なり、只我越人に在ては、市島屏山玉井海嶠沒して已に久しく、丸山湘雲は其存沒を知らず、高橋晴村佐藤醒庵田中脩道樞三洲諸子に至ては、其里居を併せて之を知らず、余の詩話取る所のものは、例、已故の人に限ると雖ども、其存沒知るべからざるものは、寬に從はざるを得ず、且つ余星翁に於ける、一瓣香を奉ること久しく湖山松塘黃石諸老は則ち親しく其教を奉ず、諸子已に星翁の門に出で、諸老と友たり、則ち余の諸子に於ける亦其緣なしと謂べからず、之が爲に一たび格例を破るも、敢て辭せざる所なり、晴村名は鑑字は方明、一字は月池、富坂寓居に云く、客久賃居還似家。朝吟夜坐小生涯。半床縹色借來帙。一甕黃香乞得花。馮世參差眞可笑。隨人俯仰更堪嗟。忘憂賴有盈尊酒。滿壁庚々落醉鴉。醒庵名は得字は元卿、憶歸に云く萬里飄零作旅人。寒風孤枕聽歸頻。鄉關積雪高於岳。猶勝都門十丈塵。春夕に云く、月照梅花夜已分。暗香依約隔窓聞。怪來思詩清如水。春透輕紗一片雲。修道名は恕字は仁卿、舟行に云く、水程將十里。殘日已收紅。湍勢奔衝石、蒲梢易得風。燈微村路遠。沙白月痕籠。今夜何邊泊。荷香柳影中。又詠王昭君短古一篇あり、中に言ふことあり云く、若使和親果有益。忠節遠出諸功臣。若使和親果無益。三千第一薄命人。極て警策たり、古來照君を詠するもの、聚訟紛紜、此篇能く情を原て理に推し、論乃ち定まる、銳刀亂麻を斷つの快あり、三州名は鑿字は子孝、別号は西山樵夫、小島谷途中口號に曰く、夜來驟雨朝來雨。一雲纔過便是晴。是雨是晴無定準。鞍頭猶着雨衣行。「雨乍收邊曉吹寒。重峯出沒亂雲間。馬蹄踏處模糊里。人入襄陽畫裏山。小島谷村、三島郡に屬す三洲三島、字義亦近し、或は是れ三島郡の人ならんか、其詩醒庵憶歸作と云ふに、能く北陸の風土を寫す、實境を歷るもの、自から其妙を知らむ、

星洲平戸鄰、越後の人、春濤先生新文詩中、時々其詩を見る、之を先生に問ふ、曰く、星洲今東京に寓す、筆耕を以て生と爲し、尤も小楷に巧みなり、新文詩原稿多く其手を傭ふと、後人しく星洲の詩を見ず、先生亦已に道山に歸る、其存沒を問はんと欲するも、復得べからず、因て玉池吟社諸子の例に倣て、數首を選錄す、雜感に云く、心緒經秋馮夢孤。遊踪久寄小西湖。一編青史人今古。十載紅情事有無。燈瘦蟲聲依破壁。夜深蟾影掛高梧。餘生聊得閒如此。酒味茶香供老娛。春濤先生新居に云く、小天台下避紛華。不問先知髮史家。城裏園池間世界。壺中日月澹生涯。營營寒倚美人袖。

茉莉香添禪榻茶。好自糊邊尋路去。欲催坡老賞荷花。
早春偶成に曰く、石驚天破復逢春。無限暗愁紛似塵。
半世榮華歸夢幻。一朝哀悼減精神。銀瓶濃水梅花白。
淨火燒香篆字新。爲寫涅槃經幾卷。不僧身亦坐禪人。
笑我に云く、笑我多情老愈痴。都門到處醉瑤巵。東風
芳草綠生屐。暖日桃花紅亞枝。粉蝶猶尋蒙叟夢。烏絲
重寫美人詩。白頭未害頻呼酒。夜雨春樓話舊時。湖樓
春日に云く、湖樓酒醒跡如塵。白髮東風又一春。傷別
折殘橋畔柳。無情枝拂有情人。相思我亦寄東風。一醉
買春情不空。柳外煙波花外月。阿誰攝留畫樓中。春日
偶成に云く、滿城爭賞好年華。一路先尋名妓家。我愛
吾蘆春亦在。小柴門柳小園花。晩春即事に云く、苦吟
身似病維摩。又是清明夢裏過。燕剪鶯梭春欲老。牡丹
時節暮寒多。暮春に云く、軟紅塵裏羨仙寰。却笑多情
屬等閑。春酒一醡錢尚在。夢邊欲買綠陰山。清詞麗句、
口誦すれば香を生ず、其春濤先生に贈香する深きを
知る、

原松洲名は簡字は南史、別號は優所、江戸の人、柳灣
集中送原士簡奉母還柏崎舊寓詩あり、士簡は即ち松
州の別字なり、本白石氏、其先仙臺の伊達式部に出づ
、式部長子あり、當に家を嗣しむべし、而して後妻公
室より下嫁して男を生む、立て嗣と爲し、別に長子に
祿八千石を賜ふ、乃ち松洲の遠祖なり、中世事を以て
祿を失なひ、大泉氏に更め、松洲の父源藏に至り、槍
術を以て朽木公に仕へ、江戸邸に居る、松洲幼にして
精敏、槍術を父に受け、長ずして讀書を好み、尤も史學
に遂に、父沒して祿を襲ぐ、公松洲の才學を愛し、將
に擢用する所あらんとす、用事者之を忌み、公亦偶ま
館を捐つ、遂に事を以て譴せられて福知山に往く、母
氏行ことを欲せず、亡命して高崎に抵り、母族に依り
、姓を變じて原氏と爲す、雖を市中に下して生徒に教
授し、衣食略足る、偶儉人の侵辱せんとするものあり
遭ふ、乃ち母氏を其徒に托して江戸に逢り、去て信越
の間に遊ぶ、柏崎の邑長山田重弘兄弟其學術を重ん
ず之を留む、松洲諸らく地饒俗淳以て親を養ふに足
ると、遂に母氏を迎て徙居す、既にして生徒益多く士
人の子弟亦往々從て遊ぶ、邑桑名の封に係る、公聞て
之を嘉し、特に召して士列と爲す、蓋し殊遇なり、文
政巳丑十月新潟に遊ぶ、時に卷菱湖亦歸省す、嘗て松
洲と舊あり、其旅舍に就て歡飲す、飲罷み病なくして
奄かに逝く、年五十四、菱湖爲に其墓に誌し、朝川善
庵之に銘す、蓋し善庵は其の交遊中尤も推服する所
なり、著詩抄十卷周易筆記二卷詩文三卷十六堂筆記
十七卷あり、今多く散逸す僅に早秋一首を得たり云

く、晩來散歩信孤筇。草茂苔深後圃中。一味新涼人未
覺。梧聲蟲語忽秋風。其他佳句斜陽明暗山向背。志樹
青黃霜淺深」松下盤桓三徑熟。竹間來往四隣親の如き
俱に誦すべし

原修齋名は雄字は君量、一字士傑、松洲の男なり、幼
にして怙を喪なひ、父執朝川善庵菱湖等に從つて
學び、後昌平黌に入り、業成り鄉に歸り、家塾を興復
す、一時の俊髦皆な其門に集る、山田松村諸子の如き
其傑出するものなり、明治乙酉八月病で沒す、年六十
四、修齋學經更に渉り、尤も左氏春秋に精し、著す所
のもの讀春秋五卷讀左筆記十卷詩經抄說十卷論語抄
錄十卷あり、又書を善し詩文を喜み、詩文集八卷あり
、雛田松溪其長岡の一絕を賞し、唐人の音節に愧ちず
と謂ふ、其詩に云く、水到長城燕尾分。瀛王堂畔日將
鹽。扁舟今夜泊何處。隔岸青山半是害。

星野鵜水名は貢字は文剛、柏崎の人、少年都に出で、
古賀精里に學び、篤學を以て聞ゆ、神戸本多侯召して
之を祿す、故あり仕を致し、雖を下して教授す、未だ
幾ばくならずして鄉に歸り、上田尻村に居り、又比角
村に徙る、其人に教ゆる經術を先にして文藝を後に
す、靜修質實、貨財を殖せず、田宅を置かず、但書萬卷
を儲へ、詩を作りて云く、減食省衣細萬卷。兒孫須體
祖先心。弘化二年正月歿す、年六十三、篠崎小竹其墓
に誌す

近時北越詩人、水落雲濤を以て巨擘と爲す、雲濤名は
恭倩字は良輔、柏崎の人、詩才橫溢酒量亦豪なり、飲
めば則ち醉を醉し、醉へば則ち口吟を絕ず、喜で長篇
を作て其才を馳騁す、奇語警句、層見疊出、蔗舟の泉
源滾々盡きざるが如し、世以て柳灣以後の一人と爲
す、少時京師に遊び、梅辻春樵に學ぶ、春樵其才を愛
し、之を京師に留めんと欲す、雲濤亦意あり、而して
故あり留まる能はず、遂に鄉に歸て刀圭を業とす、雲
濤已に志を得ず酒を使て佯狂し、憂憤不平の氣、皆發
して詩と爲り、詩益巧なり、知友其洗練度なきを憂ひ
、屢止むれども聽かず、遂に以て醉死す、著雲濤集九
卷あり、初集一卷刻成る、餘は皆家に藏す、余其猶子
鳴水と善し、嘗て之を觀ることを得たり、功力の精、
柳灣に及ばずと雖ども橫溢の才、或は之に過ぐ、名下
果して虛士なきなり、其和小野湖山論詩十首を讀は、
白詩を推尊する至らざる所なし、其獺香することを深
きを知れり、然れども春樵先生七十卅四韵、丁未震災
紀事四十二韵、問天行親不知各一百韵の如きは、縱橫
奇恣變化を極む、趙甌北を學ぶに似たり、只惜むらく
は其逸足を恃で往々奔放す、是れ斐晉公の韓昌黎を

笑ふ所以なり、索森德基酒瓶に云く、貴家黄金罍。田舍老瓦盆。一奢而一儉。非酒人所尊。不若陶瓶子。自然古風存。奢儉得其中。氷清且玉温。其喙長不啄。其口小不言。青絲繫其頸。白湯煖其腹。其腹受五斗。可以代匏樽。莫言腹尚小。中有別乾坤。一酌醒春然。蕭々又昏々。再酌太古然。連々又渾々。三酌天真見。能令浩氣惇。太白眠長安。奠噲飲鴻門。秋風落孟帽。諸君入劉檀。錢空或懸鬲。燭滅時昵髣。凡此數君子。名聲凌宕嵩。是皆酒之賜。無非瓶之恩。若人死已久。恨不屬鼎鞬。千錢換一瓶。請君休憚煩。我願遍瓶子。守口絶禍根。又願大其腹。滌心雲夢吞。數百人堪容。五子卷可捫。若斂陶瓶子。此事驚論。放筆快意、其自在を極心。餘は以て類推すべし、近體詩尤も七律に長ず、合蓄に乏しと雖ども、屬對綺切、往々古人に減せず、餞王佩于青海浦客樓に云く、赤岸千尋海氣秋。煙波縹緲夕陽愁。潮聲吹憾能登國。嶽色晴分佐渡州。樓上人如天上坐。眼中舟在畫中浮。怕他冥若鵞河伯。莫向琶湖説此游。歳晩書感に云、譬事閑時塵事忙。藥錢換粟任空囊。酒因年儉偏增價。梅爲山寒未放香。强項動漕天抑壓。厚顏聊與俗低昂。詩因我有三千頃。祭罷何須苦薦羊。惜花に云く春氣和。夢々茫然。一覺無由續舊緣。霞襯馬蹄新雨地。雪迷人眼爛晴天。殘紅枝瘦鶯胡蝶。嫩綠陰寒哭杜鵑。葬罷芳魂勞遠望。昭君塚上草如煙。歳暮書懷に云く、人間禍福總悠々。無事無時不可愁。臨老心如投異域。追貧身似坐沈舟。黄金豈落書生手。白髮工欺志士頭。三十九年何所得。一燈依舊貫膏油。書肆某新藁に云く、酌史園經樂有餘。所愁僻境乏圖書。自嗜求免因人熟。要敵君家謫五車。「玉軸牙籤日奢舒。喜他開店接貧居。山人自賀君休怪。恣借書看不買書。又戲贈内後半に云く、臭骸非淺抱。醉骨有誰埋。莫嫌劉老酒。猶勝太常齋。醉中の浪語、却て眞情率露するを見る、其他佳句、五言には米貫貧心怯。山深小吏尊。分秧針水面。洗樹斧鑄間。七言には使我成名唯有酒。斯文可羨豈啼飢。「池水有文蟠鯉鱷。霜林無影宿鴉寒。」過雁僅飛將墜水。遠帆不動以粘空。」防雪計如臨大敵。憶梅心似待佳人。」媚置細人寧祭與。剖身豪更欲藏珠。」雄心漸退逢風鷁。殘尾難留赴壑蛇。」積雪成山埋老屋。闢龍鱗海幾驚沙。」風勁驚沙吹地走。石多怒浪蹴雲飛。」鐘殘夜水明邊寺。燈點秋林鑑處村。」春眠有味濃於酒。午院無人靜似山。の如き皆主客圖中に入るべし、但其篇什甚は左富み、盡く傷異を標する能はず、此れ特に弘化嘉永二稿中より摘出するのみ、

桑名侯嘗て召見して藩醫に準ず、戊辰の役、侯兵を柏崎に駐む、既にして軍敗れ、侯加茂に遁る、雲濤を召して倶に從はし心、誼辞するを得ず、乃ち筆を投ぜて起ち、命を流離顛沛の際の奉ず加茂陷るに及び、侯に辞して國中より脱歸す、雜詩數十篇あり、集中に附す、紀實に云く、連天風雨動孤城。殺氣如雲水外横。午夜山窓眠不着。時聞人馬疾行聲」昨夜東方出援兵。隔山砲響忽無聲。知他不屑遷延役。大戟長刀直斬營」見山半夜斬營回。下馬金聲月裏開。問君歸還有何物。割取數枚人腦來」裏ノ歸到鴨溪濱。行路相看意氣新。馬革區々何足道。餐中盡是結纓人。避兵掉尾山に云く、巨巒隔山終夜鳴。竄身岩窟劣逃兵。忽驚霹靂過頭上。百似危杉裂有聲。之を讀は魂悸動、一服の截鬼劑に當つべし、其他望鄉に云く、太平時節不知愁。十載西南事遠遊。今日離家纔一月。望鄉幾上夕陽樓。兵閉崎嶇間關の狀、言外に在り、暮過地藏堂に云く、風悽雨冷日昏黄。鬼哭啾々新戰場。何處山僧吊魂魄。數聲幽磬地藏堂。乱後荒涼悽酸の景、殊に慘目すべし、又宿松蹊家に云く、主人與客聽無語。劒影如星燭下飛。蓋し松溪捕に就くの時なり、其錯駭狼狽の狀亦想ふべし、雲濤明治乙亥八月に沒す、今其集を閲するに、文政甲申に起り、明治戊辰に畢る、其死を距る猶七年あり、余嘗て其老懷を愛す云く、一弟雲濤二弟亡。老懷索莫似他鄉。乱山斜日秋風暮。獨倚高櫻數鴈行。集中に載せず、蓋し此七年間の作なり、晩年の詩益僧淨老幹枝なく、精神畢く露る、惜らくは多く見るを得ず、雲濤三弟あり、玉佩天裳仁祖といふ、友干甚爲し、仁祖早く亡す、玉佩近江に在り奇禍に罹る、雲濤哭して云く、髫齔相從遊和筦。豈圖白首網羅藏。身如可購寧求活。口不能言暗抱悲。天下恰當多事日。老來偏憶少年時。即今若使惠連在。共向青山踐宿期。天裳東都に仕官す、雲濤詩を寄せて云く、骨肉雖親跡却疎。東瀛北越久離居。憐卿曉陌衝霜出。輸我春田帶雨鋤。老矣閉門張仲蔚。懷哉題杜馬相如。功成身退男兒事。早晩耦耕追溺沮。其餘贈答諸代退休を望むものにあらざるはなし、蓋し深く玉佩の横死を悲み、天裳の再び禍機を蹈ことを畏るゝなり、又無兒歎示直姪に云く、「百軸文章數畝田。向誰付與向誰傳。憂同伯道逃難日。身過商瞿改娶年。我獨無兒非婦過。人皆有後是天憐。古來呼姪爲猶子。好代愚翁莫忝先。幸に子なし、直姪を養て嗣と爲す、乃玉佩の遺子なり大塚巢南名は紳字は玉佩、通稱は六郎、雲濤の弟なり、少時詩を梁翁星巖に學び、兄と名を齊ふし、雙丁二陸の稱あり、彦根の國老木俣土佐の幕客大塚雲澗其の才を愛し、養て子と爲す、因て木俣氏に仕ふ、櫻田の變後、土佐復讐の議を唱へ、闔藩動搖す、權臣遂に巢南を捕て吏議に付し死に論ず、蓋し其の謀主たるを以てなり、雲濤之れを哭して云く、乾坤唯我傷寃魂

竹帛無人記姓名。樓と謂へし著巣南集一卷あり、獄中作に云く、蟋蟀警寒無曉昏。催人衣褐斷人魂。籠中鴻鵠思千里。夢裏鵑鴿哀九原。自覺形骸非我有。誰能禍福識其門。南冠賸有鍾儀淚。瀝瀝秋風遶故園。悲壯淋漓、字々心血を掬む。錢虞山獄中雜詠多く過々能はざるなり、他は秋曉赴山僧招に云く、古寺秋煙曉。撞破下堂鐘。群動機水發。氣象似洪濛。我來踐宿約。一路信瘦筇。高林霜始下。西山爽氣鍾。水落裳可褰。石滑髮蒙茸。我意非參佛。物外恬幽胸。虛澤不留影。孤雲無定蹤。乃是眞覺境。萬緣俱一空。幹々虔乍擧。寒暉散前峯。未即人門去。立看百尺松。病中雜感に云く。身如秋卉瘦堪驚。累月痎瘧潮未平。一長一消鱗臣路。乍寒乍熱認人情。三更倦枕芭蕉雨。幾夜聆機蟋蟀聲。宿志百端皆剝落。書窓間殺短燈檠。憐吾兄弟悉睽離。音問尋常閱月遲。漸覺壯心非往日。還愁夙約背來時。各鄉飛夢一家淚。數箇同胞三處思。多病年々成底事。秋風又入紫荊枝。游濠梁園次岡本太夫韵に云く、曾寫秋光墨未乾。今來不復昨來看。老松亞地虬根瘦。怪石激泉巉骨豈道掌中無鬼蹋。即知胸次有龍蟠。果然寸鋩殺人了。毫末鋒芒凛莫干。呈岡本君に云く、得句尋常放手遲。憑君纖解判敲推。三生痴骨憐無本。一代標望仰退之。文墨布衣吾豈信。道存鍾鼎世誰知。論交休說今非昔。亡友水落鷗水、巣南の孤子なり、八歳にして怙を喪なひ、舅氏雲濤に養なはれ、詩庭訓あり、弱冠新潟醫學校に入り、課業の暇、吟哦を廢せず、一日鄉友濟水亭林と倶に余が寓居を訪ふ、一見莫逆、斷金の契あり、業成り東京に遊び、詩を森春濤先生に問ふ、先生其の才を愛し、門下永坂石埭醫理に精しきを以て、往て之に從がはしむ、石埭亦其器を愛して、仕進を勸め、海軍小醫に補せらる、甲申夏、清佛難を擂す、我が政府扶桑艦を派遣して清國各埠を巡視せしむ、鷗水醫官を以て其行に從ひ、夏より冬に至つて始めて歸る、途長崎に出で、小肖を寫して余に寄せ、上に一詩を題す云く、廿七年如夢。苑々跡混塵。一七難醫國。千金莫擲春。立名慙小技。好事損精神。不如千日酒。醉死得天眞。32春二月、余偶事を以て東京に入る、先づ春濤先生に謁して、鷗水の近狀を問ふ、先生愁然として曰く、好少年已に鬼籙に登ると、余驚て故を問ふ、曰く、扶桑艦朝鮮を過ぐ、兵士多く邪熱を患ふ、鷗水亦其毒に染て而して自から知らず、歸京の後、日紅朋友と市廛の中に醉倒す、一夕暴熱大に發し、數日にして遂に絕すと、嗚呼醉死一語竟に讖を成す、悲矣、鷗水名は璋字は仲珪、酒に豪にして詩に敏なり、尤も余と唱和する毎に樂み、山河百里を隔つと雖ども、一詩を得る毎に郵寄余に示す、稿今存錄せず、僅に二首を記す、書懷に云く、記得江湖舊放顚。蹉跎身世有誰憐。豪懷伸酒猶前日。意氣籠人便少年。塵影蕭疎吹短髮。燈痕依約照殘編。未除一片飛騰念。持到如今更矯然。柳橋酒樓別水野櫻雨に云く、別酒曷醒魂又鎖。江樓誰弄一枝鵑。離愁脈々無由綰。暮雨綠寒古柳橋。

近時北越の文事を談ずるもの、柏崎を稱して淵藪と爲す、而して淵源今井龍門に出るを知らざるなり、龍門名は元吉、又申々樓と號す、文化中帷を幕中に下し失意人還多昔時。從雪湖黃石青山。諸君游大洞に云く、清遊半日趁幽期。偶上湖亭秋已遲。巖隔淡雲疎雨外。村荒黃葉夕陽時。漁舟歸浦剩痕散。佛塔倚巖孤影危。休說遺墟千載事。濤聲嶽色送餘悲。訪星巖先生苔水莊に云く、苔水橋西竹外磯。來陪幽眞對斜暉。紅沈碧水餘霞散。白映青山一鷺飛。詩自靜中生妙韻。書從醉後運神機。滿前風物甚清美。贏得高人長掩扉。還鄉示故舊に云く、忽來相見故鄉天。說到從前便黯然。滿海悠々一千里。音塵兩絕十三年。雨中渡湖に云く、百尺檣端送斷虹。滿湖細雨灑斜風。青山影失四無際。一片帆懸縹渺中。泛洞山湖に云く、亞殿秋高神女祠。松間丹碧映清漪。逢人每說湖山好。却對湖山無好詩。の如き曾妙、雲濤の弟に愧ずと謂べし、

て生徒に教授す、家塾の設けある之を嚆矢と爲す、刻龍門舍詩集二卷あり、次で植木椒園なるものあり、弟無窮と相提へて風雅を提唱し、斯文益振ふ、椒園名は遷明字は元惠、著椒園卷稿一詩あり、無窮名は某字は仲寧、著新好集一卷あり、後來松洲鶴水諸子輩出、大に門戶を張るも皆首功を三家に遜らざるを得ざるなり、惜むらくは世を距る已に遠く遺著多く傳はらず、頃日友人關醉花爲に數篇を拾綴して示さる、因て各其一を選す、龍門漁村夕照に云く、雨歇漁村外。殘虹映水長。群童沙際集。掛網曝斜陽。椒園夜過鮏溪に云く、岸樹溪風夜色空。一節沿水人迷蹤。遙知古刹隔山住。雲外鐘沈寒雨中。無窮春日過實相寺に云く、飄然逃世境。閑叩寺門扉。花霧鬱陰冥。茶煙竹外微。人憑吟榻坐。鳥近出欄飛。未了無言理。聊離有漏機。關醉花好事の士なり、少年越柏新誌を著はし、盛に花柳の情事を談ず、頗る風流自賞の態あり、近ごろ柏崎の詩人を問ふ、醉花爲に其友西卷遂處松村春風二子の詩を寄せ來る、遂處名は子讓、通稱は永一郎、家素舊族、維新の後市吏より副大區長に進む、嘗て東京に遊び、屢豪擧に耽り、客囊盡き、一絕を口占す云く、黃塵滿面滯京華。落魄三年不作家。自笑風流緣未盡。春衣典了買梅花。春風名は操、初め原修齋に學び、文を

属する才思あり、後東京に遊び、喜で諸名家の間に周旋し、時としては私塾講師と爲り、時としては新聞記者と爲り、筆耕心織以て生を爲し、遊戯の編著甚はだ富む、通俗後水滸傳一書、諧文流暢、世多く之を稱す、近世先哲叢談に至ては、偉言瑰行世人を警醒するに足るべきもの、掇輯遺さず、原公道の選と併傳すべし、春日に云く、櫻柏濃白柳深青。春意微曉一庭宿醉醒來頭尚重。繡簾雨讀花經。詞亦清婉誦すべし

近世碩學、内藤鍾山丹羽思亭と、時を同ふして名を齊ふす、思亭治經の餘、文章に長ず、世皆之を稱す、而して鍾山の兼て詩に邃きを知ざるなり、鍾山名は公基字は伯温、三島郡船橋村の人、年甫めて十四、父命ずて僧と爲す、鍾山浮屠を喜まず、父に乞て歸俗す、三十、笈を負て東都に遊び、龜田鵬齋の門に入り、苦學十五年、始めて鄉に歸る、遠邇爭ひ請ずて講を聽く、鍾山亦喜で之に應ず、三島浦原諸郡の間を遍歷すること三十年、富家の子弟其門生に非ざるものなし、嘗て自から詩を賦して云く、贅翁何敢譁華巔。到處挽留得衆憐。野調吟哦都漫興。狂毫塗抹亦然徒。館中有酒尋常醉。容裏無愁取次眠。四海一家皆子弟。張衡何用賦歸田。此老の一生盡すに足れり、嘉永癸丑正月沒す、年六十七、爲人放達、世事を諦せず、只古劒古書畫を愛し、平生賞鑑する攸のもの、之を一大筐に藏し、行旅中と雖ども隨身せざるなし、人聽講を請へば先づ束修を行はしむ、否らざれば權門貴戚といへど敢て應ぜず、曰く老夫貪に非ず、束修を行なはざるものは、眞に學を好むものに非ず、授講亦益なきのみと、又佛典を喜み、厠に上る毎に必らず之を携ふ、曰く佛典必讀の書にあらず、唯厠上閑あり以て讀べきのみと、終身娶らず、子なし、蝸菜遺詩を綴拾し釐めて菜庵詩稿四卷と爲す、客中春晩に云く、淹滯關東地。送春仍客亭。殘花多委水。細雨乍開萍。故國何時到。新鵑昨夜聽。唯因詩遣興。未必嘆飄零。贈菜江生に云く、堂前債鬼篤如雲。叱々揮麈忽解紛。對局呼盧袁彥道。唱盃蕭座灌將軍。憑陵輩賈猝推髻。汚辱孤孀魏練裙。脾睨塵寰天地窄。英雄誰得不推君。秋夜に云く河漢橫秋夜欲寒。病餘爭禁客衣單。悲風漸瀝吹書幌。淡月濛朧映竹欄。草宿啼霜蟲思功。樹棲警露鶴眠難。床頭賴有忘憂物。一醉蕭然得暫寛。新春寄懷吉長生に云く、僻鄉深雪少人過。獨臥蕭條感慨多。鵲旅復逢新歲月。鼠途頻憶舊庭柯。傳箋誰和愁中句。擊缶空憐醉後歌。五十始知文作祟。筆耕舌耰竟如何。秋夜客舍に云く、滿月秋容雨後深。荒煙黯澹月光沈。二毛新換潘郎鬢。一葉先驚宗玉心。籬落風凄蟲砧響。庭幾露冷草蟲吟。鄉關

香々音書絶。臥廬殘更擁布衾。雲蒲送人に云く、銀河欲墜斗闌干。酒盡驛亭嘶馬瘦。雲蒲秋風吹別袂。關山曉月照征鞍。三聲笛是愁中聽。萬里家應夢裏看。苦囑音書時寄與。江湖草使鴛盟寒。春日に云く、輕煙低亞小欄干。客裏良辰自少歡。草色池塘春雨淺。梨花院落曉風寒。初調鶯舌腔猶澁。才嚲蝶衣粉未乾。唯有閒情拋不得。興來坐起捲簾看。惜春に云く、早起東軒獨坐晨。老來一倍惜芳春。海棠夜雨濕猩血。楊柳曉風搖麴塵。泛水白鷗看漸熟。囀枝黃鳥聽初新。詩懷酒戸雖年減。行樂爭先不讓人。山居に曰く、山居已遂宿因緣。不整衣冠體自便。護筍恰如兒望長。培松亦擬老登仙。鯉池時驗養魚訣。藥圃全仍種樹篇。輸與隣家老農父。無經無譜得心傳。晩春有感に曰く、園梅子已輕盈。飛絮流萍夢暗驚。白髮不同春草盡。一番蹴去一番生。首夏睡起に曰く、清和嫩日放初晴。猩血榴花照眼明。銀鼎手添新汲水。間聽了鶯碧碎聲。歲暮感寄章江生に曰く、甕頭臘酒已偷春。浮蟻溶々檄面新。雪液街頭私失笑。難來索債叩門人。長至日同人夜集に曰く、長至纖交薄雪飛。可無蠡飲辟寒衣。書生豪舉眞堪笑。前面開樽後典衣。の如き異香心を薰ず、奇巧目を悅ばし む、深く温李の神髓を得るもの、彼の抱韓推杜爭て古怪を爲すものと、迥かに其選を異にす、誰か學人の詩人をして嘔せんと欲せしむと謂や、余聞く鍾山原に高山彥九の爲人を欽ひ、尊王を以て志を爲し、忠孝節義を談ずるに至ては、往々涙下ることありしと、蓋し中に芬芳悱惻の懷あり、其詩に發するもの自から音情に富めるや宜なり、

鈴木文臺亦近代の一老儒なり、余嘗て其名を聞くこと久し。頃日其長善館文集を讀み、亦其詩に深きを知れり、文臺名は弘字は子毅、西蒲原郡粟生津村の人、少時江戸に遊び、龜田鵬齋に謁す、鵬齋時に詩經の鷄鳴篇を講ず、文臺大に悟る所あり、退て人に謂て曰く、學を爲す亦易し、我能く獨力之を成さんと、閉居一室、兀々四年、其業大に進む、偶疾を獲て鄉に還り、帷を下して教授し、德行を以て聞ゆ世目するに鄉里の馬少游を以てす、生平甚はだ著述を喜み、嘗て太平御覽を以て買子を校せんと欲す、僻鄉藏書に乏し、甲州身延山久遠寺其書を藏すと聞き、乃ち往て寺主に請ひ、之を縱觀するを得たり、而して遂に賈子新書の著あり其篤志此の如し、晩年東林藏書の故事に倣ひ、手から十三經註疏を訂して、彌陀の神庫に納む、詩を賦して云く、遺經百卷輪神庫。率擬當年復壁藏。其他著述纂註戰國策、牛解古槧餘錄、錢貨私議等、皆世に傳る

に足る、其詩閑澹眞率、理を求めずして自から巧みなり、而して間情別種、亦清麗于綿の致を極む、暗相思の一篇、之を讀めば殆んど我情を移す、只其韵法太寛、古風多くは合格のものを得がたし、僅に南泉精舍興笠飯を錄す、云く、薫風入竹根。日々長兒孫。堂前與堂後。迸出滿廣園。豹文蘚曉霧、龍勢軒朝暾。作砲白老語。謂禾韓兒言。古人不欺我。誦此動神魂。掘地欲及泉。鬪來體自全。先投沸湯熹。添薪旋烹煎。錦袍初脫下。肌膚玉樣鮮。揮刀縱横切。片々軟如綿。香和苦石氣。不帶鷄豚膻。再烹以醇醬。次加豆醬宜。猶嫌精神少。和蓋味愈奇。飯甲待飯熟。滑攪視其期。幽韵鼻孔入。妙味舌本滋。忽動鄭人指。屢朶周公頤。蘇子不道瘦。陶公可實肌。熊掌世難獲。鳳髓事可疑。八珍我無分。厭食得何時。賴有笋飯美。飽喫堪療飢。須與雅客賞。勿許俗士知。近體には川中島懷古に云、山峙江流曠野空。曾憶當日鬪英雄。唱枚鐵騎。霜深霧。斫陣牙旗。動大風。幾處壘營秋草碧。千年興敗夕陽紅。依然形勝今猶昔。付與行人感慨中。日嘉上人見訪に云く、相逢共是髮邊霜。往事追論欲濕裳。也似當年白賀客。十八朋友九八亡。初夏道中に云く、綠樹蔭流村徑迷。小杉離落接桑畦。酒旗高揭橋西舍。影落橋東日漸西。山行に云、午晴輕暖適春衫。逐勝吟行興益添。樹山櫻照林際。只疑殘雪點松杉。の如き皆妙、又憶舊れ云、漏長人定欲三更。步到檐東月漸明。華燭漏光簾影靜。梧桐陰外有琴聲。情致隱約、西甫記を讀むが如し。其他人或は道學先生の語に類せざるを疑ふ、然れども陶公の賢、亦閑情を賦す、未だ其德を累するを聞す、何ぞ獨り文臺の綺語を尤めんや、明治三年沒す、年七十餘、

木村容齋名は温字は士良、高田藩の文學なり、先世本農、中頸城郡小野村に住す、父愚山に至り始めて儒を以て禍を本藩に解く、容齋幼にして家學を受け、長下て佐藤一齋吾賀侗庵安積艮齋諸老の門に遊び、又た昌平黌に學ぶ、經を治むる洛閩を宗とし古文辭に長ず、鬱然家を成す、萬延元年格知塾を高田城下に開く、從遊するもの五百人、明治二年藩修道館を設け、容齋を擧げて之を督せしむ、廢藩の後、修道館亦廢せられて、高田學校興る、容齋仍儒學教授と爲り、生徒を養育する前後三十年、十八年六月文部省書籍硯匣を賜て之を賞す、二十一年二月病で沒す、著觀旭軒文集三卷あり、世に行はる、詩は其長にあらず、作る所甚はだ多からず、亦已に散失す、僅に題畫一首を得たり云く、春山平遠。煙水微茫。人家隱見。花柳掩墻。一簑銀鱗。一樽杜康。扁舟載月。歸吾醉鄉。四言の詩、蒼奥

簡古を要す、此れ獨り清澹婉委の辭を爲す、然れども古人已に青春鵑鵑。楊柳樓臺。月明華屋。畫橋碧陰。等の句あり、亦何ぞ嘗て華麗ならざらんや、詩境甚だ廣し、必らずしも一格に限らざるなり、

戊辰の役、草莽より起て、王師を導き、北越を鎭定せしものの二は笠松賀之吉と爲し、一は長谷川鐵之進と爲す、鐵之進名は世傑字は公興、强庵と號す、西蒲原郡粟生津村の人、文久癸亥七郷に從て亡命長藩に投ず、三田尻の役、自から忠憤隊を編して之を領し、甲子の役、長軍に屬して京師に戰ふ、戊辰の亂起るに至り、官軍の鄕導と爲り、屢賊を破り、功を以て徵士に擢でられ、明治辛未七月病で京師に沒す、年五十、賀之吉幼名謙吾、蜂嶺と號す、中頸城郡小猿屋村の人、少して勤王の志あり、岡鹿門松本古堂村山半牧蒲生重修等と交結し、强庵に於ても忘年の友たり、戊辰の役、西國寺公に屬して鄕導と爲り、事平らぐに及び京師に上り、公の爲に學舍を管す、强庵に後るゝ一年病で沒す、年三十五、余久しく强庵の詩を索む、而して已に散逸得べからず、蜂嶺は則ち鷄助集一卷あり、頃日丸山松堂に因て之を得る、古體韓杜を學び、詩多くは屈屈近體却て淸脆喜ぶべきものあり、曉起讀書に云く、一雨迎涼氣。殘燈覺可親。晨光搖竹簟。遠鼓響城闉。鴉起已離樹。蚊飢猶嚙人。群生機始動。快絕讀書身。浴後散策に云く微風偶與葛衣宜。水道橋邊晚步遲。煙密人聲認漁艇。樹疎燈影漏神祠。蹴從浴後輕加快。節入秋前暑未辭。乍憶西郊風露遍。早涼聲動賣蟲兒。踰關山嶺に云く、突兀危峯劃半天。千盤鳥道與雲連。平時無復要天險。不成此關三百年。鬱關五丁通嶮巇。村人擧事亦堪奇。孤笻雙屐嶺頭路。來讀先師修道碑。自註に云く、關本謙信所置、嶺上有佐藤一齋翁碑、蜂嶺嘗て昌平黌に遊び、一齋に親炙せりといふ、往年大須賀筠軒北遊、一日其寓を訪ふ、筠軒方に妙香山眞景を寫す、曰く越溪遺稿の首に辨するなりと、四て增村越溪なるもの詩人なるを知れり、後今世名家詩選に越溪の詩を載するを見る、而して零碎錦片未だ人意に慊らず、近頃丸山松堂に晤す、松堂本越溪を識る、越溪遺稿一卷を贈らる、筠軒の壽、中洲鹿門黃石諸老の題跋と俱に卷中に揭げ、人目を淸くするに足る、而して南摩羽峯の序、詳に其人を傳ふ云く、越溪中頸城郡針村人、余嘗訪之、信宿其家、親覩家法嚴肅、奴婢凡十餘人、鷄鳴即起、點燈朝餐、各就其業、夜則早寢、以爲常、終年如一日、有人借金、則賤息貸之、不敢督促、人感其恩、及期必返之、或勸之劄事博利則辭焉、常曰、人不可不學、々在實踐、聖言一字、有終身

不能行盡者、是以一言一行不敢苟、余其論學書爲己齋記等の篇を讀むに、諄々千百言、躬行實踐を以て、學の第一義と爲す、果して羽鑒の言、過稱に非ざるを知れり、詩話を以て旨と爲す、其宗とする所は樂天放翁の間に在り、鹿門評して韋柳に出づと曰ふものは、恐くは否らず、初夏偶成に云く、匆々春事了。愛此北窓涼。密樹蟬聲近。晴簾燕影長。綬垂藤欲紫。雲簇麥初黃。時有隣僧至。棋枰對夕陽。初夏幽居に云く、此身無復利名縈。村落春過一段清。園樹陰濃啼鳥穩。堤塲影動戲魚驚。窓緣栽竹鑒霜失。田爲插秧溝澮盈。不管鄉隣農務劇。閑吟閑醉了吾生。秋夜獨坐に云く、萬喧沈寂月初生。靜坐宵深睡不成。樹盡窓間鴉印影。風寒雲外鴈馳聲。酒唯排悶非耽樂。詩本陶情豈慕名。俯仰茫々古今事。夜堂寒殺讀書聲。初夏偶作に云く、梧影槐陰掩砌苔。園庭雨後不浮埃。龍孫進處籜將解。燕子飛湯花正開。一局棊聲留客去。半簾茶鼎喜僧來。菊苗昨傍籬根種。向晚丁寧手自培。蟬始鳴に云はく、灌影蚜柯雨後天。薰絃逸韵人新蟬。山窓一日無來好。不是喧嘩不寂然。遊山寺に云はく、一杖穿雲向上方。磬聲何處古僧房。西風落葉無人掃。埋沒林間石地藏。西郊晚望に云く、一路村翁此々歸。駄禾牛背帶斜暉。黃雲收盡西郊曠。處々作團飢雀飛。秋夜に云く、酒未全醒詩未成。枕頭蟲語夜三更。隣窓人影燈光澹。風送連枷打稻聲。秋夜散步に云く、露冷風涼夜色清。膝間蹈月獨吟行。屐聲到處蟲聲歇。一北纔過還有聲。春曉に云く、春眠半覺乱雲髮。欄角紅嗽上柳梢。倚女釣簾未全了。一雙輕燕入新巢。末首風趣極まる、余太はだ此種の詩を愛す、而して多く見るを得ざるなり、越溪名は度弘字は子律、明治辛未の夏を以て沒す、年僅に二十六、清才短折、惜夫、

詩の忠孝節義に關する、の皆傳ふべし、必らずしも其詩の巧を待ざるなり、越溪遺稿中復讐行一篇あり、其事甚奇、其詩自から千古に足る、乃ち錄して以て美談を有す、引に曰く、丁卯十二月六日夜、有人殺中島村七十郎於熊川堤上、其子恆四郎與叔父善十郎、東索西搜、偵知吉增村彌三右衞門藤右衞門爲其首謀、今茲己巳正月八日、捕兩讐、殺之熊川堤上七十郎見殺之所、余偉其事、歌以係之曰、霜天凜烈寒風吼。捕得兩雛先縛手。熊川堤上列兩讐。兩人兩斬兩讐首。讐首鮮血滴淋漓。雙提歸家喜可知。再拜供之父兄墓。父兄泉下應展眉。祭畢連繰夜行促。自首直訴川浦局。林公不在無解人。兩人枉受囹圄辱。囹圄可忍死亦輕。爭奈無人知丹誠。韓公嘗有復讐議。所賴林公哲且明。歸來果感兩人志。乃召兩人先垂淚。命曰汝輩急歸家。孝義賞書手自賜。鴉呼林公之斷何至公。孝子義弟名亦隆。此事至竟關世道。振起當今怠惰風。

余が親家詩を善するもの二人、一は堂兄野村鶯溪と爲す、二人詩を嗜む性に天性に出づ、而して同下く時疫を以て早世す、今詩話を編す、二人の詩亦遺すべからず、鶯溪名は安之字は侶信、北浦原郡吉浦村の人、家素農族、而して累世文を好み、學素訓あり、初め耻堂先生に學び、後東京に遊び、棣華先生の門に入る、時方に年少氣鋭、慨然天下に雄飛するの志あり、先生亦其才を稱し、期する能成を以てす、而して父母已に老ひ、久しく遠遊する能はず、遂に鄉に歸る已列八月時疫大に行はる、鶯溪亦病む一夕にして沒す、年二十八、鶯溪軀幹短小にして眼光人を射る、資性倜儻不羈にして幹才あり、詩酒を嗜み、交遊を愛し、金を擲つ土の如し、遊蕩中常に花柳に耽り、一錢儲へず、債鬼前に滿つるも、傲然顧みず、人目して狂と爲す、鶯溪詩を賦して云く、衣雖云弊矣。掩體已可喜。粹勵在一思。前途豈無期。淮陰出胯下。英名振華夏。榮辱男兒常。貧賤何足傷。謫看古達者。汪々出草野。吾亦五尺身。古人果何人。出語淺率の嫌ありと雖とも、一片傲岸の氣象、磨滅すべからず、其生產を理する、錙銖の利を爭ふを欲せず、時に任ト機に授ト、數々大利を獲る、而して又此に因て敗る、業に利を失ふや、家資蕩然、一貧洗が如し、猶ほ能く酒を飲み詩を賦し、交遊故の如し、曰く時機一たび到れば萬金立ち處に致すべしと、惜らくは天年を假ず、未だ大に其才を試むる能はず、數奇落拓、窮愁以て死す、詩稿を留めず、今多く散失す、余已に其不遇を悲み、又其心血の磨滅に歸するを憐み、歷年搜索、僅に數首を存す、新潟客舍次長谷川某韵に云く、爲捧爲梗兩飄然。流落江湖跡可憐。生面相逢千里外。幽襟細話一燈前。鷗波夢冷早秋雨。浦笛涼生殘夜煙。衣薄酒醒愁不寢。港樓連絕五更天。秋感次吳穀韵に云く、流光回首指空彈。漸怕秋風上鬢端。萍跡十年春夢斷。蝸廬今日夕陽寒。遊罷湖海豪猶在。病藉酒酣憂較寬。欲約漁翁買舟去。鯉魚吹上蓼花灘。涉園雄與次山田蠖堂韵に云く、濃翠滴紅春作園。荒庭苔古屐痕稀。山卿斜照低三尺。江柳殘霞剩半扉。幽磬出門聲忽斷。歸鴉繞樹影同飛。隣僧有約來何晚。小立花前露濕衣。低簾貼地午陰輕。狼藉殘經几上橫。十載種花差悟訣。幾回留客不知名。竹窗煙綠澹茶氣。藥圃土鬆溫雨聲。睡起巡檐先有喜。紺芽紅甲共春榮。夜歸過長禪寺に云く、殺犀半照佛前燈。一炷殘香影欲凝。叢竹忽鳴秋夜雨。長廊瘦殺坐禪僧。夜色蒼々塔影重。誰家古塚哭寒蟲。飄蕩忽覺

飛燐影。一點流螢出草叢。二絕語太幽冷、鬼氣人を襲ふ、殆んど人間の光影に非ず、余早く其不祥を知る、詩讖の靈、亦た必らずしも信ならずんばあらず、此外梅花三十五詠の作あり、余と同ト く岡本花亭の韵を和するもの、沒後余一絕を題して云く、一枝短燭照黃昏。夢猶餘遺墨痕。誦到梅花唐和句。風凄月婉又消魂。稿猶余が家に藏す、墨痕新なるが如く、其人已に亡ぶ一展讀毎に、今昔の感に勝へず、

野崎玉峯名は元字は士亨、本姓玉井氏、中蒲原郡早通村の人、少年美貌、生本善く病む、閑靜修潔、一室に閉居し、香を焚き地を掃ひ、吟哦自から娛む、余娘子秀才を以て之を目す、常に內子と友愛尤も敦く、新淵を過る毎に、必らず余が家を訪て、內子の安を候ひ、時々詩を出して余が評隲を索む、余其清才を愛し、屢揄揚して之を奬む、玉峯亦私かに喜び、益力を詩に肆す、壬午秋、時疫大に行なはる、玉峯來らざる月餘、內子憂ふること甚だし、人をして之れを問はしむれば、則ち其の前夕を以て沒せり、內子哀悼食せざる數月、余も亦清才の短折するを惜み、爲めに遺詩を校理し、春瀋先生に請ふて新文詩別集中に刊入す、書院に云く、書院如僧院。心間境自寬。疎花經雨瘦。修竹帶秋寒。客去棋聲歇。簾垂茶影殘。夕陽紅未盡。留映小欄干。春夜に云く、小樓如夢酒微醒。數盡沈々玉漏聲。當戶柳煙燈暈澹。籠簾花霧月朧明。教鶯何處夜將午。添臂有人寒較輕。獨我倚欄眠不得。一時懊惱奈多情。書齋即事に云く、明窓淨凡一塵空。都在香煙繚繞中。竹焉人衣多半綠。梅傳春信二分紅。愛臨古帖不求似。每讀奇書偏易終。坐到黃昏更清絕。片雲扶月上簾櫳。獨坐に云く獨坐蕭齋形影親。百年不了苦吟身。小梅影澹燈生暈。殘雪光搖月逼人。詩可遣愁何爾瘦。錢雖買笑不能眞。憑誰慰藉無聊意。起向前檐試一巡。秋夜客去偶然有作に云く。薄衫如水怯新涼。獨數更籌倚短床。風掠葉聲穿破壁。月移簾影轉迴廊。病懷蕭索知秋早。別夢低徊覺夜長。客散虛堂凄不寐。爐煙燒盡一絲香。夜坐有懷に云く、飄零書劍歲將殘。舊恨新愁集百端。破壁梅橫殘影小。空檐人定雨聲寒。交遊落々從星散。洪劫茫々作夢看。好藉酒杯排悶去。十年身事太難難。新秋夜坐に云く、深院闌干雪漏長。燈痕如水浸吟床。桐陰墜露松梢月。薄病人先怯早涼。同誰溫鼎注心香。寸燭挑殘淚一行。人影不來簾不捲。寒花和月轉虛廊。寓樓即事に云く、青山綠樹染爐煙。鎭日樓居似小年。無事讀書仍飲酒。何須修得到神仙。小樓日永夢初醒。過雨無痕涼滿庭。苦氣上簾々欲濕。暮山如影夕陽青。綠陰清晝に云く、新陰綠滴野人家。睡起捲簾殘日斜。一榻茶煙禪味淡。風情宛似雨餘花。夜坐有念に云く、今生眞欲現何身。彌勒龕空無物親。忽地傳來夜梅氣。一燈寒影一詩人。村夜に云く、空階月黑石泉清。自炷爐香坐二更。殘燭影搖紅不定。風簾微颯落花聲。寒夜に云く、靜坐燒殘瓦鼎煙。疎簾篩月夜淒然。冷香花氣暖香酒。分與一杯供水仙。夏日即事に云く、午天高枕臥虛廊。清簟疎簾日正長。修竹風搖涼不定。一牀殘夢落瀟湘。夜過浦濱に云く、扁舟夜海氣猶豪。吹破鐵鎖平夜濤。天半星辰搖欲落。片帆出沒月光高。村杉雜詠に云く、一牀琴硯共橫陳。浴後焚香且掃塵。多病本來天所賜。便宜教我作閑人。苦吟に云く、兀坐蕭齋費苦吟。寒窓破壁一燈深。眼前詩料難收得。都被前人獲我心。清新婉麗、楚々人に可なり、但其詩今體多く古體少し、人或は之を難す、余言ふ袁子才湄君詩集に序して曰く、近體近風、宜小年、古體近雅頌、宜晚年、卿正に春秋に富む、何ぞ專ら近體を攻むるを妨けんと、玉峯亦笑て首肯す、森槐南其集に題して云く、杜句驚人死不休。寧知地下竟埋愁。李郎古體君今體。獨檀天邊白玉樓」識字從來是禍胎。白頭詞客盡生哀。教君早免窮愁厄。始信天公不妬才。余も亦五絕句を題す、其二に云く、妙齡聰慧愛參禪。也合還生兜率天。纔與曇花爭一現。思量倍使後人憐」苦論修短亦堪憐。人壽本來無百年。洪劫蟲沙同一夢。留將詩卷證人天。

余幼時書を鶯溪の家に讀、一日外より入て其室を窺ふ、一客あり長身椎髻、鶯溪と對飲す、談笑喜のてとく極る、時々膝を拍て高吟す、意氣昂然傍はら人なきか若し、去後其姓名を問ふ、曰く高橋廉堂なり、廉堂名は恭字は思道、北蒲原郡長戶呂村の人、鶯溪の同學友なり、詩思敏捷、筆を執れば千言立どころに成る、三步八叉の才に減ぜず、而して其人骯髒傲兀、世に容れられず、日に野店村巷の中に醉倒し、佗傺悲吟、躯を以て死す、年未だ三十ならず、對酒に云く、治世難成馬上功。酒量唯向高人雄。壯士不知何處死。先將魂魄蹇盃中。牢騷不平、一世を可とせざるの概あり、田崎翠溪亦鶯溪同窓の友たり、鶯溪才高氣豪、一世を睥睨す、翠溪は則ち溫恭和易、謙々人に下る、性格全く相反して而して相得る甚はだ深し、初め同ト く聖堂先生に學び、後同ト く東遊して楳華先生の門に入り、又同ト く鄉に歸り、歡會虛月なし、生善く病み、羸瘦衣に勝さるが如く、而して時々吟咏、其詩和易其人の如し、鶯溪常て云く、交遊中奇才は廉堂を推し、清才は翠溪を推すと、惜むらくは病の爲に累せられ、未だ其才を盡すを得ず、鶯溪に後るゝ數年、竟に沒す、嘗て余鶯溪と同堂なるを以て、特に親愛して忘年

江村
一帯江村十里塘竹枝轉
黄空中長煙倦晚日迷
人家門巷多宇沙時多珍
木未古山形左右分各
井竈有花花花接花
漁舟載雪篙風力
別情

偶會友之葬之夏

交と爲し、時々詩を以て相示し、余をして商酌せしめ、坦懷相待ち、毫も挾む所なし、眞に長者なり、遺稿未だ得ず、姑らく余が見の及ぶ所のもの數首を擧ぐ、松山雜詠に云く、風光旁礴小仙源。翠壁丹崖隔世紛。級々層樓倚山起。絃歌聲湧半天雲。山樓浴後好衝杯。正是涼天暮雨催。一簇濃雲黑於墨。蒸風驟地捲龍來。一日々看山更點經。倦來沽醉浴餘醒。煙霞痼疾終難治。一笑溫泉亦是靈。山野肴蔌傾衝杯。彈鋏有時歸思催。遺贈荷他東道意。鮭魚昨自筑摩來。閑適に云く、茂樹濃陰日已斜。青山一角野人家。間來自汲前溪水。半灌盆花半煑茶。初夏に云く、不暖不寒吟思宜。清和四月日遲々。蹄龍賁動午風影。臥見棣棠花一蘂。の如き皆誦すべし。翠溪名は恆久、字は士道、北浦原郡大室村の人、少年粗豪氣節を尚び、酒を使ひ座を駕り、意氣人を傾むく、詩を作る、喜んで筆を縱ままにして才氣を馳騁し、往々法度外に逸出す、人或は之を咎むるも以て意と爲さず、眞に快人なり、余初め耻堂先生の絆已塾に織るや、自笑余より長ずること七歲、之に就て學ぶ、何ぞ早く自笑東京に入り、尋で九州に遊ぶ、余も亦東漂西泊相見ざる七八年、辛巳秋忽ち西遊詩一卷を寄せ來る、之を讀めば能く縱筆を收めて法に即き、才氣を歛めて意を鍊り、風骨漸く清蒼に趨むき、詩格亦に變ず、既にして新潟に過ぎ、余を寄居村舍に訪はる、余故と其酒人なるを知り、酒を呼で共に酌む、自笑復多く飲まず、意態閒雅、顧眄自適、絕て從前粗豪の氣なし、余又其人の一變するに驚き、以て其世故を閱歷するの深きを知る、甲申三月、耻堂先生遠山に歸る、送別の日、自笑亦翠溪城南諸子と俱に來り、稠人中に邂逅す、遂に同ゝく新發田城下の旗亭に投ず、燭を剪て酒を話し、相共に悽愴、余先づ唱て云く、邂逅相逢話舊遊。尊前相見淚先流。十年燈火更人事。萬古滄桑動客愁。夜月荒涼新墓碣。春花悲壯古城樓。閑來身世感存沒。一片酒懷悽似秋。自笑和して云く、偶爾相逢感浪遊。十年雲散舊風流。數來交友知無幾。話到師門各自愁。閃澹風燈寒照夢。凄涼煙月宛當樓。尊前俯仰空今古。醉不成歡氣作秋。爾後未だ數年ならず、翠溪先づ沒し自笑亦肺患を以て亡す、當時四人の者、已に其半を失なふ城南と相會する每に、往事を追懷し、覺へず涙下す、遂に城南に屬して遺詩を收め、且つ數首錄して此に附す、人吉客舍に云く、漫遊幾歲歎淹留。偶遇良宵恨更悠。風露人衣人易病。霜蟲依草草生秋。故園夢遠三千里。落月光寒十八樓。且恐高堂添白髮。一般夜色各天愁。感懷に云く、當年浪跡歎漂流。此日還鄕亦自愁。

文字豈稱衣食謀。寒窗空負子孫憂。先塋草長一杯土。岳宅塵生萬卷樓。久矣家風尚清白。滿囊何用問貽謀。癸未中秋に云く、湘簾月黑感微波。倚遍蘭干喚奈何。天到中秋晴夜少。人從半老暗愁多。低徊往事仍今事。感慨長歌又短歌。且買芳尊作佳節。從教雙鬢漸皤々。自笹岡歸水原途中即日に云く、孤杖荒涼入曠原。此途來往曉仍昏。疎鐘聲遠山陰寺。缺月光寒水上村。自是秋光多慘目。雖非羈客亦消魂。半生役々爲何事。爛愧黃庵夜護門。熊本客舍に云く、萍跡多年事漫遊。孤燈一夜不堪愁。故江此去三千里。腸斷寧羹鱸膾秋。遊出湯村歸路過雨に云く、淺流曲々接田園。山雨忽來溪上村。欲借輕蓑何處是。木犀花白野人門。涼夜に云く、雨過松窓月浸光。紗厨夢醒夜初長。蟲聲近枕就如水。頓略吟床一味涼。寒夜に曰く、茶冷香殘榷小爐。雪聲闌夜聽如無。寒窓燈火稜々影。人與梅花一樣癯。皆誦すべし、水原外城湖秋尊を以て名あり、熊本客舍の作、季鷹の故事を拈出す、乃ち一往情深覺ふ、

三浦鳩村新潟竹枝、一時艶稱し、好事者爭て之を唱ふ、余も亦已に採て話中に入る、然れども鳩村詩名久しく藝苑に重せらる、其傳ふべきもの、何ぞ特り此詹々綺語に在んや、余の鳩村に於る才かに一面に過ぎず、而して謬て盛意を荷ひ、心中私かに知己の感を藏す る久し、頃者令子桐陰、遺稿一卷を寄示し、刪定を以て囑せらる、余敢て當らずと雖ども、生前已に季子の諾わり、幽冥の間此良友に負くべからず、遂に會心の作若干篇を取て、再び話中に登す、三月十五日走筆簡頼支峯に云く、東風貽靄翳和暄。宛轉黃鸝囀柳枝。間人早起撿花曆。日々探信勞家兒。忽報外城開萬櫻。花間處々起酒亭。美人一笑迎客醉。酒香花氣爭芳馨。遊情勃々馬脫輿。酒觴日似春陽恣。一年歡樂三月中。豈及此時不盡醉。尋常歡飲非無伴。其如俗客與心叛。憶哉倜儻吾黨人。非君誰復同遊衍。人間毀譽何足憂。此日好晴可共遊。謂君來矣忽遲々。明朝花落空水流。佐々大塊見訪に云く、眼見韶光漸々新。乾坤一革入青春。今風池上氷初渙。昨雨江邊草又屯。半榥芳醇開小斟。滿簾曖日對同人。醉來談易君須聽。欲把括囊終此身。

秋夜に云く、空階葉墜響淒其。旋覺秋涼花病肌。目笑療痴無藥石。所憂慰老乏孫兒。浮沈泛蓬他年夢。酒醒燈殘此夜思。抹下蟲聲瘡下雨。故敎雙鬢更添絲。春遊に云く、裙屐紛々閶路塵。水光山色入芳辰。詩交最好重時友。置酒須邀霽日隣。畫坊絃聲添柳韻。珠樓燈影助花神。老懷不惜遊歡劇。典盡青衫賞盡春。過押切村に云はく、隴蔓埋人徑僅通。野村春過急農功。耕犂奔馬紛如織。醉屐遊歸一空。蘿角有花皆撲紫。頭山無

樹不鵑紅。停車小憩新陰下。聽盡天鷄語晩風。郊行に云く、遊情緩々柳絲斜。日々尋春到水涯。不道風流增罪過。已將身跡付煙霞。聞如有意呼晴雉。踏似無情滿路花。欲借江樓謀一醉。何人早倚碧窓紗。冬日雜詠に云く、

頤疊皺痕鬢着絲。殘年屈指幾多時。老無長技同撐木。閑可消愁只酒巵。此口何須五鼎食。有詩奔是千羊皮。

冬晴最喜寒威薄。臥雪庭梅放一枝。春朝に云く、夢覺幽窓臥待明。隔房何物送嬌聲。嬰孫學語如簧舌。鵑做春朝出谷鶯。靜觀亭夜坐に云く。水欄夜氣可人肌。蘋末清風月上時。坐久忽聽聲瀲剌。金波影裏躍魚兒。其他佳句林密疑無路。溪彎忽有村。窓虛山影入。風動竹陰移。避日移蘭盞。迎風捲蕙簾。樂酒全年壽。吟詩養性靈。才哀詩倍淡。身老禮逾粗。風波人海險。詩商硯田夷。久聽才名傳薔社。所欣詩律得同聲。閑花落地蜂唇渴。弱柳搖風鶯脚危。家傳清白無慙我。業擅畦蔬可活人。春池魚躍氷心碎。煙塢鶯啼柳眼醒。日氣暄黃上柳。雨痕初散綠生苔。梅花高塢連低塢。楊柳前村接後村。枚非飾老扶來穩。衣爲裁新着得溫。只言首鳶能延壽。誰識徵聲最撼生。書有古今供讀。人無老少墓風流。滿腔忼慨詩中見。一座風流酒裏知。の如き寫景言情、眼前を離れず、乃ち爾く溫潤瑩秀喜ぶべし、余又其論詩二句を記す云く、孰其誇誕之風趣。何似常言多猶。鳩村の詩當に如是觀を作すべし、其郷外城墨舊と櫻樹多し、花時士女群遊、一方の勝地たり、明治初年、士人之を伐て、蕩然遺なし、鳩村惜むこと甚し、遂に同人と謀り、重て數百樹を種へ、乃ち詩を賦して云く、愛花何恨爲花貧。負郭有池山作隣。栽得櫻花千百樹。爲分春色與遊人。杏林遺蹟擅醫名。先哲風流意味清。老子別爲偕樂地。曾將施藥換栽櫻。栽花一唱衆人和。樹々移來列水陀。只爲諸君情意好。今年芳比玄年多。看自初開到已殘。長堤不厭日游觀。老夫雖料明年壽。猶是移花客共歡。留連携酒役詩魂。柳謂櫻霞郭外村。他日我如埋醉骨。青山不向々花園。竟に囑して花下に葬むらしむ、亦好事人なる哉、

古人云く、凡習醫必明于儒理、而後可明于醫理、故に名醫多く儒者の門に出づ、樋口梧堂名は館宇は仲要、通稱は順節、村松の人、經を加藤北溟に受け、醫を丹波賴易に學び、遂に能く家を成す、余幼時多病、屢危篤に瀕す、每に梧堂を延て脈を視せしむ、數劑にして即ち瘥ゆ、余の今日ある、實に梧堂仁徇の惠に由るもの多し、爲人温良、君子の風あり、儉を勤め窮を恤み、鄉閭其德に振す、村松侯嘗て召見して帛を衣ることを詔す、蓋し藩令奢を禁ず、此れ特に異例なりといふ、明治庚午沒す、年六十、令子桃里亦知名の士、嘗て縣會に舉られ、諸長と爲る、余と事を共し、氣味水乳の合あり、頃日其先人の遺詩を求む、桃里爲に數首を誦示す、余尤も其竭彌彥廟を愛す云く、一重林影大如山。古廟凉生積翠間。殘石階虛八四散。神靈無語夕陽間。夏晩驟雨に云く、捲地濤來萬樹風。炎塵一洗小樓中。須臾霽驟收殘雨。月破層雲射屋東。秋曉に云く、河漢低窓曉月斜。無端亂噪滿林鴉。隣墻人影誰先起。立見牽牛一架花。共に誦すべし、

本間稼宇は有年玄琢と稱す、村上の人、醫を業とす、三宅瓶齋繪敝壽集中、送本間有年遊學京師序あり、其儒に志あるを稱す、友人藤井蕩齋其遺稿二卷を示さる、詩亦清眞愛すべし、所謂技也進乎道者か、遊荒子澗に云く、怪巖多爪立。奇樹或橫生。瀑瀉琴聲小。潭澄鏡面平。隔橋棋牧語。掠水鷁鴟鳴。石怪冷衣袂。何來雲影輕。夜坐偶成に云く、漠々紛塵市井傍。業澗枯坐倚吟床。中天露逐松梢月。半夜寒生瓦上霜。惰性祇應假憐蹇。粗才何必問行藏。憂然自比墻東隱。不羨雲山薜荔裳。菜川山中作に云く、山樹含嵐翠作堆。巖泉經雨響如雷。自疑毛骨森如許。雲鰓與窓片々來。早春子正惠柑子賦謝に云く、滿筐金菓荷高情。潤得枯腸爾許清。賴有山厨春釀熟。併携好去憑新鶯。

長谷川杏庵名は誠字は誠之、別號は柳外新發田の人、父松軒藩て醫を以て禍を本藩に釋く、杏庵少して江戸に遊び、多紀安叔に學び、尋で京師に入り、福井丹州水原三折の門に歷遊し、歸て父職を襲で侍醫と爲り、醫學教授を兼ぬ、廢藩の後、醫仁醫院を創設して、其院長と爲り、名を杏林に擅にする二十年、明治巳丑八月沒す、年七十六、爲人恬澹寡慾、獨り太はだ詩を嗜み、西遊の日法を梁翁星巖に問ひ、刀圭餘事、吟哦風月以て娛しむ、著述育全書十二卷あり、世に行なはる、其他素靈參議、傷寒雜病論講議、救兒驗方、醫事筆叢等家に藏す、友人長澤松雨其遺詩數篇を傳ふ、余獨り崇蘭館小集贈劉君鳳を愛す云く、聞說龍門寺。飛瀑秀且異。一道分銀潢。萬古界積翠。又聞高年山。寶石絕瑩。風光潤欺瓊瑤。紫彩自温粹。君乃生此間。涵泳養清致。秀異與温粹。必有所會意。咳唾化珠璣。筆墨靈英萃。群雄走下風。詞壇樹赤幟。吾久欽盛名。越境難相侍。生喜高館中。清晤慰所恩。飛瀑天下奇。寶石亦無比。併君卷卓才。三絕鍾一地。四條納凉に云く、一夜凉棚燈不點。還從月下見山東。水樓即目に云く、四合蒼煙低親水。高帆宛似掛空中。亦妙、其兄幹齋(名は貫字は可貞)早く亡す、亦詩を善す、新春雜詠に云く、紅爐火暖籠茶氣。謁々春窓一片雲。佳句誦すべし、

肥田野梁村北越の遺儒なり、其子竹塢克く先業を繼ぎ、家聲を墜さず、原鶴堂長澤松雨等其門に出づ、二子屢其學問文章を稱す、頃日行狀を讀み、其人篤行亦傳ふべきを知れり、竹塢名は節字は士操、別號は抱甕居士、少時芳野金陵の門に入り、篤學の名あり、幕府旗下の士大久保某之を祿せんと欲し、壬生侯盛岡侯亦聘禮あり、竹塢親老ひ侍養闕るあるを以て、辭して而して鄉に歸る、維新の初め、官民政局を中條驛に置き、學を其側に設け、竹塢を延て師と爲す、局廢せらるゝに及で罷む、時に金陵博士を以て大學に在り、竹塢に東上稱觴せんことを勸む、亦辭するに定省を闕くを以てす、遂に鄉を出でず、衡泌徒に授け、或は鄉學に從事す、明治十年六月、新發田中學校教授に補せらる、官其善く後進を誘掖するを以て、屢褒賜あり、十九年五月、職を辭して家居す、何ぞ久しくもなく疾に罹り、翌歲七月遂に沒す、年五十三、余詩話を編す、或ひと曰く、竹塢亦少くべからずと、爲に詩數篇を示さる、余未だ慊然たらず、因て松雨に全稿を借らんことを求む、未だ寄せ來らず、姑らく三絕句を錄して以て後補を俟つ、春夜に云く、燈炮漏殘人定時。香風吹月上花枝。微吟立盡小樓角。隔水笛聲知是誰。新秋夜坐に云く、一雨冷然似酒醒。檐端鐵馬響丁東。今宵始聽驅蚊火。便覺吟懷別樣青。八幡公過勿來關圖に云く、白旗風暖映青山。馬首花飛落日間。到底何邊不皇土。春光已度勿來關。

松川痴堂名は健字は率履、南蒲原郡井栗村の人、三歲にして字を識り、五歲にして俳歌を賦し、長ずるに江戸に遊び、昌平黌に入り、經籍を單研し、頗る湛深と稱す、三日市侯聘して儒官と爲す、其容貌談吐の口調にして言ふ能はざるが如くなるも、一たび講筵に上れば、音吐清朗辨說流るゝが如し、聽くもの驚歎せざるはなし、性拘迂尤も禮節を重んず、嘗て人あり松蕈を遺る、穉丁をして之を齎らさしむ、痴堂冠帶して出でゝ見ゆ、禮貌甚はだ恭なり、穉丁呆然出る所を知らず、人多く之を笑ふ、然れども亦其敦朴の風を見るべし、嘉永戊申十二月豫ゝめ死期を知り、自から辭世の和歌を詠ず、親戚を會して訣を爲す、明年正月果して沒す、虛靈不昧のものに非ざるよりは孰か能く此に至らん、痴堂亦有道者なるか、詩文雜著三十卷、災に罹て烏有となる、僅に戊申新正を存す云く、辛盤依例祝佳辰。五十三齡老健身。瘦骨支風存氣骨。古梅經雪見精神。藤箋先試新年筆。栢葉聊娛晚境春。萬事在天非力取。不如隨遇保天眞。

坪井竹坡名は忠成字は子敬、良策と稱す、新潟の人、少時父命ずて醫を學ばしむ、竹坡方技を以て家を成すを屑とせず、博く群籍を極め兼て詩文を攻め、弱冠已に名を知らる、明治の初め柄本氏新潟縣令と爲る、竹坡當時策五條を陳す、就中學校を建て教化を布くを急とす、縣令之を可とし、學校を廳傍に設け、竹坡を擧て勸教と爲す、後職を辭して新聞を創刊し、官吏の專横を諷規し、人民の屈を奮起す、又女子常職なく流れて遊娼淫娃と爲り、以て風俗を乱るを憂ひ、建議して女紅場を起す、既にして司法省に出仕し、歷任監督判事に陞り、從七位に叙せらる、二十四年六月病で鶴岡の官舍に沒す、年四十七、友人某竹坡と齎あり、頃日其遺詩を持し來りて、囑して話中に入れしむ偶成に曰く、官廨事閑塵不侵。澹然倚枕撫幽琴。窓前古竹書來徑。門外老松風到吟。對食豈其求盛饌。卜居何必入深林。清香一炷爲佳夢。自是悠々太古心。秋日過山村に云く、傍水荒畦收蕎麥。對山茅舍晒胡麻。僻村幽絕秋成趣。責白爭開籬菊花。偶感に云く、英傑星羅廟廊中。輕刑減稅德聲隆。田間何事却蕭寂。說到氏民權耳似聾。中生時論事に觸れて即ち發す、必らず氏民權を嫌はず、特り疑ふらくは其志して出語淺率存し、而して中道仕途に入り、晩節終へざるの憾あり、然れども北越の新聞ある、竹坡を以て嚆矢と爲す、民權の說亦竹坡に出づといふも過論にあらず、其功何ぞ沒すべけんや

畠山甕出名は萊字は基卿、嘉三と稱す、龜田の人、少して青木蘭村に學び、經史に涉獵す、明治庚辰初て郡會を置かる、余と同ゝく議員に擧られ、始て相識る、爲人機敏才識あり、頗る同輩の爲に推さる、幾ばくもなく肺患に罹り、醫に東京に就き、攝養數年、會ま新潟新聞社長を闕く、同人皆甕出を推す、病未だ癒ざるを以て辭す時に余市島春城と東京に在り、百方勸說其歸を促す、甕出終に辭するを得ず、勉强事に從ひ、頗る斡旋する所あり、去年辛卯三月病再び作り、喀血數升、今春一月遂に沒す、甕出自から蒲柳の質劇務に堪ざるを知り、常に閑居養病の志あり、而して余輩の爲に阻せられ、竟に天年を夭折するを致す、憾余伯仁を殺さずと雖ども、伯仁余に由て死す、特に惋惜すべし、病後深く老莊の學を喜み、棄て禪理に耽り、燕居無事のとき往々香を焚て趺跏す、又甚はだ詩を嗜む、後其身を傷なはんとを慮りて之を禁ず、稿今存錄せず、僅かに二絕を記す、夜坐に云く、微雲澹月夜初涼。靜讀高僧傳幾章。一笑吾無隱乎爾。秋園吹送木犀香。椽尾股溫泉雜詠に云く、林間經雨水聲崩。靜坐山堂待

月昇。秋氣逐衣廉生捲。暗風吹亂一燈靈。

明治庚寅一月武者城川沒す、明年門人森繁英來て遺命を傳へ、且つ遺稿二卷を致す。余深く同社才人を失なふを哀み、中心感愴、再びこを閲するに忍びず、筐底に藏する年餘、今や詩話を編し、博く諸先輩の詩を取り、遂に亡友數子に及ぶ、豈獨り城川を遺すべけんや、城川名は澄字は鏡如、村松藩の人、幼にして怙を喪ひ窮苦中に成長す、藩自彊館を建つ、城川入て學ぶ、詣異非常、年甫て十三、助教に擢でらる、後母を奉て大關村に移住し、鄉學を督す、又水哉學舍を設けて子弟に教授す、學優にして行正しく、官數々褒賜あり、壬午秋忽ち來て余が社に參す、眉目清俊、手神都雅、一見して才子たるを知る、其詩を見るに及び、凄婉深至絶て俗習なし、余大ひに喜び、爲めに十二字を南酌す、城川亦賞音を得るを喜び、一篇を獲る毎に必らず先づ余に示し、吟筒往來殆んど虛日なし、生善く病み、而して吟詩に溺苦し、頭を乱書堆中に埋め、吟聲藥爐の聲と相和し、往々夜を徹し眠を忘る、老母其身を傷なはんことを憂ひ、時々苦勸すれども聽かず、之を嗜む益甚しく、又之を人に推し、文海一珠を編輯し、傳く同人の詩を取り、毎月刊行、十八九集に至る、既にして病益篤く、時々咯血す、老母之を憂ふる愈切にして、醫亦屢之を戒しむ、是に於て始て吟詩を廢し、蕭然一室靜修病を養ふ數年、竟に癒へず、沒する年三十、其病革るに及んで、自から詩稿を校理し、家人に囑して云く、死後必ず之を七松山人に致せと、又一絶を題して云く、藥爐經卷苦吟身。僅受人間三十春。一卷文章終寂莫。場雲後世定何人。嗚呼余子妻に非ずと雖ども、城川臨沒の托は即ち子雲を以て余に期するに非ざるを得ん、や、嘗て鶯溪玉峯二子の集を刻するの意あり、唯鶯溪の詩散逸元からざるを以て在再未だ果さず、爾後自笑翠溪鶴陰相繼で沮謝し、城川亦已に玉樓の招に赴き、諸子の詩眞に未だ其傳を得ず、他日合刻以て世問はんと欲す、先づ數首を取て話中に存す、新津寓樓次韵に云く、相逢澹無語。吟詠慰幽思。一病三春過。千愁兩鬢知。花香蕉藥處。雨氣上燈時。憶得前人句。遺興莫過詩。小病過旬日。空齋有所思。蒼茫千古事。辛苦一燈知。荒砌月來夜。敗簾花落時。蕭然邀客坐。讀書又絃詩。讀亡友星野江東遺稿に云く、廬堂筭雁送哀音。俯仰當年感不禁。殘墨空留筐底在。瘦容惟許夢中尋。一燈夜雨故人淚。半卷遺編寒士心。往事追思空太息。奇才萬古易消沈。得從弟片桐宕山書に云く、悠々相望欲黃昏。尺素看來旦斷魂。比歲凋零傷骨肉。如今淪落感家門。刀圭辛苦平生業。松菊荒蕪故里村。何日山園同剔燭。瀟窓風雨解殘醇。送坂口秋山遊東京に云く、不厭窮愁不厭貧。飄零同是困風塵。今宵暫酌一堂酒。明日又成千里人。別後音容惟夢好。燈前涕淚見情眞。征衫去上中山道。馬首花明古驛春。夜坐偶得に云く、風雨蕭々暮笛哀。剔燈人坐亂書堆。徹魂常向貧中典。警句多從意外來。白眼不須看俗客。黃金何處築高臺。世間無限閑名利。付與生前酒一盃。秋夜有感に云く、霜隕空山夜氣清。挑燈起坐旅魂驚。暗蛩繞砌秋將盡。缺月離雲夜乍明。慷慨有如彈鋏客。壯懷空憶乘槎生。通宵撫卷愁難寐。獨聽荒鷄五更。春寒に云く、小鼎篆煙沈。暗愁縈一脈。夜來春雨寒。人與梅花瘦。春村に云く、春村桑柘緑。中見雨三家。南園一犁雨。野翁鋤落花。空山讀書圖に云く、樹間星月照庭除。破屋聽秋蟲。影疎人與公同一趣。空山落葉夜看書。病中雜詩に云く、笑呼隣衲作詩朋。病起同參古佛燈。幻出空々雙影子。不知若箇是眞僧。

細流の詩、蔬筍の氣なければ方に佳なり、方外の友慶聞、自から鶴陰野史と號す、放達にして吟を好み、其詩蔬筍の氣なきのみならず、其人亦僧習なし、嘗て西京に遊び、東本願寺學寮に入る、佛典を修せず、專ら經史を攻め、常に喜で古英雄の事蹟を論ず、抵掌高談傍はら人なきが如し、庚寅春余其鄉を過て之を訪ふ、鶴陰大に喜び、酒を命じて欵留し、善く飲み善く談ず而して眉目の間時に愁容あり、復往日の如く快活ならず、余頗る之を疑ふ、別れて未だ半月ならず、卒に其訃を聞く、年僅に三十餘、贈醉石翁に云く、半生湖海倦風塵。古字了來香火因。烱眼看書寧諱老。白頭耽酒未言貧。論交二洛風騷客。逐隊東山羅綺人。不怪儒生還愛佛。樂天居士是前身。贈香谷畫史に云く、明窓手掃素縑塵。且喜衣冠未累身。筆硯儀消閒事業。酒盃長保醉天眞。詩才妙比浙西派。畫手高如明代人。好是優遊林下老。麈名長滿洛城春。春晩病中に云く、長齋靜坐日參禪。未免傷春目黯然。吟學老鶯千囀切。情緊殘篆一絲牽。衣邊寒透棗蘿雨。窓外綠鬬茶榻煙。底事維摩頻示疾。善愁大氣散花前。寒夜に云く、小院酒醒寒透衣。凍雲扶月上簾帷。殘燈半壁描吟影。好與梅花較瘦肥。題余園林月令藁本歌後に云く、一編殘墨脫灰塵。神物所歸如有神。地下館翁應首肯。百年後起即斯人。藁本即ち柳灣先生の手書なり、往年余此を獲て七古一篇を賦す、我與先生本同里。平生亦嗜彫蟲技。鄙心嚮往偷怙香。只恨百年後無後起。句あり、末語蓋し之を用ふるなり、鶴陰字は鳴天、中蒲原郡小戸村の人、寺高陰と號す、上宮皇子の祠堂あり、文化中其祖龍臺竺雲濤と北起詩選を輯せし處なり、余嘗て一

絶迄堂壁に題す云く、竹碧松青絶點埃。上宮祠外獨徘徊。詩思欲借神明力。孤鶴飄然天外來。

僧幽月暇耕と號す、新潟の人、少時耻堂先生の門に遊び、余と同學なり、詩を善し書に工みなり、近齋故あり交情中絶す、然れども其長自から沒すべからず、和野村生寄友人韵に云く、毎遇新涼別恨繁。慘然秋滿小樓軒。翠櫻紅燭空尋夢。落葉淒蟲又斷魂。南鴈不來風蕭殺。故人何在月黃昏。石壇無雨莓苔濕。更易斑々是淚痕。結一轉慘にして艶なり、女鬼の圖を見るが如し、覓に永年ならず、

建部小櫟名は含、中蒲原郡横越村の人、年十二三青木青城の門に入り、聰俊絶倫、神童の稱あり、庚辰秋余新潟に寓す、突如として來り訪ふ、詩筆甚はだ清く、酒に豪なり、醉へば則ち嬉笑歡呼、狂態百出、滿座絶倒せざるものなし、常に狎遊を好み、狹斜に出入して名節檢せず、余其の才あり行なきを惜み、痛く之を戒む小櫟佯はり聽て而して自放益甚はだし、一夕痛飲病暴かに發り、沈昏數日遂ひに絶す、生平喜で骯髒の語を爲し、往々傑作あり、時に余年少專ら艶體を尚ぶ、小櫟笑て以て假聲詩と爲す、蓋し其の婦女子の語に類するを嫌ふなり、一日同社相會して送春の詩を作る、小櫟詩先づ成る、笑て曰く、吾今日亦諸君の假聲を學ぶと、詩に云く、芳時一聲恨左繁。淚痕如塵雜酒痕。楊柳拖絲憐繞。茶蘼吹雪又黃昏。絶無聊賴唯春思。最易低徊是夢魂。祖道東皇何處好。殘鶯啼度落花門。生平傑作、今皆散失、獨り此假聲詩を存するのみ

小林寒翠斗五郎と稱す、小櫟の同里なり、東京に官遊し、後枋木縣師範學校長に任ず 近ごろ里人に問ふ、曰く物故已に久しと、森先生新文詩中一絶を載す云く、寶刀何年拂煙埃。銃砲固應堅壁摧。十二金人猶未鑄。西陲今又作兵來。蓋し丁丑西南の亂を詠ず、殊に奇氣あり、

僧圓空字は維天、蘿洞と號す、亦横越村の人、通琳寺に住す、詩を善し書法に工みにして、道行亦高し 秋日訪翠亭に云く、孤亭秋色遍。黃葉掩溪橋。鴉逐暮雲返。日衝幽峭遙。滴茶松底水。題句石邊蕉。吾性與公愜。澹然忘寂寥。又建部横渠なるものあり、舟行に云く、柳深藏艇影。蘆秀護鷗眠。二詩俱に詩選中に見ゆ、横渠名は道字は子伯、蓋し即ち小櫟の祖なり

細貝栗園名は資字は元卿、晩に遯翁と號す、古志郡六日市の人、平田篤胤に學び、尤も古典に精しく、兼て詩文に通す、青柳剛齋其遺稿に叙して云く、予交道甚狹、平素所兄事、不過細貝栗園小林炳文等數輩、而栗園最年高、該博强記、學無所不窺、剛齋素より儒名あり、炳文病翁と號す、文章學殖大藩に雄視す、余夙に其名を聞く、獨り栗園に於て生平に昧しと雖ども、未だ其人を知らざれば、其交る所を見る、栗園の人品亦以て定むべし、初夏偶成に云く、永日耽吟嘯。悠然倚綠柯。家貧留客少。心靜閱書多。圃小容鷄啄。籬疎信犬過。笑他雉檄子。熱鬧逐奔波。詩味高澹、陶韋の藩籬を窺かふに足る、山閑に云く、清風滿室如佳友。蒼樹連檐自好隣。亦佳句なり、頃日小林遂齋の處に於て、細貝清逸庄川松陰の京遊唱和を讀む、清逸即ち栗園の子、詩父の風あり、

山田雲槎名は尚志字は子義、三島郡川袋村の人、家素富て吟詩に耽り、細貝栗園と相友善し、夏日雜興に云く、永日催睡睡濃。起來小立倚窓櫺。幽花香進苔園雨。細水聲涼竹砌風。江上綸竿耽隱趣。齋頭書帙課吟功。黃昏久促觀螢侶。侵露村南步草中。初夏に云く、池中荷葉疊青錢。架上藤花簇紫煙。好事與時今後足。一簾閑坐永於年。一は北越詩選に見ゆ、一は國盟集に見ゆ

森田靜齋名は立字は君柔、一字甫參、加茂驛の人、刀圭餘事、吟詩に工みなり、不倒翁を詠ずる七律、北越詩選に見ゆ、乃ち其生平最得意の作、一時人口に膾炙す、然れども余其語俳諧を帶び、俗習に墮るを嫌ふ、新涼一首却て佳なり、其詩に云く、矮屋連旬苦火攻。秋回初覺健衰翁。梧鳴竹戰添風力。暑退涼生藉雨功。遠澗泉聲來枕簟。荒庭蟲語逼窓櫺。更深早覺新霜下。一片清輝月滿空。

越後法眼の名、本朝畫史に見ゆ、其人詳かならず、其畫亦傳はらず、近世僅吳俊明最も傑出し、之に繼ぐものは張嵐溪と爲す、嵐溪名は荃字は芳孫、一學香峯、三鎌驛の人、本姓長谷川氏、自修して張と爲す、弱冠東都に遊び、詩文を大槻磐溪に受け、畫を春[illegible]に問ふ、既にして菅梅關の山水を觀て、大に之を悅び遂に仙臺に往て梅關に從ふ、梅關其志に感ず、盡く奧秘を授く、後再遊すれば梅關已に沒す、乃ち其徒に就て多く粉本を獲て歸り、又妙義金洞諸勝を探り、之を眞山水に驗し、大に悟入する所あり、更に之を明清諸家の眞蹟に徵し、師學短を捨て、渾然天成、終に能く一家を成す、慶應元年閏五月病で沒す、享年五十二、磐溪嘗て其畫を愛し、一幅を獲んと欲す、嵐溪辭して曰く、技未だ熟せずと、近古史譚刻成に及び磐溪千里郵致して以て之に易んとす、其書未だ達せず嵐溪の訃仙臺に至る、磐溪大に悼惜し、遂に其墓に誌す、詩文今多く散逸し、僅に八木山一絶を記す云く、行穿林

籠、人迷濛。雨晴來翠色濃。乍見層雲崩一角。突中躍出絕奇峯。山嵐溪の上に在り、奇巖削立、鬼斧神工、峯頂老松樹あり、蒼鷹之に棲む、眞に一奇勝なり、余嘗て其眞景を梨洲翁三劒堂に觀る、筆墨蒼潤、氣韻流動、頗る逸品たり、余荆州の借を爲さんと欲す、翁余が意を悟て聽さず、妻煙髣髴、今猶夢寐中に往來す

中澤雪城名は俊卿、長岡の人、書を卷菱湖に學び、楷行端麗一家を成す、當時菱湖の書法海内に風行し門下數を受る者千餘人、雪城獨り傳燈を得たり、頃日其論書二篇を見る、方に知る臨池餘事詩に妍り、簡澹高古、作者に減ぜず、惜むらくは書名の爲に掩はれ、世多く知らず、其詩に云く、楷法貴嚴正。瀟灑存其中。鍾王已遠矣。河南及魯公。變化極精妙。形體各不同。後世志學者。方直以爲工。骨或弊瘦硬。肉或傷肥豐。誰知傳神訣。在積臨池功。行書貴衆妙。閑亭稱絕倫。其他諸墨帖。學榻多失眞。吾邦乏眞蹟。學世徒效顰。譬之學杜者。動作無病呻。詩書豈有二。萬卷始通神。功力進於學。品格存其人。譬之以下數語、一氣貫注、議論精確、古今の詩話書譜、數千萬言、皆此に盡く、蓋し斯道に於て三折肱を經しを知るべし、

李獻吉人に勗む、唐以後の文を讀こと勿れと、余亦生平甚はだ本邦人の詩を讀むことを喜まず、嘗て江村北海の日本詩選を藏す、久して亦之を忘る、頃日秋山弟古籠中より搜取して余に與ふ、中に片山北海先生の早春登江樓あり云く、孤客年々不得歸。度江梅柳又春暉。美人南國愁中草。高士西山貧後薇。書劍天涯唯滿淚。鶯花城外自芳菲。暮鴻送盡煙渡遠。獨倚樓頭歌式微。模擬の餘習を脫かれずと雖ども、沈雄厚渾、盛唐の遺音、書劍一聯感慨多く老杜に減せず、若し秋山弟微せば殆んど遺珠の歎あらんとす、因て憶ふ半生藏書數千卷に下らず、而して人事應酬、忙々終年、之を高閣に束ねるのみ、甚しきは其書目を忘るゝもの、日本詩選のみならず袁子才云く、富不愛看貧不暇。世間唯有讀書難。信なる哉

松山子楨の詠白一首、日本詠物詩選に見ゆ、余已に話中に入る、而して其人を詳にせず、又松貞吉なる者あり高田藩士、越後野史に見ゆ、嘗て高田人に問ふも、卒に知るものなし、余久しく之を疑がふ、日本詩選を見るに及んで方に知る貞吉即ち子楨の通稱、糸魚川の人なり、九日懷洛舊社に云く、去歲登高洛水濱。歸來復偕越後城陰。變遷人事愁何極。流轉年華感更深。今日金樽無共醉。舊時遭遇有知音。離群正負諸賢會。寂寞西風落帽心。秋夜有感に云く、陰雲天地暗。伏枕自凄其。寒雨撲窓夜。亂蛩近砌時。貧交無舊態。感興入新詩。不察幽懷切。轉增秋晚悲。江村北海評して云く、客歲子楨遊京師、受學魯堂、又學詩於余、詩才絕人、間有傑作、不解畫當爲北陸作家、此篇亦大有佳趣、其父名は造字は茂肅通稱勇右衞門、幽居に云く、白雲來去鳥聲閑。結屋小園秋樹間。隨意曲肱春睡足。有錢何用買青山。亦佳詩なり、

丸山湘雲星翁門下の詩人なり、余玉池吟社詩を讀で其詩を愛し、採て話中に入る、後丸山拳石の書を得る、自ら言ふ湘雲の義子なりと、其書に云く、家翁今年七十一、近歲微疾あり、久しく戶庭を出でず、然れども善飲健飯、意氣猶壯のごとしと、年來碩果晨星、獨り此老を存す、大に人意を强くするに足れり、聞く湘雲星翁に從て姜濃に入り、親炙數年、玉池吟社詩の成る、湘雲竹内雲濤と尤も選輯に力む、故に吟社諸子の生平を知る尤も悉す、余嘗て疑がふらく、橘三洲なるものは三島郡人ならんと、拳石の書に云く、橘三洲三島郡下除村の人、醫を以て長岡藩に仕ふ、嘗て長崎に遊び、淸客江芸閣と和唱の什あり、田中脩道亦長岡藩醫、田中春回の父なり、二人沒して已に久し、佐藤醒庵通稱半左衞門、小千谷驛の人、年七十に近し、老健猶存す、獨り高橋晴村里居詳かならず、蓋し湘雲親しく語る所なりといふ、因て憶ふ往年岡本黃石翁北遊、一日其寓に詣る、座に松井生あり亦星翁の門に及ぶもの、黃石翁云く、星翁晩年門下四散、臨終の際病床に侍するもの、獨り松井生あるのみ、故を以て先輩諸老の愛を得、湖山松塘二翁の如き、皆未だ面を謀らざるも、數々贈投あり、と、生名は溫、靜修と號す、大野驛の人、醫を業とす、二三年前星翁の書牘を賣るものあり、云く松井生に出づと、其人を問へば、云く已に亡すと、遺詩未だ之を見るに及はず、唯記す和湖山翁紀恩原韵三律、賜硯樓詩中に附す云く、一笑掀髯喜色浮。瑞雲光彩滿牀頭。每聞諸子登庸賞。既似吾翁寵渥優。即墨管城相戰際。鳳喈鸞鵠快心秋。也知美事聞殊域。唱和相爭賜硯樓。胸海寬於視海寬。波瀾捲去絕憂嘆。已聞玉德恩光大。更想篆文龍勢蟠。京洛傳稱名益重。藝林珍襲石重刊。積年心力盡王事。快樂終來從險難。敢言雨露潤枯根。邊鐵猶含道氣溫。珍重磨來堪養老。縱橫揮去自忘尊。鬱同侍賜千秋靜。桑帶餘馨萬古存。畫錦榮衣思往事。更留詩卷報君恩。

田中修道感懷、北越明治詠選に見ゆ云く、北風窄隙入寒惟。乍見堅氷合硯池。危行縱無忘死日。孤忠或有殉君時。古書節義吞聲讀。實際工夫和淚知。一片淸心天地鑑。雪晴月白不堪奇。余詠選を閱し、漫然看過す、秋山弟傍より指摘して曰く、是れ玉池吟社詩中の人に

あらずやと、余始て了然たり、細心書を讀む、吾家の子由に及ばざる遠し、

圓山溟北翁佐渡の老儒なり、友人小崎藍川渡邊漁村其門に出づ、藍川溟北文稿三卷を贈らる、中に山田貞吉の傳あり、其詩甚はだ巧みならずと雖ども、慷慨節義は便ち傳ふべし、貞吉名は卓字は從之、父を菊翁と云ふ、翁と同じく龜田綾瀨の門に學ぶ、貞吉亦綾瀨の門に書を讀み氣節を尙び、事忠孝に關するものあれば、之が爲に泣下す、遂に水戶に遊び、國政阿島帶刀に仕ふ、居る何ばくもなく母の病を以て致仕し、歸侍三年、母病愈ることあり、再び江戶に入る、時に洋人跋扈動もすれは國體を損す、加之洋學日に盛にして、儒者蟹冊を奉じて詩書と並せ講ず、貞吉憤然毎に人に語て曰く、古の洪水猛獸何を以て此に加へんと、又阿島氏罪を幕府に得て死を賜ひ自裁すと聞き、重て水戶に赴き、墓に謁して之を哭し、遂に留て太田庠の教督と爲る、會薩士白石彥之進密に攘夷の義擧を謀る、貞吉亦與る、已にして彥の擧動端ならざるを見て、其與に大事を謀に足ざるを知る、因て之と絕す事覺はれ、彥獄に下て死し貞吉亦坐せられて獄に下り、遂に以て瘦死す、時に年二十八、嘗て岳忠武文々山二公の傳及胡澹庵の封事を寫し、以て一軸と爲し、平居之を坐隅に掲げ、節を撃て之を誦す、又詩あり云く、歷險更無豪氣減○積年唯有感懷增○其抱負此を觀て見るべし唯憾むらくは傳中單越後人と稱す、里居を詳にせず、之を翁に質さんと欲するも、翁亦今春を以て下世す、耆宿凋零、嘆惜せざるべけんや、

大野安信字は克卿、通稱儉三郎、自から括囊居士と号す、楳華先生の弟なり、爲人豪邁不羈、書を讀み劍を擊ち、喜で兵略を談じ、古豪傑を以て自から命ず、戊辰の役、米澤藩兵を越後に出だす、藩侯嘗て楳華先生を識る、延て參謀と爲さんと欲す、先生時に江戶に住す、事を以て之れを辭す、藩士須藤兵八郞劍客を以て先生と友たり、又克卿と舊あり、因て之を進む、侯乃ち兵八をして親書を乃翁耻堂先生に致さしめ、克卿を請て客將と爲さんとす、克卿感激之に許し、馳て新潟に抵り、色部長門に軍門に會し、終に留て機務を贊畫す、既にして官軍海陸並び進み、北軍大に敗る、克卿亦米澤に走る、會流言あり克卿款を官軍に通ずと、兵八亦事を以て克卿の能を忌む、遂に爲めに擠陷せられて害に遭ふ、克卿狀貌魁偉、音吐鐘の如く、酒を縱にして鯨飮、醉へば則ち劍を拔て起舞、英氣人を壓、兵八甚はだ之を憚る、乃ち詐いて曰く、久しく軍旅に勞し、未だ故舊の情を盡さず、今鄕に歸る請ふ地主と爲て以て一夕の歡を罄さんと、因て酒を家に置き、克卿を招て共に酌み、其酣醉熟寢するを伺ひ、角牴數名を使嗾して倶に之を殪す、乱平らぎ、耻堂先生克卿の久しく歸らざるを憂ひ、楳華先生亦之を怪しみ、人をして藩に問はしむ、答て曰く、克卿陣中より逃亡し、之く所を知らずと、先生甚はだ之を疑ひ、私かに偵して其狀を得たり、因て大に怒り、直ちに藩侯を詰る、侯辭屈して百方陳疏、兵八亦髮を剃し先生の門に造て罪を謝す、先生怒り纔に霽る、遂に遺骸を收めて厚禮鄕里に歸葬す、實に明治四年の事なり、後數月余耻堂先生の塾に入り、親しく其事を聞く、因て克卿の遺稿を求む、已に散失す、野村鷲溪僅に一絕を記す云く、寒柝霜鐘暗夜潮○孤蓬獨掩雨瀟々○客心長記江都夢○月下探花泊柳橋○寥々短篇、未だ人意に慊らず、頃日肥田野錦川に逢て之を問ふ、云く克卿得意の七古一篇あり、意氣豪壯、短度後邁、太はだ其爲人に類す、今其稿を亡すと、錦川乃ち其從弟なり、今三島郡長たり

未修地主之儀　忍叨盛撰

外南之冥巻之三四

赤塚朴堂名は昌字は卓節、中蒲原郡大安寺村の人、家素富で學を好み遠遊良師を求めんと欲す、而して父母早く死し、弟妹皆幼、家事を幹するものなし乃ち多く書帙を購ひ、獨修獨學、兀々十餘年、其業大に進む、遂に帷を下して教授す、爲人謹厚篤實、已を奉ずる儉にして而して人の急を周す、長者の風あり、余本同里、幼にして外師に就き、甚はだ相識らず、丙子の歲、東京より歸る、年十八、朴堂已に四十、余を與に語るべしと謂ふ、訂して忘年交を爲し、同じく春雨吟社を創し、毎月輪番社友を會す、石黑北涯石黑一青僧鶴陰等其錚々たるものなり、庚辰八月、余移て新潟に寓し朴堂亦是歲十月を以て亡す、吟社遂に廢し、風流雲散の感に堪へず、朴堂技能多し、書畫琴棊皆能く境に入る晚歲始て詩を作る、亦風味あり、書堂に云く、書堂殘漏永○靜坐攤書看○映發梅花雪○湘簾月氣寒○夜聞兒輩吟詩に云く、淸音朗々徹書帷○一穗殘燈半灺時○自覺老夫情興好○隔窓稚子夜吟詩○

本間箇菊堂と號す、北蒲原郡稻荷岡の人、教授を以て業と爲す、狷介奇行多し、人其書を索むるものあれば輙ち富嶽の詩を書して之を與ふ云く、欲識神州靈秀氣○天邊一朶玉芙蓉○他作未だ之を見るに及ばず、

東北地寒く、花候毎に遲し、暮春雪消し、暖氣驟かに加はり、百花繽紛、一時並び開き、人をして應接暇あ

在津紀事 吉田孔東多能美
男又通医ハ多書籍留客
借觀

らさらしむ、却つて一奇觀上國なき所と爲す、葛因是の句に云く、梅桃杏李無次第○二十四番一時風○眞に能く實境を寫す、今に至るまで人口に膾炙す、而して語氣稍や俗習に墮つ、內藤鐘山亦た詩あり云く、二十四番無次第○梅花風接棟花風○同一語意、恰も是れ俗を化して雅と爲す、葛詩と併傳するを妨げず、鐘山の茅庵詩稿收むるに勝へず、往きに雋異を標す、多く七律を取る、七絕猶ほ遺珠の拾ふべきものあり、夏日戲作に云く、臨池終日小窓中○笑見群生亦學翁○雨壁蝸涎成篆樣○晴園木筆忽書空○秋園に云く、雨後園林霽日幽○閑行獨立小池頭○荷花謝盡菊花未○紅蓼白蒲暫領秋○聞蟲に云く、冷煙寒月夜三更○旅館凄其做底情○更使鐘兒啼近枕○燈殘々裏夢魂驚○田園雜興に云く、荷鋤負耜逕荒蕪○紅甲紺紅芽滿一區○正喜夜來微雨過○蔬畦潤土融酥○闕來に云く、閑來步屧過平橋○浦溆新泥雪半消○定識江梅春信近○水邊楊柳已搖々○春夜不眠に云く、輕寒惻々透簾帷○薄病懷人夜眠遲○屈指上元三五日○梅稍橫月宛燈枝○晚春に云く、慵困暗添愁○槌喚侍兒簾上鈎○薄暮東風頻作惡○飛花如雪入書樓○除夜に云く、客舍燈前獨自嗟○少年如夢已差過○賣痴獻醜頑猶在○一笑吟翁長物多○語必らず新なるにあらず、意必らずしも奇なるにあらず、輕縣清脆、自是一種の神韻、當時學者多く、理學を以て相高ぶり、詩文に涉るもの少なし、乃ち詩文に涉るも亦多く經生の氣習を脫せず、鐘山獨り此弊なし、是余が鐘山の詩を愛し、一再表出するを厭はざる所以なり、野村養拙翁風流好事、能く先輩の逸事を語る云く、鐘山蒲原郡に遊び、村松濱佐藤氏に寓する最も久し、佐藤氏家素と富む、凡そ異書僻帙鐘山求むる所のもの、盡く之を購ふ、鐘山因つて朝夕漁獵するを得て、其學遂に鴻富を窮むと、昔し厲樊榭馬氏玲瓏山館の藏書を得て文益奧博、料らざりき吾越亦一馬氏あらんとは、附誌して以て佳話を存す、

宛陵禽言の詩を創めしより、東坡放翁皆倣體あり、藍澤南城早春講堂聽禽語に云く、院外風輕枝不鳴○屋烏鶯雀賀春聲○舜々相呼還禹々○林禽亦識聖人名○舜々雀聲、禹々烏聲、亦禽言詩の類なり、又春殿詞に云く、羽戟振々朝月正○城門曉闢呵聯聲○列侯宗室入連璧○劍履下輿昇殿廷○功臣不遇御牀尊○陪列同叨醉飽恩○而今武辨皆知法○制禮何須假叙孫○武德不忘戲亂年○戎裝御具爛春筵○此夕宴歌聯百韵○君王先唱止戈篇○王使賀春歸自京○恭承御座待朝廷○且問往還何所見○東西風靜海無聲○莊重典雅、盛唐の遺音、幕府の盛時を想見すべし、惟其稱呼僧に涉り、至尊と分つ所なしゝるなり、

頗る失體と爲す、然れども當時幕府大權を握り、威儀多く帝王に擬し、史家又從て之を曲成し、稱呼の濫已に久し、獨り南城を咎むべからざるなり、南城の父北溟名は仲明字は子晋、句あり云く、撑欅從來甘廢棄○煙霞畢竟是沈痾○子朴齋名は美中、亦儒名あり詩を善す、余未だ之を見るに及はず、

本邦中世、干戈相繼ぎ、英雄雲のごとく興り、元龜天正の際最も盛なり、詠史家材を此に取らば、以て其の辨博富贍の才を馳騁するに足るべし、而して近世獨り山陽頼翁十二律を推して檀場とし、此外寥々嗣音少なし、何ぞ詠史詩の出色を難ずるや、吾越獨り三宅瓶齋此體に工みなり、集中詠史十二絕あり、今其の半を錄す云く、父祖奇謀善用軍○八州豪傑聚如雲○興亡是命君休悔○早有遊僧謗桀文」悖逆曾疎骨肉親○何心亦作緇衣身○惜君功罪難相贖○鋒鏑徒嘗戰沒人」精騎八千鎧仗鳴○忽乘曉霧斫牙營○誰知神算多奇變○隔水聞他夜嘆聲」歷海幢旌破怒濤○惜君武斷太粗豪○徒將百萬雙奴血○熱滴長汚日本刀」三千赤甲似潮傾○單騎回鑾涉水聲○垂老更逢韃靼日○休言隻鎧主恩輕」一假虎威令大軍○狐疑悔不鴆謀臣○夢中握字君知否○天命已歸日下人○風神氣魄、全く頼翁を學ぶ、而して頼翁は七律を以てし、瓶齋は七絕を以てす、蓋し同輩を避くるなり、

水落雲濤詩人なり、酒人なり、一日酒を飲まざるなく酒を飲めば詩を吟ぜざるなし、嘗て詩稿を琴春樵に寄す春樵笑て曰く、是雲濤之嚢雨也、卷ヒ定帶酒氣矣雲濤の詩實に酒に得るもの多きに居る、故に酒趣を述るもの尤も妙なり、余嘗て其陶瓶子の詩を錄す、今又飲酒止酒二篇を得たり、酒餘に云く、當愛人飲酒○而惡酒吞人○苟無被酒吞○不妨飲酒頻○飲之天地大○飲之四時春○所以我卿盃○一日不離唇○水樹或山酌○月夕又花晨○破憂非無力○釣詩如有神○醉倒長安市○獨醒湘水濱○堪笑唐太白○可憐楚靈均○靈均與太白○知味雨未眞○止酒に曰く、宜乎孔北海○不守新律令○我亦近止酒○無由被愁城○非畏二豎子○爲乏孔方兄○難將金龜換○空負玉仙傾○忍斷盃中物○何期身後名○對客口慵言○呼童若堪烹○罐邊殘菊色○檻頭賣蟹聲○有似別美姬○花月難忘情○酒を得れば天地を睥睨し、酒を失なへば一室に悁惱す、眞情極痴の處、即ち極妙の處なり、山田霜筠言ふ、雲濤少さゝとき涓滴の量なし、紀州に遊ぶ日、一醵戶の夷講に招かる、夷講即ち邦俗杜康を祭るなり、盡飲夜を徹するを例とす、醉客あり大盃を持して雲濤に屬す、雲濤堪へざるを謝す、客可ず、稍慢侮の語あり、雲濤憤然、直ちに其盃を奪て一口之を盡す、擧

座皆驚く、是より始て酒味を解し、終に飲量人を兼ぬるに至る、奇と謂べし、雲濤集中、弘化嘉永二稿最も精華と爲す、霜筠天保稿を示さる、亦多く下らず、中秋に云く、露洗風摩素影浮。可容纖翳障詩眸。霜華鋪地踏無跡。水色滿天凝不流。孤客吟寒潘岳室。幾人醉倚庾公樓。自悲二鬢頻爲厄。虛過年一度秋。除殘に云く、筠箕艸帚抄冬天。百尺長竿掃瓦椽。尋穴鼠如秦逐客。離堝雞似楚遺賢。碧絲不結蛛檐網。銀篆全消蝸壁涎。却有殘痾難洗淨。直從今歲到明年。初寒に云く、竹院夜吟肩易聳。銅瓶朝嗽齒先知。冬至に云く、山帶雪光晴射眼。梅偷春信笑窺檐。書感に云く、學醫不啻肱三折。求句誰能手八叉。舞兒涌に云く、白沙近接須磨浦。青靄遙分淡路洲。貧病に云く、花時寂莫同秋候。壯氣消磨似老人。中秋に云く、從未圓時心有待。至至滿處思纏寧。黃蘗山に云く、層樓突出青松頂。仄徑斜通翠竹間。常磐に云く、覆巢未必無完卵。剖蚌猶看孕寶珠。又結語最も妙なるもの、書鍾馗に曰く、須臾日出消無迹。恰是明皇夢覺時。殊に警拔なり、五言雄岳に云く、地古神祠肅。山深喬木多。南紀に云く、暑早蚊知夏。年豐麥報秋。寄玉佩に云く、好夢呑丹篆。微才愧白眉。秋園刈草に云く、螳螂怒疎體。蟋蟀驚移居。富岳に云く、絕頂唯看日。成隣只有天。冬雨に云く、翳鏡遙

聲催肅殺。十年八事感沈浮。風吹老樹鳥鳴惡。月照長河鴈影流。聞道江湖多盜賊。男兒埋骨果何州。寄人在獄中に云く、敢望窮通問上旻。激昂徒作楚囚人。文追蘇老漫論世。策擬賈生還誤身。千載汗青應有日。十年血碧未成塵。滿腔幽憤無由遣。雨慘風淒獄裏春。和家君櫟陰春興韻に云く、栖遲林下避紅塵。移竹栽花興味新。園樹風輕呼友鳥。梅窓日永讀書人。可知榮達元同夢。且喜毀譽不到身。箕踞高吟心所欲。自言天地一閑民。若溪雜詠に云く、幽溪橋斷水浴々。峭壁秋高兩岸屏。一叫山梟不知處。林梢弦月帶煙青。遷堤春遊に云く、追尋杜牧水嬉遊。一棹來登遷上樓。日暮酒醒寒較重。春衣脫在柳陰舟。題畫に云く、嶙峋雨初霽。山翠入書堂。瀟々欄南瀑。高寒叵久望。氣魄沈雄、風神高朗、時に前七子の典型を見る、涵養懈ちずんば、作者の域に躋り難からず、惜かな夫折未だ才を竟ず、又秋階掃葉夕陽人の七字あり、亦妙、

清人始皇を詠ずて云く、徐市樓船覓不還。祖龍旋已葬驪山。蓬萊覓得長生藥。眼見咸陽三月煙。通首語意俱に同始皇を詠ずて云く、東海仙人去不還。驪山埋骨草芊々。祖龍果得長生藥。眼見咸陽三月煙。通首語意俱に同ト、何ぞ其れ蹈襲の甚しき、村上半牧題桃源圖に云く、祖龍答得長生術。洞裏桃花亦不存。別に新意あり

詞は詩の餘なり、詩を學ぶもの固より、染指すべき所なり頃日武者堀川の遺稿を見るに、後に數闋を附す、漁歌子閨情に云く、十二簾波廿四橋。檀郎夢裏好春宵。蘭燼落。麝煤消。阿儂庭院雨瀟々。如夢令春閨に云く、小院闌燈明滅。剛是春寒時節。孤枕淚兒多。幾處玉簫吹徹。凄絕。凄絕。夢外一簾殘月。輕俊怜悧、絕世聰明人の語に算す、塡詞一道吾邦未だ闢けず、田能村竹田塡詞圖譜の著あり、人始めて詩外に別天地あるを知る、然れども竹田實に詞を解するものに非ず、其譜する所を見れば、未だ僧父の面目を免かれず、近時森槐南靈異特絕の才を以て詞壇に崛起し、始て其大成を集む、城川未だ之に比するに足らずと雖ども、吾越に在ては亦華路藍縷山林を啓くものと稱すべし、

建部小樓新潟に流寓し、一夕病で沒す、變匆卒に發り、親戚故舊之に會するに及ばず、遺稿皆散失す、余僅に艶體詩一首を錄す、亦其本色に非ず、意頗る之を憾む、昨忽ち北見南顧の書を得る云く、一友人小樓の遺詩を藏す、足下の之を求むるを知る、謄寫以て贈ると、眞に有心人なり、因て再び數首を存す、丁丑秋日感懷に云く、單身孤劍復逢秋。客思低徊不易收。一夜腦

野寺滴竹靜山窓。冬晴に云く、雪消山露骨。氷解水生痕。雪江獨釣に云く、靜於僧入定。樂似客賭棋。亦妙、之を要するに雲濤の詩尊ばる白描を用ひて鍛鍊甚はだ深く、摹寫景物、心に得て手に應ず、一字穩惬ならざるなきに幾し、之を近清人中に求むれば初白老人以て比すべし、然れども甌北初白の詩を論ず、其白描太はだ多く、稍寒儉を覺ゆるを嫌ふ、雲濤亦此短處あり、故に長篇動もすれば千百言、殊に繁冗を覺ふ、此外更に一大病あり、筆墨の間一點の村氣ある是なり、余諸家の詩を論ずる、概ね譽詳ありて譏詞なし、獨り雲濤に於て之を道ものは、蓋し此老詩名震爍、北越近代の一大家たり、固より經儒學醫の流、餘事詩人と作るものゝ比に非ず、是れ余が仔細に評量せざるを得ざる所以なり、長を揚げ短を抑し、公論自から見はる、故に一語之に及ぶ、

佛の家に出入す、因て其號を命て空花道人と曰ひ、勤めて意を吟詠に注せしむ、晩渡に云く、陣々西風吹帽斜。渡頭停杖立平沙。鷺聲驚起因何事。知是撐舟掛菊花。較目あるものに勝れり、折枝は賤業なり、而して詩を善すること此の如し、異なりと謂ふべし、吾越又譽者融伯あり、岩洲尾の鷗盟集に見ゆ、長岡の人、姓氏傳はらず、蓋し亦空花道人の流なり、不寐に云く、秋來病容欲眠難。夜々窓前到月殘。滿屋繁霜白于雪重衾不敵五更寒。詩原と甚はだ佳ならず、惟思ふ失明人韵を捜し字を捜す、毒寓苦心の能く及ぶ所にあらず、余爲に潤色之を存す、

吾邦詩家、方外多く閨秀少なし、五山詩話採取最も博し、而して僅々八九人を得るに過ぎず、況や余が詩話の採る所は北越の一隅に止まる、何ぞ多きを望むを得んや、然れども開卷以來未だ一個の粉黛を見ず、特に索莫を覺ふ、嘗て聞く錦袖女史なるものの王村恕堂の妻なり、本儒家の女、少して文君私奔の事あり、夫妻漂泊、來て西蒲原郡槇尾村に寓す、善詩工書、童蒙に授くるを以て業と爲す、神保老人國風詩一首を示さる、今其稿を亡なふ、越後人物志丹羽思亭の序を辨す、十三童女蘭香の書なり、清水老人言ふ、蘭香名は馨田代氏、新斥の人書法遒秀妍美、最も擘窠大字を善す、笄年誤て匪人の妻となり、落托以て死す、名檢珏闕、已に取るに足るなし、又詩あるを聞かず、獨り瑳葩女子なるものあり、見附驛の人、鷗盟集に見ゆ、詠菊に云く、一家清操誰相似。冷蕊凌霜綽晚天。蓋し亦清操の女子なり、惜かな名氏傳らず、詩亦佳ならず、野昌鶯溪妹あり名は萩といふ、明慧絶倫、讀書を好み年十二三、昭明文選朗々口に上す、鶯溪沒後、家計太はだ艱なり、自から奮て女子師範學校に入り、卒業後女學教師と爲り獲る所の俸給、盡く二弟の學資に充つ、卓然たる女丈夫なり、嘗て詩を乃父養拙翁に受け時々又余が評を索む、既にして去て和歌を學び復詩を作らず、曰く詩筆軟弱を忌む男子に宜し、歌詞柔婉を尚ぶ女子に宜しと、何はくもなく二弟俱に癈疾を以て沒し、身亦尋で亡す、一生字せず、號を命せず余爲に其詩に題して秋草閑遺稿と曰ふ、蓋し萩字を拆ては即ち秋草なり、春日閨詠に云く、小樓半啓碧窗紗。放任殘書到日斜。一笑東風强解事。浮簽片々盡梅花。旭影熙々散水陰。不知夜雨濕深苔。莫言今日請新客。早起開簾進燕來。海棠窓下午陰明。倦繡渴思啜雪英。巨耐侍兒呼不至。隔花遙聲打毬聲。夏日閨詠に云く、夕陽低映小柴門。薄暮尋源到凌軒。榴火近欄紅一點。猶疑窓紙帶餘温。暮衣樓上挽蓬埃。隔夜開箱趨一回。

點弟要敎儂蹴錯。今朝早起寫書來。詞殊に温藉、婦女の口氣を失なはず、才ある此の如く、竟に處女を以て終る、明の胡元瑞古今能文女子十數輩を擧ぐ、率ね皆寥落不偶、或は當年に夭折し、或は晚歲に沈淪し、或は伉儷參商、或は名檢玷闕、信に造物才に於て忌ざる所なきなり、余詩數を讀む毎に、輙ち爲に卷を捲て大息す、放戲寧ろ獨り漢土のみ然らんや、

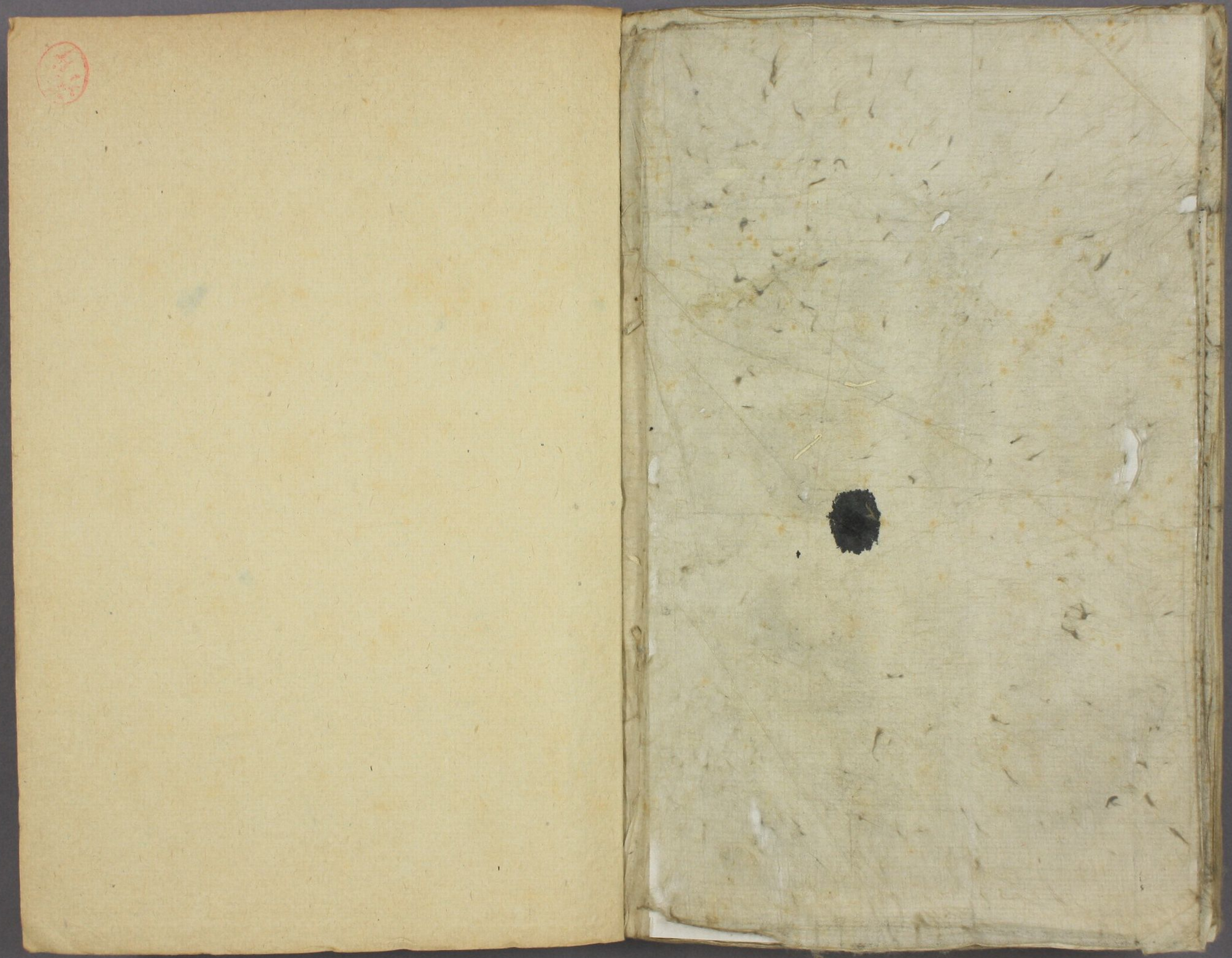
清人の句に云く、披沙三萬斛。檢得寸金難。選詩の難きを言ふなり、余巖洲尾の鷗盟集に雲洞の北越詩選を見るに、霜臺公より近代の作家に至るまで、網羅殆と盡く、浩博と稱すべし、古來北越の詩を選するもの僅に是二書あり、故に北越の詩を採らんと欲するもの、先づ此より檢捜せざるべからず、而して其選する所に足るべきもの、寥々殊に少なく、殆と三萬斛沙中の寸金なり、豈北越詩なき是の如きか、抑も選未だ人を得ざるに由るか、徐而庵云く、詩之等級不同、人至那一等位地、方可看得那一等位地人詩出、學問見識、如基力酒量、不可勉强也、余洲尾雲洞の詩の等級高からざるを見て、即ち其選の精當ならざるを知るなり、試に一二を擧て之を證せん、雲洞柳灣の詩を取る海棠一首、洲尾菱湖の詩を取る淺間山畫山水二首、此れ唾餘を拾て璣と爲すなり、加藤北溟經學を以て詩を作り、瑰麗絶凡、而して二書の取る所は俱に淺率語を成さざるに幾し、其他以て類推すべし、然れども二書文化文政の間に出づ、當時文運勃興、作家輩出、而して世を距る已に遠く、人多く記せず、僅に其姓名を知るを得るものは、二書あるを以ての故のみ、惟其流傳博からず、今殆んど獲がたし、余恐くは後來玉石俱に湮滅せん、乃ち爲に沙を披て金を檢し、一括して以て之を存す、富取行德字は之則、地藏堂の人、芳野覽古に云く、芳野春荒草木寒。當年帝跡絶鳴鑾。君王獨悔南山狩。盜賊寧憐北闕殘。典曆空頒雙日月。朝儀猶見舊衣冠。興亡漫道關天命。任將從來誤築壇。釋僧祓押付村の人、春郊に云く、獨立風前望落暉。東郊無處不芳菲。馬聲廻合煙花外。知有踏春公子歸。棒圓乘苦山と號す、高田の人、爐邊雪佛に云く、圓得瓊花塑佛身。嚴然爐上假容新。無端示得温槃相。萬法都歸空即眞。澁谷文甲深淵と號す、山崎村の人、至日に云く、殘冬急景易斜陽。今日纔加一綫長。窓下閑人校書業、課餘添得兩三行。神保宣杏村と號す、燕驛の人、春日に云く、長堤草軟綠參差。携酒躊躇步屐遲。取次看花春意好。風吹醉帽不寒時。釋定榮南岳と號す、水原の人、春日偶作に云く、簾幕風輕細雨餘。前山露處竹陰疎。日長深院無人到。靜讀東窓種樹書。釋見明松港と號す、松

寄村の人、驟雨に云く、黒雲如墨度江隈。忽聽南山雨起雷。一陣涼風收霹靂。芭蕉葉外夕陽來。釋義觀神岳と號す、白根驛の人、山寺に云く、颯々風搖石上松。樓門高聳對雲峯。闔山齊熟午天睡。不禁村童戲打鐘。芳澤元禮字は成文、竹翠と號す、田上村の人、信川堤上看菜花に云く、江頭隱見幾人家。聚落鷄鳴驚不肆。今日太平眞有象。黄雲十里野畦花。原敬鵲齋と號す、新堀村の人、寄良寛師に云く、飄然振錫出塵寰。蹈遍雲煙萬疊山。寄語洞天秋月夜。拾收桂子落人間。市川宣仁字は慰庶、何陋軒と号す、加茂驛長、暮春に云く、一片落花輕障埃。便看蟻道築高臺。加藤文彰字は伯鳳、白根驛の人、秋寒に云く、今年有閏秋寒早。白雪嶺連紅葉山。中雪湖宮澤村の人、風梅に云く、片々落花團机上。畫成大篆以前文。藤竟臧宕川と號す、長岡の人、夏夜に云く、醒月糢糊花影醒。一聲社宇霧邊山。鈴木惠字は仲和、淡津村の人、閑況に云く、絶無人處饒清味。滿院清風十丈松。清高芝田と號す、四谷村の人、早秋に云く、松影婆娑桐影醒。一時和月上紗窓。又詩童諸橋良大竹朋、今町の人、倶に懷友の詩あり、諸橋云く、一夜月明天似水。太湖心裏放輕舟。大竹云く、一夕故人江上去。青山無數白雲多。

詩話篇を累ねる百數十回、明かに収拾未だ盡さるを知る、惟獨力限りあり窮せざるを得ず、今且つ筆を閣し、將に他日を待て續話を擧げんとす、博雅の君子幸に教を吝むなかれ、

拙気篇

與四十五人 淳雲對馬守安友信陸奥守安倍信孝等因之對馬守安友信陸奥守安倍信孝等因之

河本式字貫之號以直有仰人初為医生稍正直后高敗稍壯太郎文久戊午正月十六日

[illegible]